

財團法人八尾市文化財調査研究会報告57

- I 恩智遺跡（第7次調査）
- II 郡川遺跡（第1次調査）
- III 神宮寺遺跡（第1次調査）
- IV 花岡山遺跡（第2次調査）
- V 水越遺跡（第2次調査）
- VI 水越遺跡（第3次調査）

1997年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

財團法人八尾市文化財調査研究会報告57

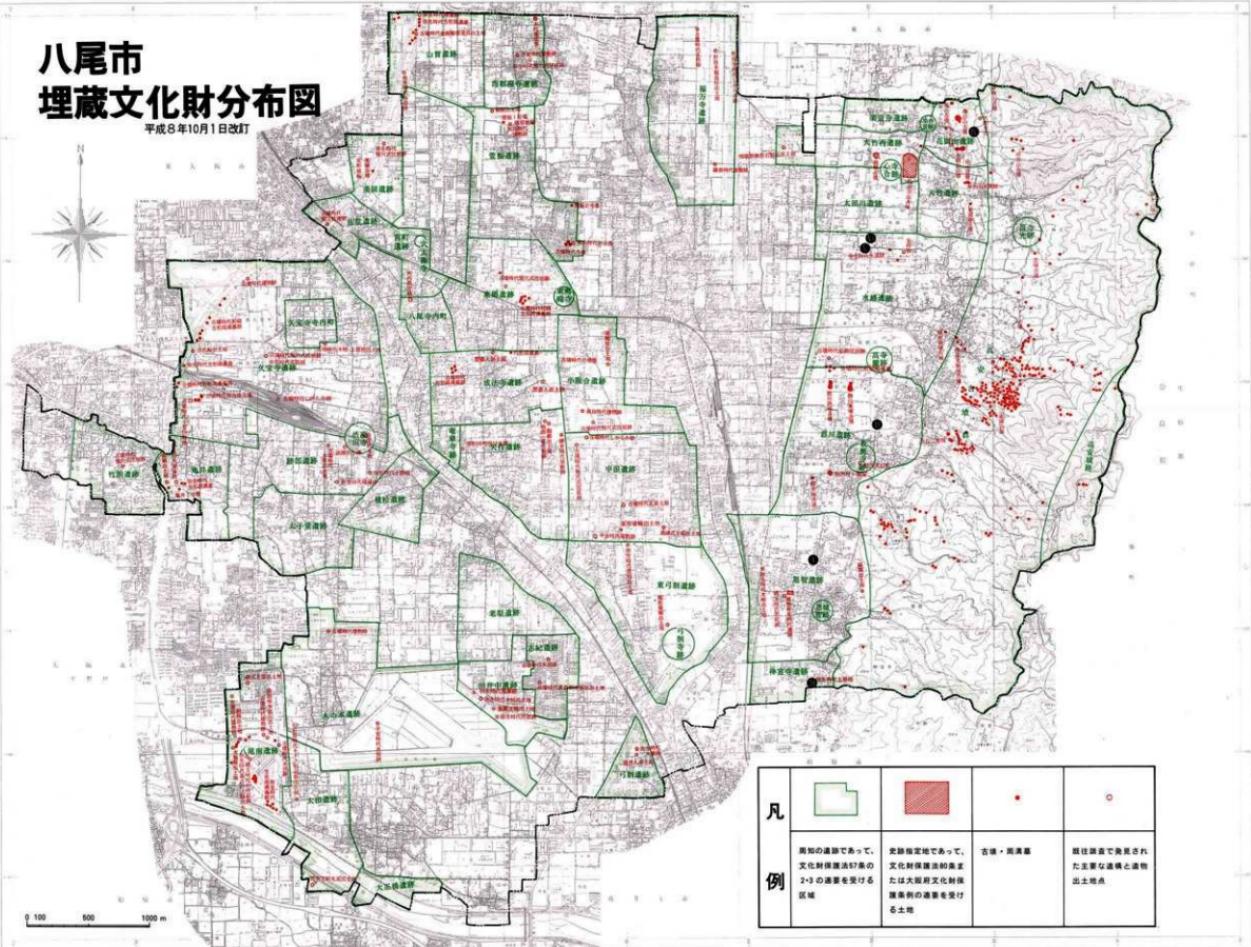
- I 恩智遺跡（第7次調査）
- II 郡川遺跡（第1次調査）
- III 神宮寺遺跡（第1次調査）
- IV 花岡山遺跡（第2次調査）
- V 水越遺跡（第2次調査）
- VI 水越遺跡（第3次調査）

1997年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



## はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しています。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、恩智遺跡・郡川遺跡・神宮寺遺跡・花岡山遺跡・水越遺跡の遺物整理が完了し、報告する運びとなりました。これらの遺跡は、八尾市の生駒山地西麓の扇状地に位置する縄文時代から近世に至る複合遺跡であります。神宮寺遺跡第1次調査では、弥生時代中期において豪棺やそれに伴う遺物が検出され、当時の埋葬施設を知る上で大変貴重な調査であります。また水越遺跡第2次調査では弥生時代の環濠集落が検出され、当時の集落構成の在り方を知る貴重な資料が発見されています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、これらの発掘調査が関係諸機関及び地元の皆様の多大なるご理解とご協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 木山丈司

# 序

1. 本書は財團法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査成果の報告書を収録したもので、内業整理の業務は各現地調査終了後に着手し、平成9年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
  1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・IV－成海佳子、II－原田昌則、III－岡田清一、V－西村公助、VI－高秋千秋で全体の構成・編集は高秋が行った。
  1. 本書掲載の地図は、八尾市役所発行の2,500分の1（昭和61年8月）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改正）をもとに作成した。
  1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面（T.P.+）である。
  1. 本書で用いた方位は磁北及び国土座標の真北である。
  1. 遺構は下記の略号で示した。  
 穴住居－S I 据立柱建物－S B 井戸－S E 土坑（土塙）－S K 溝－S D  
 小穴・柱穴－S P 落込み－S O 土器集積－S W 自然河川－N R 不明遺構－S X
  1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。  
 弓生土器・土師器・瓦器・埴輪－白 須恵器・陶磁器・鉄製品－黒 石製品・木製品・瓦・輪羽口－斜線
  1. 各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成しており、市民の方々に広く利用されることを希望する。

## 目 次

### はしがき

### 序

### 八尾市埋蔵文化財分布図

I 恩智遺跡 第7次調査	1
II 郡川遺跡 第1次調査	29
III 神宮寺遺跡 第1次調査	41
IV 花岡山遺跡 第2次調査	81
V 水越遺跡 第2次調査	105
VI 水越遺跡 第3次調査	157

### 報告書抄録

I 恩智遺跡第7次調査（O J92-7）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市恩智北町4丁目650に所在する八尾市立南高安小学校で実施した屋内運動場建て替え工事に伴う恩智遺跡第7次発掘調査（OJ92-7）の報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書（八教社文第埋173号・平成4年2月24日付）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成4年6月9日から8月7日にかけて、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は、指示面積（建築予定面積）約1000m<sup>2</sup>のうち約860m<sup>2</sup>である。
1. 内業整理は、調査に並行して隨時を行い、平成5年3月に終了した。
1. 現地調査および内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである（五十音字順）。磯上サカエ・澤井 幹・中川義朗（現阪南市教育委員会）・西田 寿・能勢直樹・宮崎寛子・村井俊子
1. 方位は磁北である。図面の縮尺については、ことわりのないものに限り、遺構は50分の1、遺物は4分の1である。

## 本　文　目　次

第1章 はじめ	1
第2章 調査概要	4
第1節 調査方法	4
第2節 調査経過（日誌抄）	5
第3章 調査概要	9
第1節 地区割	9
第2節 履序	10
第3節 検出遺構と出土遺物	12
1) 1区の概要	12
2) 2区の概要	15
3) 3区の概要	18
4) 出土遺物の概要	19
第4章 まとめ	20
付 表	21

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図.....	2
第2図 調査区設定図.....	9
第3図 柱状図.....	10
第4図 S K1101・S K1102断面図 .....	12
第5図 S K1103・S K1104断面図 .....	13
第6図 S K1201断面図.....	14
第7図 S K1202断面図.....	14
第8図 S E2101断面図.....	15
第9図 山上遺物実測図.....	19
第10図 壁面図.....	23・24
第11図 第1面平面図.....	25・26
第12図 第2面平面図.....	27・28

## 図版目次

図版一 1区	
第1面全景(南から)、第2面全景(南から)	
図版二 1区第1面	
S K1101(西から)、S K1101・S K1102(北から)、S K1103・S K1104(西から)	
図版三 1区第2面・下層トレンチ	
S K1201(西から)、S K1202(西から)、下層トレンチ西側壁面	
図版四 2区	
第1面全景(南から)、第2面全景(南から)	
図版五 2区第1面	
S K2102・S K2103(西から)、S K2104・S K2105(西から)、S D2101(西から)	
図版六 2区第1面・第2面	
S E2101上層・S K2101(西から)、S E2101下層(西から)、S K2201・S K2202 (西から)	
図版七 3区	
第1面北部 (北から)、第2面北部 (北から)	
図版八 出土遺物	

## 第1章 はじめに

恩智遺跡は、八尾市恩智北町・恩智中町・恩智南町一帯に所在する旧石器時代以降の複合遺跡で、生駒山地西麓から広がる扇状地上に位置している。遺跡の北には郡川遺跡、南には神宮寺遺跡が接し、玉出川を挟んだ西には東弓削遺跡が位置している。一方、東の山側には、古墳時代後期の群集墳として名高い高安古墳群や、銅鐸の出土地などが控えている。

遺跡が立地する扇状地は、周辺の生駒山地西麓の中ではかなり大規模なもので、裏山の深い谷筋から西へむかって大きく張り出している。この扇状地の中心部、恩智中町3丁目に所在する「天王の森」と呼ばれる広場は恩智神社の御旅所で、かつて恩智神社が鎮座していた場所であるが、この扇状地は、この「天王の森」周辺を先端部とし、ここから崖状に北・西・南の三方へ急激に一段下っていくことが、地図のうえからも認められる。

恩智の旧集落の近辺の田畠では、古くから遺物が散見されることで有名であったが、過去の調査で、旧石器時代から弥生時代にかけての遺構や遺物の存在が明らかにされたことから、1943年（昭和18年）、「天王の森」に「恩智石器時代遺跡」の碑が建てられた。これらのことから、この「天王の森」付近を中心として、遺跡範囲が想定されていた。

ところが、近年の調査では、この「天王の森」よりも西側、扇状地の先端と沖積地の融合点にかけての恩智川周辺でも、弥生時代から古墳時代にかけての遺構や遺物が多く検出されており、遺跡の範囲は西側の低地の部分にまで及んでいることが判明した。当調査地は、この「天王の森」の北側、扇状地の北西側の縁辺部にあたっている。

恩智遺跡では多くの調査がなされているが、当調査地の近辺に限れば、これまでに3度の発掘調査が行われている。まず、今回の調査地である南高安小学校の敷地内、当調査地の北隣では、平成2年度に八尾市教育委員会による遺構確認調査（恩智遺跡90-10）が行われており、その結果、現地表下1.2m前後（T.P.+17.8m）で、鎌倉時代（13世紀代）の炉跡状遺構が検出されている。また、同小学校南側の道路部分では、当調査研究会が平成3年度に発掘調査（OJ91-5）を行っており、その結果、現地表下1.1~1.2m（T.P.+15.8~18.5m）で、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を検出している。さらに西200m地点の調査地（恩智遺跡91-335・OJ91-6）では、現地表下0.8~0.9m（T.P.+11.2~11.7m）で、縄文時代後期～古墳時代の遺構・遺物を検出している。

これらの調査結果から、当遺跡では、扇状地西側の縁辺部だけではなく、北側の縁辺部でも、縄文時代後期にまでさかのぼることのできる遺構・遺物のあったこと、さらに鎌倉時代（13世紀代）の遺構が存在することも明らかになった。



第1図 調査地周辺図(1/5000)

表1 周辺の免屈調査一覧表

番号	調査(発掘)年	調査範囲	調査場所	調査期間	文 献
1	市教委	防火耐火帯	忠臣町(天の戸)	74/12 75/10/1～76/12 76/10/1～77/12/31	「八咫小西与五郎の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「防火施設 I」 「防火施設 II」
2	民生堂保育園会	忠臣(2段)	忠臣町前～忠臣町(天の戸) (今木下宿～北手門)	76/10/1～77/12/30	「」
3	市教委	利根住宅	忠臣町(3-24地)	76-78 83/2	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
4	市教委	教会会所	忠臣町 64	79 84/2	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
5	市教委	個人住宅	忠臣町 7-2-26a	84/2/1～85/11/15 85/12/1～86/1/15	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
6	市教委	銀行	忠臣町 3-214	86/2/1～86/10/30 87/1/1～87/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
7	市教委	個人住宅	忠臣町 61	87/1/1～87/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
8	研究会(OJ92-1)	瓦屋街	忠臣町前 1-3-2-2地	88/1/1～88/10/30 88/12/1～89/9/15	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
9	市教委(OJ92-1)	家政校	忠臣町前 2-11-2	89/10/1～89/10/24 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
10	市教委	幼稚園・小学校	忠臣町前 3-1-2地	89/10/1～89/10/24 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
11	市教委(OJ92-1)	個人住宅	忠臣町前 3-12-1	89/10/1～89/10/24 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
12	市教委(OJ92-1)	瓦屋街	忠臣町前 3-12-5	89/10/1～89/10/24 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
13	市教委(OJ92-1)	瓦屋街	忠臣町前 3-13-1地	89/10/1～89/10/24 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
14	市教委(OJ92-1)	瓦屋街(3-20)	忠臣町前 3-14-2	89/10/1～89/10/24 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
15	研究会(OJ92-2)	瓦屋街(7)	忠臣町前 3-15-6	89/10/1～89/10/24 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
16	研究会(OJ92-3)	忠臣館	忠臣町前 3-16	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
17	市教委(OJ92-3)	忠臣館	忠臣町前 3-17-5	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
18	市教委(OJ92-3)	公共施設工業	忠臣町前 3-18-5	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
19	市教委(OJ92-4)	瓦屋街(3-18-4)	忠臣町前 3-19-5	89/10/1～89/11/16 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
20	研究会(OJ92-4)	忠臣館	忠臣町前 3-20-5	89/10/1～89/11/16 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
21	市教委(OJ92-4)	忠臣館(2-17)	忠臣町前 3-21-5	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
22	市教委(OJ92-5)	忠臣(2-17)	忠臣町前 3-22-5	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
23	市教委(OJ92-5)	忠臣(2-17)	忠臣町前 3-23-5	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
24	市教委(OJ92-5)	忠臣(2-17)	忠臣町前 3-24-5	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
25	市教委(OJ92-5)	忠臣(2-17)	忠臣町前 3-25-5	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
26	市教委(OJ92-5)	水道施設	忠臣町前 3-25-6	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
27	市教委(OJ92-5)	水道施設	忠臣町前 3-26-2	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
28	研究会(OJ92-5)	忠臣館	忠臣町前 3-26-2	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
29	市教委(OJ92-5)	忠臣館	忠臣町前 3-26-3	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
30	研究会(OJ92-5)	忠臣館	忠臣町前 3-26-4	89/10/1～89/11/17 89/11/1～89/12/31	「八咫小西と忠臣の出土遺物について」大矢久松 井 2巻 1号 「」
31	研究会(OJ92-7)	小学校裏内埋蔵遺物	忠臣町前 4-46-5	89/2/10～89/20/07	今野勝哉

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査方法

今回の調査は、八尾市立南高安小学校屋内運動場建て替えに伴って実施したもので、当調査研究会が恩智遺跡内で実施した発掘調査の第7次調査（O J92-7）にあたる。調査期間は平成4年6月9日から8月7日までのうち、実働48日間である。

調査は、既存の屋内運動場を解体・埋め戻し後に行ったもので、当初の予定では、新築屋内運動場約1000m<sup>2</sup>のうちの約860m<sup>2</sup>について発掘調査を行うことになっていた。ところが、機械掘削を開始したところ、旧建物の基礎構築時および解体時の搅乱が調査対象面にまで及んでいた部分があり、実質的な調査面積は、約600m<sup>2</sup>に減じてしまった。そこで、屋内運動場の西側に構築される階段部分の約260m<sup>2</sup>についても発掘調査を行うことになった。

このように、調査区は屋内運動場部分と階段部分の2ヶ所に設定し、屋内運動場部分から機械掘削を開始したが、前述の搅乱が調査区東端・中央寄り・南端で「コ」の字形に認められたため、便宜上、損傷を受けていない部分を別の調査区として取り扱った。その結果、調査区の数は3ヶ所となった。調査区の名称は、屋内運動場の東寄りを1区・西端を2区・階段部分を3区と呼んだ。また、3ヶ所の搅乱も、便宜上東トレンチ・中央トレンチ・南トレンチと呼んだ。

調査の手順としては、まず最初に屋内運動場部分の機械掘削を行い、3ヶ所の搅乱を利用して上層を観察しながら、2区の調査を先行した。2区第1面・第2面の調査終了後、1区の人力掘削を開始し、1区第1面までの調査終了後、1区・2区の調査の結果を参考にして、3区の機械掘削を開始した。ついで、1区第2面までの人力掘削を行い、1区第2面の調査終了後、3区の人力掘削を行った。3区の調査終了直前に1区に下層トレンチを設定し、第2面以下の土層堆積を観察した。

掘削については、土留め等を施さないいわゆる「素掘りーオープンカット」で行った。掘削する深さについては、当調査区北側で行われた遺構確認調査（恩智遺跡90-10）の結果を参考にして、遺物包含層直上までの機械掘削0.5m・遺物包含層の人力掘削0.4~0.5mを日安としていた。ところが、地形に沿って掘削していくところ、機械掘削は現地表下0.3~1.6m（T.P.+16.4~17.2m）まで、人力掘削は、以下の0.2~0.7mとなった。完掘時の深さは、現地表以下1.0~2.3m（T.P.+15.9~17.2m）に達した。

調査の結果、第1面では1区で土坑5基・2区で井戸1基・土坑7基・溝2条、3区で小穴1個、第2面では1区で土坑2基・2区で土坑2基・小穴1個・溝1条を検出した。

## 第2節 調査経過（日誌抄）

平成4年6月9日（火）晴：調査開始。現状は旧屋内運動場の取り壊し後に埋め戻されており、上面はかなり凹凸が激しい。南東端から機械掘削開始。東端の幅約2mは、旧建物建設時および解体時の掘削のため、地表から1.5m程度の深さまで搅乱されている。中央西寄りでも同様の搅乱が幅6m・深さ1.5m前後にわたって認められた。市教委平成3年度調査地（恵智遺跡91-335）に対応する中世の遺物包含層（第3層）は、南東部で浅く、北西へ下がる。

6月10日（水）晴：第3層上面は、東部で地表から0.5m前後、北西部で1m前後の深さに達する。厚さは南部では0~0.2m、北部では0.5m以上を確認した。

6月11日（木）晴：第3層上面までの機械掘削終了。南端にも遺構面にまで達する搅乱が認められ、東端・中央西寄り・南端の3ヶ所の搅乱が、「コ」の字形にめぐることが判明した。3ヶ所の搅乱は、便宜上東トレンチ・中央トレンチ・南トレンチと呼び、搅乱で分断された調査区は、東側を1区・西側を2区と呼ぶことにした。面積・機械掘削深度ともに当初の予定(860m<sup>2</sup>・0.5m)から大幅に変わったため、事後の処置について市教育委員会施設課・同文化財課・当調査研究会の各担当者間で協議したが、決着はつかなかった。

レベル移動（調査地南向かい八尾農協南高安支店の仮ベンチT.P.+20.268mから）。調査地内南東隅はT.P.+18.50m、調査区の現地表レベルはT.P.+18m前後、第3層上面のレベルはT.P.+17.0~17.5m、第3層の厚みは0.1~0.2m程度ある。地区割り用杭打ちおよび調査地周辺図・調査区設定図作成。北側壁面・西区東側壁面精査。

現場事務所完成。

6月12日（金）晴～曇：1区・2区北側溝掘削（機械掘削終了地盤から0.6~1.0m）、北側壁面分層、実測。第4層上面のレベルはT.P.+16.8~17.4m、厚さは0.1~0.15m。最終ベース（第7層）までは0.4~0.6mの深さがある。2区はブルーフラッシュ時にかなり削平されている。

6月15日（月）雨→曇：雨のため人力掘削中止、南トレンチを機械にて掘削・整理する。市教育委員会施設課と打ち合わせ。面積が減じた分は屋内運動場の西側に構築する階段部分（3区と呼ぶ）の約200m<sup>2</sup>で確保することに決定した。調査の手順としては、調査対象面が深い2区を先行し、その結果を検討してから3区の掘削範囲等を決めることになった。

6月16日（火）晴：2区から人力掘削開始。南部2層上面で遺構らしきものの痕跡検出。掘



機械掘削開始(6/9)

削するが上面はほとんど削平されている。構築面は不明、おそらく近世以降のものであろう。  
第4層は北部では薄く、ほとんど認められない。大阪府教育委員会文化財保護課技師亀島重則  
氏・西川寿勝氏來訪。

6月17日（水）曇：南部の遺構完掘、写真撮影・平断面図作成・レベル入れ、北部から第3  
層掘削・精査。

6月18日（木）晴～曇：西側壁面精査・分断、  
第4層・第5層上面（この面を第1面と呼ぶ）  
で遺構（井戸1・土坑7・溝2）検出。写真撮  
影用足場組み立て。

6月19日（金）晴～曇：西側壁面丈測、南部  
から遺構掘削開始。

6月20日（土）曇→雨：西側壁面写真撮影。  
第1面遺構完掘、写真撮影、平断面図作成、  
レベル入れ。午後からの急な雷雨のため途中で  
放棄（遺構完掘後の雨でよかったです）。午後から  
遺物洗浄・図面整理等の屋内作業。

6月22日（月）晴～曇：図面作成続き。南部  
から第1面遺構ベース（第4層以下）の掘削を  
進める。1区機械掘削後の上面・攪乱の整理。

6月24日（水）雨→曇：昨日からの雨で遺構  
面水浸し、排水作業におおわらわ。第2面（第  
7層）までの掘削続き、南側・西側壁面分層。

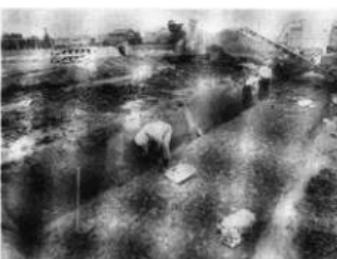
6月25日（木）晴～曇：第7層上面で精査、  
遺構（土坑2・小穴1・溝）検出、南部の遺構  
から掘削開始。

6月26日（金）晴～曇：第2面の遺構完掘。  
写真撮影、平断面図、レベル入れ、黒面図書き  
足し等で2区の調査終了。写真撮影用足場解体。

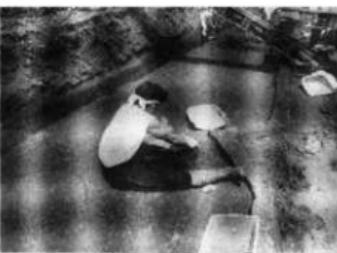
6月29日（月）曇：1区の調査開始。側溝掘  
削終了、調査区中央部に東西方向のトレンチ  
(中央トレンチ)も掘削する。南東部ではいわ  
ゆる「地山」の岩盤（第8層）を確認。第4層



2区第1面遺構掘削(6/20)



2区泥土除去(6/24)



2区第2面遺構掘削(6/25)

上面は、南半分ではかなり削平されている。校長先生から、7月18日に児童・保護者向けの説明会を行ってほしいと依頼される。とくに現場が見頃でなくともよいらしい。

7月1日(水) 晴：当調査研究会創立10周年記念式典のため調査中止。ただし、残土整理等の現場作業は行った。

7月3日(金) 曇：第1面遺構(土坑5)検出、掘削。

7月4日(土) 曇：遺構完掘、写真撮影、平面図作成等で1区第1面の調査終了。3区の調査位置設定。

7月6日(月) 曇：1区第1面遺構ベース(第4層)掘削。3区の機械掘削開始、現地表下1.0~1.6mまで(第3層上面)の掘削、南が浅く北が深い。第4層は粘性が低く礫少ない。中央部に搅乱あり。



1区第1面遺構掘削(7/3)

7月7日(火) 曇~雨：3区の機械掘削終了。空模様と相談して杭打ち、レベル移動等を行って、人力掘削は保留する。1区第2面遺構(土坑2)検出作業、上層遺構の底みに重複するよう遺構がある。

7月8日(水) 曇~雨：1区西側壁面・中央トレンチ南側壁面分層、写真撮影、実測図作成。



1区第1面遺構ベース掘削(7/7)

7月9日(木) 晴~曇：1区北西から第2面の遺構掘削開始。

7月13日(月) 曇~雨：1区北・東・西側壁面・中央トレンチ北側壁面分層、写真撮影、実測図作成。

7月15日(水) 曇：1区の土坑はかなり深い。遺構面も中央部が谷状に落ち込むため、掘削土量が多い。市財政部契約検査室から2名見学。

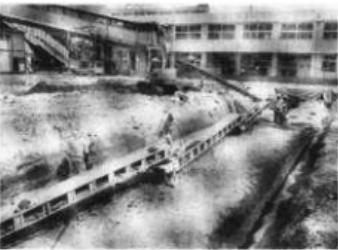
7月16日(木) 曇：1区遺構掘削約50%終了、遺構はかなり深い。教頭先生、市教育委員会管理課施設係長、市教育委員会文化財課技師・調査補助員、当調査研究会事務局長・主査見学。



1区第2面遺構掘削(7/9)

7月18日（土）雨→曇→晴：1区遺構ほぼ完掘、週末もあり、空模様もあやしいので、精査を残して3区に移る。3区西側溝から掘削開始、壁面精査。小学校側から依頼されていた見学会は突然中止にされた。

7月20日（月）晴：1区精査終了後写真撮影、平面図作成。3区上面整理、壁面精査。



3区人力掘削開始(7/21)

7月21日（火）晴：1区平面図等作成、1区の調査終了。3区第3層の人力掘削開始、側溝掘削、壁面精査。搅乱を機械にて掘削・整理。搅乱を挟んで北区・南区と呼ぶ。

7月24日（金）晴：3区東側壁面実測

7月27日（月）晴：東側・南側・西側壁面実測、北側から第4層上面までの掘削開始。

7月28日（火）晴：北区第4層上面までの掘削・精査終了、写真用足場3区北側へ移設。

7月29日（水）晴：北区写真撮影、平面図作成、レベル入れ。南東と北西の高低差は40cm近くある。南区4層上面までの掘削開始。本日は大変暑く、作業員1名ダウンする。

7月30日（木）晴：南区第4層上面までの掘削、北側は0.4mと厚く、南端では0.1～0.15mと薄くなる。1区に下層トレンチ設定、掘削、位置図、壁面図作成。



1区下層トレンチ壁面実測(7/30)

7月31日（金）晴～曇：南区第4層上面までの掘削終了、写真撮影、平板測量。北区第4層以下の掘削開始。

8月1日（土）晴：南区図面終了。北区とともに第4層以下最終面までの掘削開始。

8月5日（水）晴～曇：3日・4日は台風9号襲来のため作業中止、終盤になっての手痛い打撃である。南区は最終ベース（第7層）までの掘削終了、北区はまだまだ下がる。



8月7日（金）曇～雨：北区やっと完掘、平面図作成、レベル入れ、等高線記入等すべての調査終了。

3区第4層上面精査(7/31)

## 第3章 調査概要

前述のように、調査地は屋内運動場部分と階段部分の2ヶ所の予定であったが、屋内運動場部分は中央東寄りおよび東端に旧建物基礎による大規模な擾乱が遺構面にまで及んでいたため、結果的には南北方向のトレント3ヶ所を調査することになった。調査区は、東から1区・2区・3区と呼んだ。

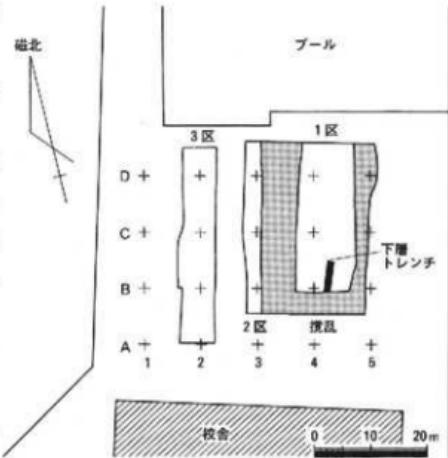
層名は全調査区を通じて「第1層」～「第8層」までを基本層としたが、各調査区ごとに、基本層には2桁の番号を、部分的にしか認められない土層には3桁の番号を与えた。また、検出遺構は、井戸(S E)・土坑(S K)・小穴(S P)・溝(S D)の略号を用い、遺構番号は各調査区の遺構面ごとの続き番号とし、北から若い番号を与え、4桁の数字で表した。「SK2101」は2区第1面のうち北端にある土坑のことである。

### 第1節 地区割

調査対象地は、南北約50m・東西約60mの平坦地で、北側には平成2年度に八尾市教育委員会による遺構確認調査(恩智遺跡90-10)の行われたプール、南側には校舎があり、西側は2m程度下がってグラウンドとなっている。また、東側は1mほど高くなり、旧街道である東高野街道が南北に通っている。

地区割りは、新設建物に対して軸をもつように10m四方に設定した。南北の軸は磁北に対して、東へ約15度東に振っている。

南北軸は西から東へアラビア数字(1～5)で、東西軸は南から北へアルファベット(A～D)で表し、各地区の名称は、各軸の南西隅の交点を用い、「1 A区～4 D区」と呼んだ。3ヶ所の調査区のうち、1区は「3 A区～3 D区・4 A区～4 D区」、2区は「2 A区～2 D区・3 A区～3 D区」、3区は「1 A区～1 D区・2 A区～2 D区」にあたる。



第2図 調査区設定図(1/1000)

## 第2節 層序（第2表・第3図・第10図）

現地表面の標高はT.P.+18.00m前後で、地表から0.3~0.7m程度は盛り土で、部分的に旧屋内運動場・プール建設時の搅乱が地山面にまで及んでいる。当地の旧地形は、南東から北西へ下がる緩斜面を呈しており、上層堆積は複雑であるが、第1層～第8層までの8層を基本層とした。これらのうち、第1層・第2層は水平に堆積しており、近世以降の整地層と考えられる。

第1層：緑灰色疊混シルト（層厚0.1~0.2m） 床土と考えられるが、耕土は削平されている。中世～近世の土器類の小破片が若干含まれる。

第2層：茶灰色疊混シルト（層厚0.1~0.2m） 第1層同様床上状を示し、中世～近世の遺物の小破片（第9図-5ほか）を含む。

第3層：灰褐色疊混シルト（層厚0.15~0.25m） 2区では、この層上面で造構の底を確認できたが、ほとんどが第1層・第2層によって削平されている。層中からは、瓦器塊・瓦等の小破片や砥石・羽釜（第9図-3・4ほか）など、中世までの遺物が少量出土している。

第4層：茶褐色疊混シルト（層厚0.2~0.3m） この層上面が市教委調査地の13世紀代の遺構面に対応するものと考えられ、上面で溝状造構や十坑状の窪みなどを検出した（第1面）。

第5層：紫褐色疊混粘質シルト（層厚0.2~0.3m） 谷状地形の窪みに堆積する土層で、調査区北西部では粘性が高い。この層上面でも、旧地形を反映する岩石の窪みを検出している。

第6層：明褐色疊混シルトと灰色粘質シルトの互層（層厚0.2~0.3m） いわゆる地山の風化・転落層を主体とする上層で、第5層同様谷状地形の窪みには厚く堆積する。この層中から、繩文土器・弥生土器・サメカイト剥片などが少量出土している。

第7層：明灰色疊混シルト～細砂（層厚0.3m以上） いわゆる地山が風化した土層で、斜面には歩人～人頭大の花崗岩等が多量に集積している（第2面）。この層直上から、ナイフ形石器・石核（第9図-8・12）が出上している。

第8層：花崗岩を土とするいわゆる地山である。南東部では褐色系の粗砂～疊、疊混のシルト～粗砂が互層となって数枚堆積している。

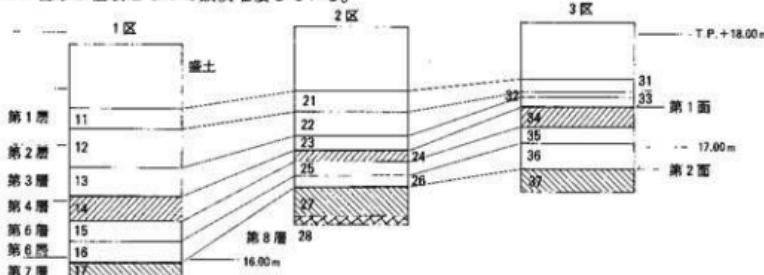


表2 土層一覧

測定 1 面積(m <sup>2</sup> )		測定 2 面積(m <sup>2</sup> )		測定 3 面積(m <sup>2</sup> )	
測定 1	測定 2	測定 1	測定 2	測定 1	測定 2
第1層 0.1~0.2 中近世の遺物なし	灰状(崩土質)	71畳 細粒色繊維シルト粘土質	[21畳] 細粒色繊維シルト	31畳 明暗色繊維シルトへ條分	
第2層 0.1~0.2 第1層・土・砂・崩土質	灰状(崩土質)	[22畳] 細粒色繊維シルト 280畳 細粒色繊維粘土質シルト	[21畳] 灰色織維シルト	[20畳] 明暗色繊維粘土質シルト 300畳 細粒色繊維粘土質シルト	
第3層 0.1~0.2 土・砂・崩土質	土・砂・崩土質	[21畳] 灰色織維シルト		[30畳] 灰色・明暗色繊維粘土質シルト 380畳 有機物質粘土質シルト(褐色・粘性質)	
第4層 0.1~0.2 土・砂・崩土質	土・砂・崩土質	[14畳] 茶褐色繊維シルト	[25畳] 灰色粘土・茶褐色繊維粘土シルト 240畳 黄褐色粘土と無機物質粘土シルトの互層	[14畳] 茶褐色粘土シルト 340畳 有機物質粘土質シルト(褐色・粘性質)	
第5層 0.1~0.2 河床地より外れで岩質性高い	日光泥のほかに薄く埋没	[15畳] にせい細粒色織維シルト 150畳茶褐色繊維シルト 150畳灰褐色～茶褐色繊維粘土シルトと灰色粘土シルトの互層 150畳にせい褐色繊維シルト 150畳褐色～灰褐色の崩土質	[25畳] 茶褐色織維粘土シルト 250畳茶褐色織維粘土シルト(褐色より少部分)	[25畳] 茶褐色粘土シルト 350畳茶褐色粘土シルト(褐色より少部分) 350畳茶褐色粘土質シルト 350畳茶褐色シルト・茶褐色粘土質シルト・粘土質シルトの互層	
第6層 0.1~0.3 山地の風化・崩落土層 山地形の谷から吹き下る 生え土質片・タカイト剥片 等を少しあげた	褐色の風化・崩落土層 山地形の谷から吹き下る 生え土質片・タカイト剥片 等を少しあげた	[15畳] 水色土質細粒色織維 150畳灰褐色 150畳茶褐色	[26畳] 水色織維 260畳灰褐色 260畳茶褐色	[26畳] 明暗色シルトに化粧物質(10~15mm以上)。 360畳茶褐色粘土シルト 360畳茶褐色粘土シルト 360畳茶褐色粘土シルト 360畳茶褐色シルト 360畳茶褐色シルト(褐色より少部分)	
第7層 0.2~0.3 山地の風化土層 土砂が堆して	山地の風化土層 土砂が堆して	[17畳] 有機含み粘土質色織維	[27畳] 巨礫含み黄灰色織維シルト	[33畳] 灰色シルト・深暗色織維シルトの互層 370畳灰褐色シルトと明暗色織維シルトの互層	
第8層 0.3以上 いわゆる崩山	いわゆる崩山	11畳 花崗岩化土層	78畳 在田治遺化土層	18畳 在田治遺化土層	

### 第3節 検出遺構と出土遺物（第4図～第9図・第11図・第12図）

#### 1) 1区の概要

屋内運動場東側の調査区で、調査期間は平成4年6月9日～7月30日までである。ここでは、現地表下0.4～0.8m（T.P.+17.2～17.5m）の第4層上面と現地表下1.0～1.2m（T.P.+16.6～17.5m）の第7層上面で、遺構を捉えることができた。二つの遺構面は、上層を「第1面」、下層を「第2面」と呼んだ。1区に含まれる地区名は、南西から3A・3B・3C・3D・4A・4B・4C・4D区である。

#### 第1面の検出遺構

第1面を構成する第4層は、1区では[14層 茶褐色シルト]である。遺構面である[14層]上面の標高は、南東がT.P.+17.5m、北西がT.P.+17.2mを指している。南東の地盤が高いため、IH屋内運動場の建築・解体時に[14層]上面まで削平されている部分が多く、遺構面は北側の半分にしか遺存していなかった。

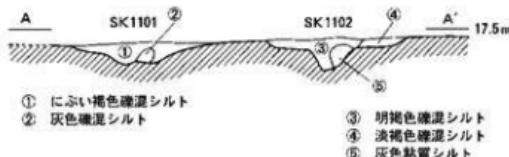
検出遺構は土坑5基で、北から「SK1101」～「SK1105」と呼んだ。

#### SK1101

調査区北西部端、3D～4D区で検出した。東西に長軸をもつ梢円形を呈し、断面の形状は2段の掘り形を持ち、下段は浅い逆台形である。規模は、長径（東西）3.3m・短径（南北）1.4m・深さは上段が0.08m・下段が0.18mを測る。内部堆積上は、①層にびい褐色疊混シルトで、底に②層灰色疊混シルトのブロック層が堆積している。①層から弥生土器片、ナイフ形石器（第9図-7）が出上している。

#### SK1102

調査区西北部、3D～4D区の南端、SK1101の南東で検出した。東西に長く、東側に頂点を持つ丸みのある一角形を呈している。断面の形状は2段の掘り形を持ち、上段は浅く平坦、下段は深い逆三角形を呈している。規模は、長さ（東西）3.2m・西側の辺2.2m、深さは上段が0.1m・下段が0.17mを測る。内部堆積上は、上から③層明褐色疊混シルト・④層淡褐色疊混シルトで、底の一部に⑤層灰色粘質シルトがブロック状に堆積している。



第4図 SK1101・SK1102断面図(1/50)

## SK1103

調査区北部、3C～4C区北側で検出した。SK1102からは約3m南に位置する。東西に長い溝状を呈する上坑で、断面の形状は逆台形、底は平坦である。規模は、長さ（東西）4.2m・幅（南北）0.8m・深さ0.25mを測る。内部堆積土は、上から①層にぶい褐色疊混シルト、④層淡褐色疊混シルト、⑤層灰色粘質シルトである。

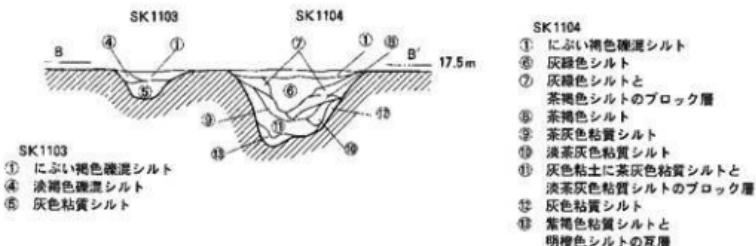
## SK1104

調査区北部、3C～4C区北側、SK1103の南隣で検出した。東西に長い楕円形を呈する土坑で、断面の形状は逆台形、底はV字形である。規模は、長径（東西）3.85m・幅（南北）1.2m・深さ0.65mを測る。内部堆積土は、上層・中層・下層に分かれ、上層には①層にぶい褐色疊混シルトが薄く滲り、中層には⑥層灰緑色シルト・⑦層灰緑色シルト（⑥）と茶褐色シルト（⑧）のブロック層・⑨茶褐色シルト、下層には⑩層茶灰色粘質シルト・⑪層淡茶灰色粘質シルト・⑫層灰色粘土に茶灰色粘質シルト（⑬）と淡茶灰色粘質シルト（⑭）のブロック層・肩に⑮層灰色粘質シルト・最下に⑯層紫褐色粘質シルトと明橙色シルトの互層が堆積している。このうち、上層の①層は自然の堆積層、中層⑥層～⑩層と下層⑪層～⑯層は故意に埋められた上層、肩に堆積する⑫層と最下の⑯層はベースの崩落層である。

上層の堆積状況からは、上坑が掘られた後放置された間に⑬層・⑯層が自然に崩落して溜ったこと、その後⑩層～⑯層で埋められた後またしばらく時間の経過があること、つぎに再び⑥層～⑩層で埋められたこと、最終的に①層が自然に堆積したことがわかる。また、中層の⑥層～⑩層には炭が少量含まれている。

## SK1105

調査区北部西端、3C区、SK1104の西南西で検出した。平面の形状はほぼ東西に長い楕円形、断面の形状は浅い半円形を呈すると考えられるが、西端は調査区外に至り、北西には擾乱があるため、全容は明らかでない。規模は、検出部での東西1.6m・幅径（南北）0.9m・深さは0.1mを測る。内部には①層にぶい褐色疊混シルトが堆積する。



第5図 SK1103・SK1104断面図(1/50)

## 第2面の検出遺構

第2面を構成する第7層は、1区では[17層・Ⅱ疊含み明褐色疊]である。[17層]上面のレベル高は、南東でT.P.+17.5m、北西でT.P.+16.6m前後を指し、南東が高く北西が低い。

ここでは、土坑2基のほか、西～北西へなだらかに落ち込む谷状地形を検出した。2基の土坑は北から「SK1201」・「SK1202」と呼んだ。

### SK1201

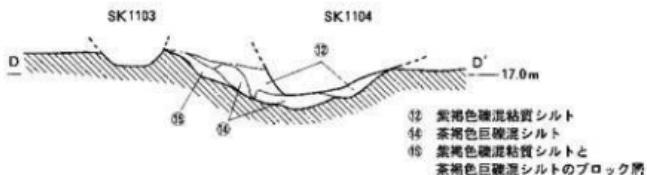
調査区西北部、3D～4D区に位置する。第1面のSK1101・SK1102とほぼ重複した位置にあるため、上面は上層の遺構によって破壊されている。現状での平面の形状はほぼ東西に長い楕円長方形で、断面の形状は半円形を呈する。規模は、長さ（東西）3.0m・幅（南北）1.65m・深さ0.3mを測る。内部堆積土は、上から⑪層茶褐色疊混シルト・⑫層紫褐色疊混粘質シルト・⑬層灰青色粘質シルトである。最下の⑬層の堆積状況から、しばらく帯水していたことがわかる。⑪層から弥生上器片、楔形石器（第9図-10）が出土している。



第6図 SK1201断面図(1/50)

### SK1202

調査区北部西寄り、3C～4C区に位置する。第1面のSK1103・SK1104にほぼ重複しており、SK1201と同様、上層の遺構に破壊されている部分がある。平面の形状は、ほぼ東西に長い楕円形で、東端に小さな突出部をもつ。断面の形状は半球形であるが、東側は二段の掘り方をもち、突出部にむかってテラス状の平坦部を有する。規模は、長径（東西）4.9m・短径（南北）2.25m・1段目の深さ0.2m・2段目の深さ0.4mを測る。内部堆積土は、上から⑭層紫褐色疊混粘質シルト・⑮層茶褐色疊混シルト・⑯層紫褐色疊混粘質シルト（⑫）と茶褐色疊混シルト（⑭）のブロック層である。このうち、おもに⑯層は1段目に、⑪層は1段目の肩の斜面に、⑮層は2段目に堆積しており、⑪層には炭が含まれる。



第7図 SK1202断面図(1/50)

## 2) 2区の概要

屋内運動場西端の調査区で、調査期間は平成4年6月9日～6月26日までである。ここでは、現地表下0.5～1.1m (T.P.+16.8～17.3m) の第4層・第5層上面と現地表下0.8～1.3m (T.P.+16.5～17.2m) の第7層上面で、遺構を捉えることができた。1区と同様、上層の遺構面を「第1面」、下層の遺構面を「第2面」と呼んだ。

2区も南上がりの微地形を呈し、過去の開発などで第4層は南部ではほとんど削平されている。さらに、2区の北部は建て替え前のプールがあった場所で、北側半分は、上面から約1mの深さまでプール建設時に掘り込まれて、削平されていたほか、南部では、基礎杭の痕跡が数ヶ所で認められた。またここでも、微地形を反映して、遺構面は1区よりも低い。

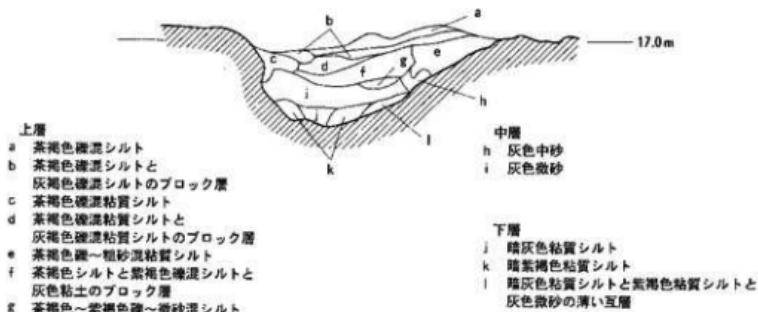
## 第1面の検出遺構

第1面を構成する上層は、2区では〔24層 灰色粘土混紫褐色粘質シルト〕であるが、南部では〔21層〕がほとんど削平されていたため、南部では〔25層 紫褐色疊泥粘質シルト〕上面で第1面をおさえている。〔24層〕・〔25層〕のレベル高は南が T.P.+17.3m、北が T.P.+16.8m 前後で、1区よりさらに0.2～0.3m下がっている。

ここでは井戸1基 (S E2101)、土坑7基、溝状遺構2条を検出した。土坑・溝は北から「SK2101」～「SK2107」、「SD2101」・「SD2102」と呼んだ。

## S E2101

調査区北西端、2D区で検出した。西側は調査区外に至るため明確ではないが、平面の形状は円形または隅丸方形を呈するものと考えられる。断面の形状は二段の掘り形を持ち、上段は1～0.2m程度の深さでゆるやかに掘り込まれ、下段は0.5～0.6mの深さで急激に落ち込む。検出部での規模は、幅2.0m前後・深さ0.75mを測る。



第8図 S E2101断面図(1/50)

内部堆積土は、おおまかに上層（a層～g層）・中層（h層・i層）・下層（j層～l層）に分けることができる。

上層には、a層茶褐色疊混シルト・b層茶褐色疊混シルトと灰褐色疊混シルトのブロック層・c層茶褐色疊混粘質シルト・d層茶褐色疊混粘質シルトと灰褐色疊混粘質シルトのブロック層・e茶褐色疊～粗砂混粘質シルト・f茶褐色シルトと紫褐色疊混シルトと灰色粘土のブロック層・g茶褐色～紫褐色疊～微砂混シルトが複雑に堆積している。中層はh層灰色中砂・i層灰色微砂、下層はj層暗灰色粘質シルト・k層暗紫褐色粘質シルト・l層暗灰色粘質シルトと紫褐色粘質シルトと灰色微砂の薄いn層からなる。

上層はブロック状の堆積が主であることから、人為的に埋め立てられた層と考えられ、中層の砂の堆積からは湧水層に達していたこと、下層の粘質シルトの互層から帶水していたことなどがわかる。

上層のb層から弥生土器片、下層のk層から繩文土器片（第9図-1）が出土しているが、弥生土器片は井戸埋め戻し、繩文土器片は井戸掘削の際に混入したものと考えられる。

#### S K2101

調査区北部東側、3D区で検出した。S E2101の南東2m付近に位置する。東側はわずかに調査区外に至るが、ほぼ円形を呈するものと思われる。規模は、長径0.7m・深さ0.1m程度で、内部堆積土は①層にぶい褐色疊混シルトである。

#### S K2102

調査区中央北東側、2C～3C区で検出した。S K2101から南7mに位置する。東側は調査区外に至るが、東西に長い梢円形を呈するものと思われる。規模は、長径（東西）1.4m以上・短径（南北）0.85m・深さ0.05mを測り、内部堆積土は①層にぶい褐色疊混シルトである。

#### S K2103

調査区中央北東側、2C～3C区で検出した。S K2102の南隣に位置する。東側は調査区外に至るが、東西に長い隅丸の長方形を呈するものと思われる。規模は、長さ（東西）2.0m以上・幅（南北）1.2m・深さ0.18mを測る。二段の掘り形をもち、西側には、テラス状の平坦面をもつ。内部堆積土は①層にぶい褐色疊混シルトである。

#### S K2104

調査区南部東側、2B区で検出した。S K2102・S K2103から南10m前後に位置し、すぐ北側にはS D2101がある。西側は調査区外に至るが、円錐から梢円形を呈するものと思われる。検出部での規模は、長径1.7m前後・深さ0.15mを測る。二段の掘り形をもち、東～南側には、テラス状の平面をもつ。内部堆積土は、上から⑧層明褐色疊混粘質シルト・⑨層茶褐色疊混粘質シルト・⑩層黄灰色疊混粘質シルトである。

**S K2105**

調査区南部西側、3B区で検出した。SK2104の南東約1mに位置する。東側は調査区外に至るため全容は明らかではないが、検出部での上面の形状は不定形で、規模は東西の幅0.9m・南北の幅0.7m・深さは0.18mを測る。内部堆積土は、上から①層にぶい褐色疊混シルト・⑦層灰色粘質シルトである。

**S K2106**

調査区南部西側、2B～3B区で検出した。SK2105の南1m付近に位置する。東側は調査区外に至るが、東西に長い梢円形を呈するものと考えられる。検出部での規模は、長径(東西)1.4m・短径(南北)0.85m・深さは0.05m程度を測る。内部堆積土は①層にぶい褐色疊混シルトである。

**S K2107**

調査区南部、2B～3B区で検出した。SK2106の南西1.5mに位置する。東西の長さ1.9m・南北の長さ1.15m・深さ0.1mの不定形を呈し、北部に幅0.3mほどの溝状の浅い窪みが伸びる。内部堆積土は、上から⑥層にぶい褐色シルトと灰色粘質(⑦)シルトのブロック層・⑦層灰色粘質シルトである。

**S D2101**

調査区中央南部、2B～3B～2C～3C区にまたがって検出した。SK2103の南2～3m、SK2104のすぐ北側に位置する。西側壁面の観察から、SK2103とは切りあっていないことがわかる。北東～南西に伸びるもので、検出部ではV字形に分岐している。検出長4.0m・幅0.6～1.2m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は⑧層明褐色疊混粘質シルトで、内部から楔形石器(第9図-9)が出土している。

**S D2102**

調査区南端、2A～3A区で検出した。SK2107の南1～2m付近に位置する。北東～南西に伸びるもので、検出長2.5m・幅2.2～2.5m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は①層にぶい褐色疊混シルトである。

## 第2面の検出遺構(第7層上面:T.P.+16.5～17.2m)

第2面を構成する上層は、2区では「27層 巨礫含み黄灰色疊混シルト」である。この面では、1区第2面ほどの深い谷状地形は認められなかったが、「27層」上面はなだらかに北へ下がっており、レベル高は南がT.P.+17.2m、北がT.P.+16.5m前後で、第1面と同様に、1区より低い。

第2面では、土坑2基、小穴1個(S D2201)、溝1条(S D2201)を検出した。土坑は、北から「SK2201」「SK2202」と呼んだ。

#### S K2201

調査区中央東側、3 C区で検出した。東側は調査区外に至るが、検出部では、径1.0m前後の半円形を呈し、断面の形状は浅い半円形、深さは0.05m程度である。内部堆積土は⑪層紫褐色疊混シルトである。

#### S K2202

調査区中央部、2 B～3 B～2 C～3 C区で検出した。長径（東西）1.5m・短径（南北）1.3m程度の楕円形を呈し、深さは0.18mを測る。西側には幅0.55m・深さ0.1m程度の溝状の窪みが伸びる。断面の形状は二段の掘り方を持ち、底は平坦である。内部堆積土は上から⑪層紫褐色疊混シルト、⑫層青灰色粘質シルトである。

#### S P2201

調査区北部西端、2 C区で検出した。長径（東西）0.45m・短径（南北）0.25m・深さ0.18mを測る。断面の形状は半円形で柱の痕跡などはなかった。内部には⑪層紫褐色疊混シルトが堆積する。

#### S D2201

調査区中央部、2 B～3 B区、S K2202の南隣で検出した。S字形に蛇行して伸びるもので、幅0.4～0.65m・検出長2.0m・深さ0.05mを測る。調査区内では、流路の方向は不明であるが、北東から南西に流下するものであろう。内部堆積土は、⑪層紫褐色疊混シルトである。

### 3) 3区の概要

屋内運動場西側、階段部分の調査区で、調査期間は平成4年7月4日～8月7日までである。ここでは、現地表下1.1～1.8m（T.P.+16.4～16.9m）の第4層上面と現地表下1.4～1.9m（T.P.+15.7～16.5m）の第7層上面で、遺構を捉えることができた。ここでも、上層の遺構面を「第1面」、下層の遺構面を「第2面」と呼んだ。3区も南上がりの微地形を呈し、南部と西部では第4層上面まで削平されており、中央南部では、第7層にまで及ぶ擾乱があった。

#### 第1面の検出遺構

ここでは第4層が[34層 茶褐色～紫褐色疊混粘質シルト]で、1区・2区より粘性が強い。上面の標高はT.P.+16.4～16.9mで、1区・2区よりさらに深く下がっているが、中央部・南部は遺構面まで擾乱がおよんでおり、北側で小穴1個（S P3101）を検出した。

#### S P3101

調査区北部、1 D～2 D区で検出した。上面の形状は円形、断面の形状は半球形を呈し、径0.5m・深さ0.25mを測る。内部堆積土は①層にびい褐色疊混シルト、⑥層灰色粘土と茶褐色シルトのブロック層で、①層から土築器の小破片が出土している。

## 第2面の検出遺構（第7層上面：T.P.+15.7～16.5m）

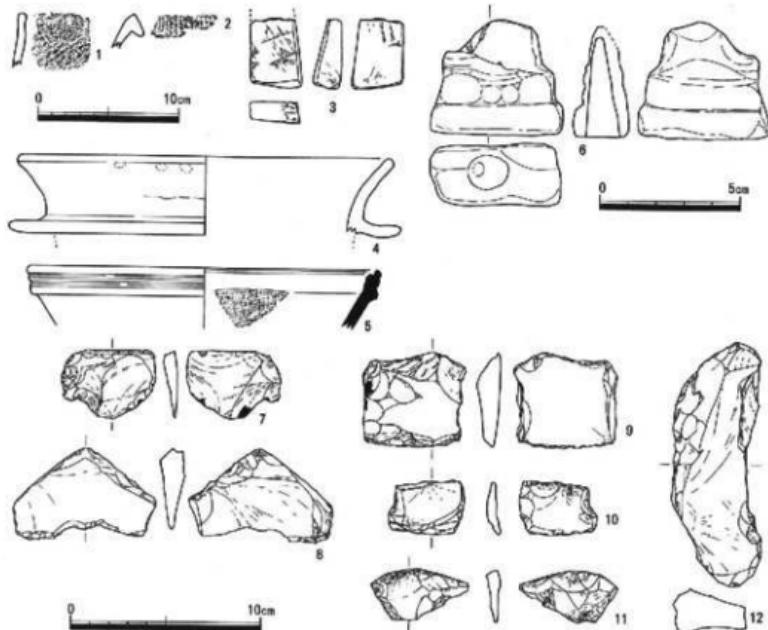
第7層は[37層 灰色シルト混明褐色粗砂]で、上面には拳大～人頭大の石が集積している。この層上面も南東から北西へ緩く下がる斜面となり、上面の標高はT.P.+15.7～16.5mで、1区との高低差は約1mある。この面では東西方向の浅い谷状の窪みが1か所で確認された。

谷状の窪みは幅約5.0m・深さ0.3～0.4m程度で、東西の両岸は土手状の高まりとなっている。遺構面の直上に堆積する第6層からは、弥生時代中期の土器片、石器未成品、第7層直上からは、ナイフ形石器（第9図-8）、石核（第9図-12）が出土している。

## 4) 出土遺物の概要

遺物の出土量はごくわずかで、そのほとんどは遺構に伴うものではない。また、遺構から出土したものであっても、必ずしもその遺構の時期を決定づけるものでもない。

第2層から出土したものには、すり鉢（5）をはじめとして近世の遺物が含まれ、第3層中からは砥石（3）のほか、土師器・須恵器・瓦器などの小片が含まれている。このことから、第4層上面で検出された遺構は、平成2年度に行われた八尾市教育委員会による遺構確認調査（恵智遺跡90-10）で確認された13世紀代の遺構に対応するものと考えられる。



第9図 出土遺物実測図 (土器 S=1/4・土製品 S=1/2・石器類 S=1/3)

また、縄文土器(1)は、2区第1面の井戸S E2101、下層k暗紫褐色粘質シルトから出土したが、井戸S E2101は最終ベースの第7層・第8層まで掘り込まれていることから、(1)は井戸掘削時に混入したものと考えられる。同様に、第1面の造構SK1101・SD2101から出土したナイフ形石器(7)・楔形石器(9)も造構掘削時・埋め戻し時に混入したものと考えられる。

一方、図示していないものの、縄文土器・弥生土器やサヌカイト剥片などは、第6層に含まれるもので、第7層直上でナイフ形石器(8)・石核(12)が検出されたことから、第2面の時期は、縄文時代から弥生時代中期頃までの可能性が高い。

## 第4章 まとめ

調査の結果、南東から北西へ下がるIH地形を確認することができ、数条の谷状地形もあわせて確認することができた。この地形は、13世紀代までの状況を反映しており、谷の深みの上層には、溝状、あるいは上坑状の窪みが残っていた。当地で大規模な開発が行われ、整地されるのは近世以後のことと、その時点で、高みに残る前時代の生活面はかなり削平され、逆に低地部は埋め立てられていることが、3区の複雑な土層堆積からも明らかである。

一方、当調査地は「天上の森」を中心とする扇状地の縁辺部に位置しており、これまでにその付近で検出されている縄文時代～弥生時代の集落からは離れているものと考えられる。しかし、いわゆる地山(第7層)の直上や直上層(第6層)からは、縄文時代後期～弥生時代中期の土器片や石器などが若干出土していることから、近隣に当該時期の生活の跡があるものと考えられる。

### 参考文献

- 梅原末治・鳥居貞彦「河内国府石器時代遺跡発掘報告書」「京都大学文学部考古学研究報告 第2冊」1923  
鳥居貞彦「石器時代遺跡調査(15)」大阪毎日新聞大正6年8月12日付 1917  
藤岡謙二郎他「中河内郡高安村恩智弥生式遺跡」「大阪府史跡名勝天然記念物調査報告 第12冊」1941  
今里幾次「河内恩智の縄文土器」「日本考古学1-3」1948  
山本昭・泉本知秀・福岡達男「八尾市恩智遺跡の出土遺物について」「大阪文化誌 第2巻1号」1976  
田代克己他「恩智遺跡I・II・III」須生堂遺跡調査会 1980  
鶴村友了他「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書1」-恩智遺跡の調査- 八尾市教育委員会 1987  
吉田野乃「恩智遺跡(90-10)の調査」「八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書」八尾市教育委員会 1991  
西村公助「IV 恩智遺跡第5次調査」「八尾市文化財調査研究会報告34」(財)八尾市文化財調査研究会 1992  
原川昌則「V 恩智遺跡第6次調査」「八尾市文化財調査研究会報告34」(財)八尾市文化財調査研究会 1992  
吉田野乃「恩智遺跡(91-335)の調査」「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書」八尾市教育委員会 1992

付表1 検出遺構一覧表 (第1面)

遺構名	地区	法量(m) 長径	短径	深さ	方向 (長軸)	内部堆積土 備考
SK1101	1区 3D~4D	3.0	1.4	0.18	東~西	①にない褐色鐵皮シルト ②灰色鐵皮シルトのブロック層 ③層から赤生土器片、ナイフ形石器(?)出土
SK1102	1区 3D~4D	3.2	1.35	0.27	東~西	③明褐色鐵皮シルト ④淡褐色障泥シルト ⑤灰色粘質シルト
SK1103	1区 3C~4C	4.2	0.8	0.25	東~西	①にない褐色鐵皮シルト ②淡褐色鐵皮シルト ③灰色粘質シルト
SK1104	1区 3C~4C	3.85	1.2	0.65	東~西	上層 ①にない褐色鐵皮シルト 中層 (d~e層) 灰綠色シルト・茶褐色シルトのブロック層 下層 (g~h層) 高灰色粘質シルト・淡灰色粘質シルト・灰色粘土のブロック層 最下層 (a~b層) 灰色粘質シルト、淡褐色粘質シルトと明褐色シルトの互層
SK1105	1区 3C	1.6以上	0.8	0.1	東~西	①にない褐色鐵皮シルト
SE2101	2区 2D	2.0		0.75	-	上層 (a~g層) 茶褐色・灰褐色・茶褐色鐵皮シルト主体のブロック層 中層 (h~i層) 灰色鐵皮・中砂 下層 (j~l層) 暗灰色・暗褐色粘質シルト主体のブロック層 b層から赤生土器片、k層から圓文土器片(?)が出土
SK2101	2区 2D	0.7		0.1	-	①にない褐色鐵皮シルト
SK2102	2区 2C~3C	1.4以上	0.85	0.05	東~西	①にない褐色鐵皮シルト
SK2103	2区 2C~3C	2.0以上	1.2	0.18	東~西	①にない褐色鐵皮シルト
SK2104	2区 2B	1.7		0.15	-	淡褐色鐵皮粘質シルト ②茶褐色鐵皮粘質シルト ③黃灰色鐵皮粘質シルト
SK2105	2区 2B	0.92以上	0.7	0.18	-	①にない褐色鐵皮シルト ②灰色粘質シルト
SK2106	2区 2B~3B	1.4以上	0.85	0.05	東~西	①にない褐色鐵皮シルト
SK2107	2区 2B~3B	1.9以上	1.15	0.1	-	⑥にない褐色シルトと灰色粘質シルトのブロック層 ⑦灰色粘質シルト
SD2101	2区 2B~3B 2C~3C	(検出長) (幅) 4.0 0.6~1.2	(深さ) (底面) 北東 南西	0.16	-	④茶褐色鐵皮粘質シルト 模形石器(?)が出土
SD2102	2区 2A~3A	(検出長) (幅) 2.5 2.2~2.5	(深さ) (底面) 北東~南西	0.15	-	①にない褐色鐵皮シルト
SP3101	3区 1D~2D	(往) 0.5	(深さ)	0.25	-	①にない褐色鐵皮シルト ②灰色粘土と茶褐色シルトのブロック層 ③層から土器片

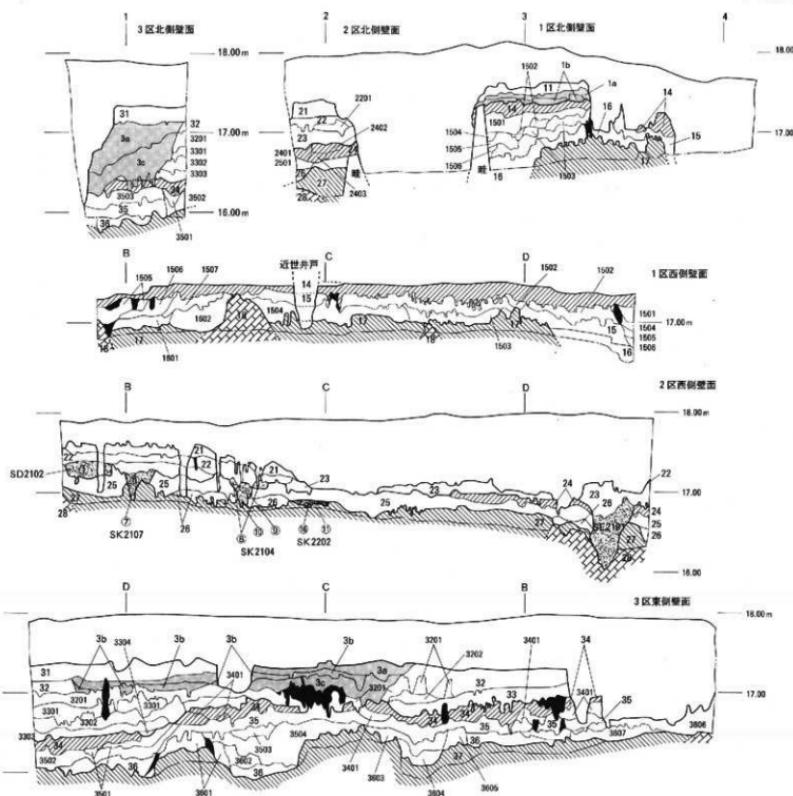
付表2 検出遺構一覧表(第2面)

遺構名	地区	辺量(m) 長径	幅径	深さ	方向 (長軸)	内部地盤土 備 考
S K1201	1区 3D~4D	3.0	1.65	0.3	東~西	④紫褐色漆底シルト ⑤紫褐色漆底粘質シルト ⑥灰青色粘質シルト ⑦縁から赤土土器片、楔形石器(10)出土
	1区 3C~4C	4.8	2.25	0.6	東~西	⑧紫褐色漆底粘質シルト ⑨茶褐色上漆底シルト(灰を含む) ⑩紫褐色漆底粘質シルトと灰褐色巨礫混シルトのブロック層
S K2201	2区 3C	1.0前後		0.05	-	⑪紫褐色漆底シルト
	2区 2B~3B 2C~3C	1.5	1.3	0.18	東~西	⑫紫褐色漆底シルト ⑬汚灰色粘質シルト
S P2201	2区 2C	0.45	0.25	0.18	東~西	⑭紫褐色漆底シルト
S D2201	3区 3B~3B	(検出長) 2.0前後	(幅) 0.4~ 0.65	(深度) 0.05	(路路) 北東~南西	⑮紫褐色漆底シルト

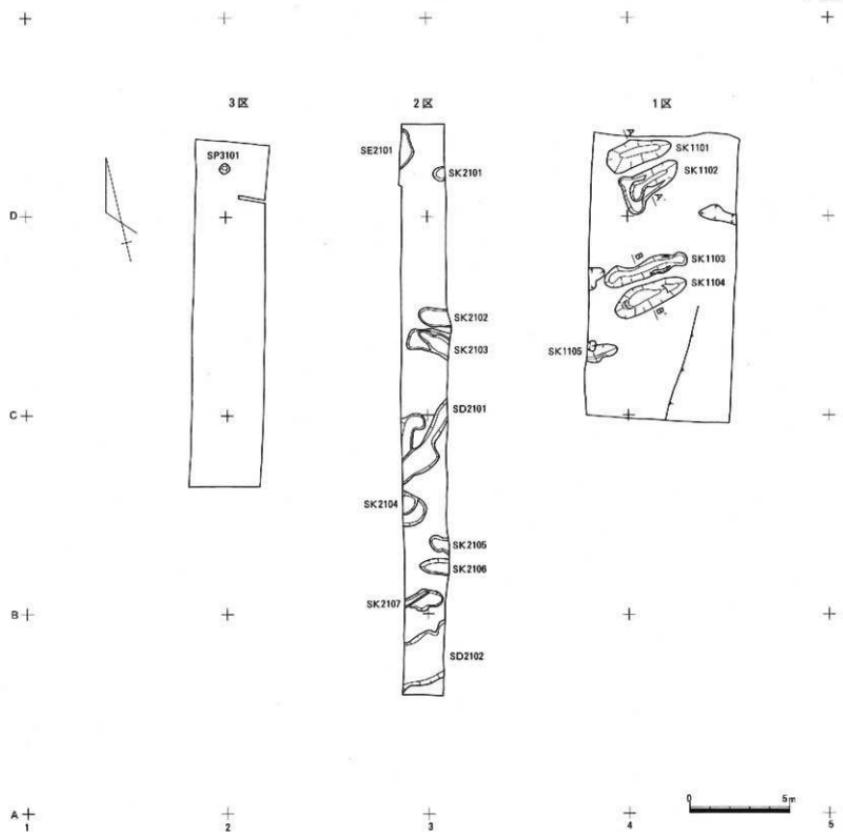
付表4 出土遺物一覧表

番号	器種	出土地	法量(cm)	色調・胎土・ 焼成	特 徴	備 考
1	陶文土器片? (鉢)	2区 S E2101	-	赤褐色 やや粗 糞好	ナデ、ヨコナデ。 外面に押圧纹あり。	
2	乳突土器片 (壺)	中央トレンチ 櫻花中	-	暗褐色 やや粗 糞好	ナデ、ヨコナデ。 口縁部外周面に櫻枝型葉状文を施す。	
3	机石	1区 (第3層対応)	奥存幅 3.7 奥存長 4.9 最大厚 1.9	-	平面方形を呈する。上縁は削損する。上縁の折損 面以外の3面に使用痕あり。	
4	土器蓋 羽蓋	3区 (第3層対応)	H 案 26.2 同 案 27.8	赤褐色 やや粗 糞好	ナデ、ヨコナデ。 口縁部外縁に2条の凹線 すり目は密(5/ cm)	H縁部外縁・鶴嘴 面に焼付苔
5	崩前縁 すり跡	1区 (第2層対応)	口 径 24.8	暗褐色 糞好	口縁部外縁面に2条の凹線 すり目は密(5/ cm)	
6	土製品 (伏見人形?)	中央トレンチ 櫻花中	最大幅 4.7 奥存高 4.1 最大厚 2.5	暗褐色 糞好	魔像を表すものと考えられる。 上縁は欠損。底面中央左よりに1孔を穿つ。 製作り。	
7	トイフ形石器	1区 S K1101	最大幅 5.0 最大長 3.6 最大厚 0.7	-	上縁は自然底、刃部は他の方につく。	
8	トイフ形石器	3区 第7層直上	最大幅 7.4 最大長 4.4 最大厚 1.3	-	平面は三角形を呈する。刃部は下端左寄りにつく。	
9	楔形石器	2区 S D2101	最大幅 5.3 最大長 5.0 最大厚 1.3	-	平面は正方形を呈する。左右縁は折り底る。上縁 右寄りに打撃点あり。	
10	楔形石器	1区 S K1201	最大幅 3.9 最大長 2.8 最大厚 0.8	-	平面は長方形、裏面は四面を削る。左右縁は折 り取る。上縁中央に打撃点あり。	
11	楔形石器?	3区 第3層	最大幅 5.9 最大長 2.7 最大厚 0.9	-	平面はV字形を呈する。上縁中央に打撃点あり。	
12	石核	3区 第7層直上	最大幅 12.9 最大長 4.3 最大厚 2.1	-	平面はV字形を呈する。裏面に剥離あり。裏面 はやや凹面をなす自然面。	

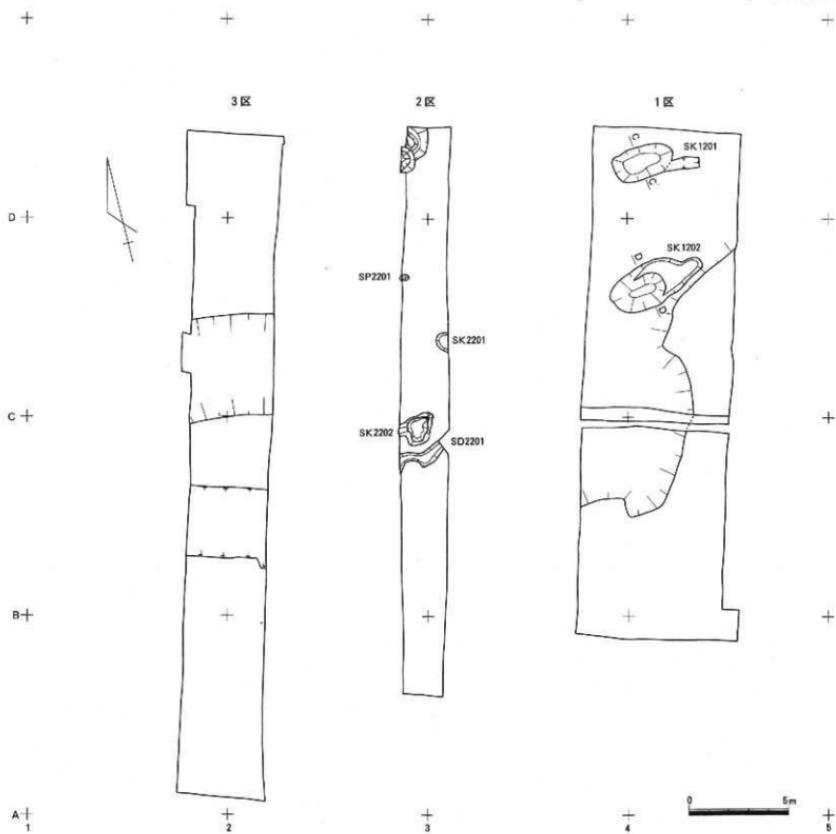
## I 應智遺跡第7次調查(OJ92-7)



### 第10図 壁面図



第11図 第1面平面図

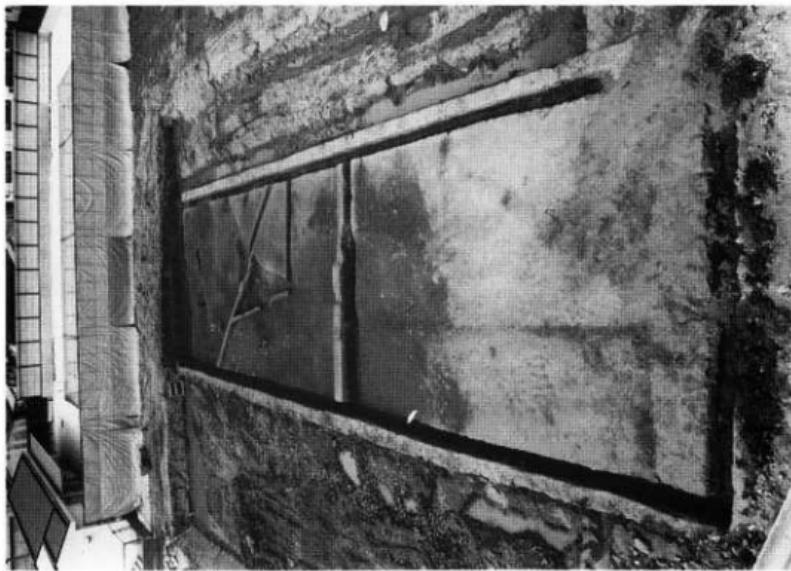


第12図 第2面平面図

図 版



1区第1面全景(南から)



1区第2面全景(南から)



1区第1面 SK1101(西から)



1区第1面 SK1101・SK1102(北から)



1区第1面 SK1103・SK1104(西から)



1区第2面 SK1201(西から)



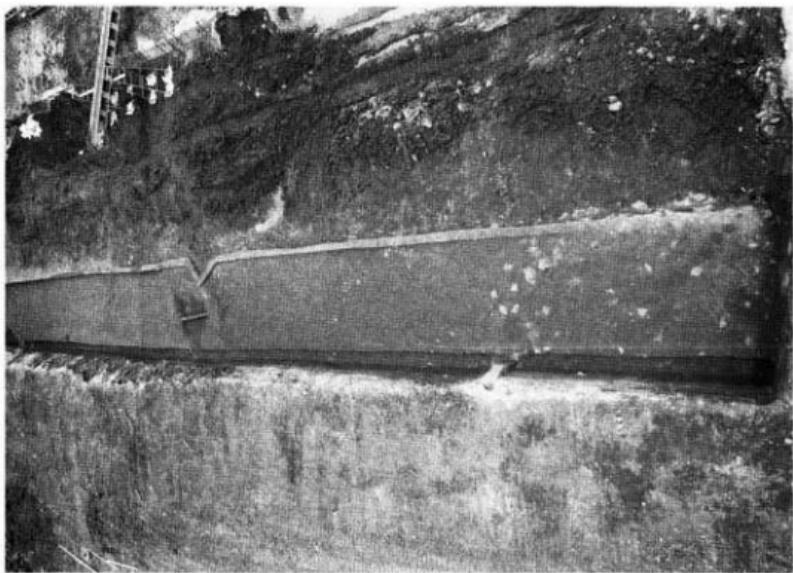
1区第2面 SK1202(西から)



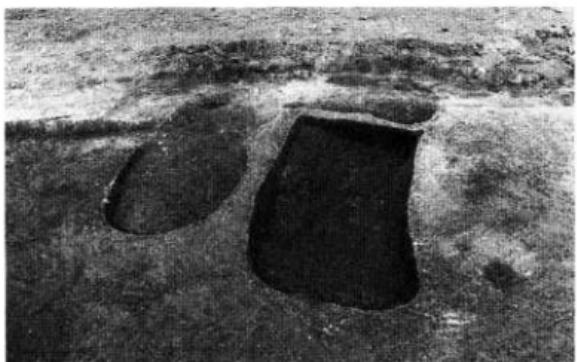
1区 下層トレンチ西側壁面



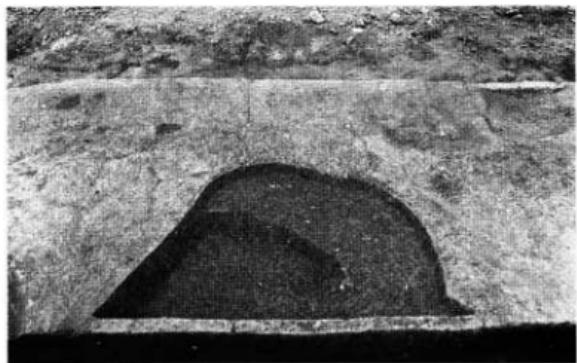
2区 第1面全景(南から)



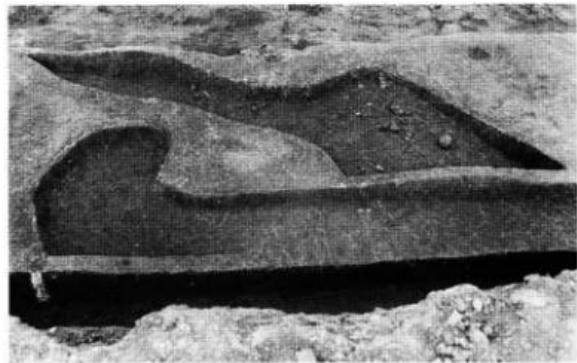
2区 第2面全景(南から)



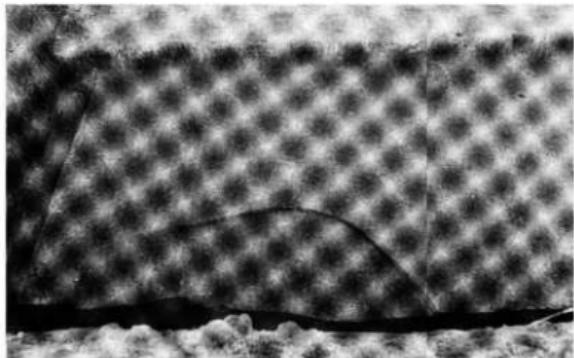
2区第1面 SK2102・SK2103(西から)



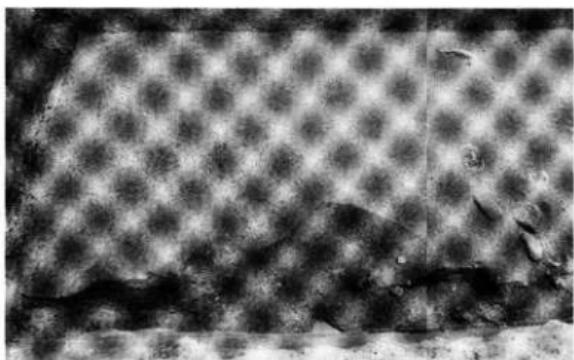
2区第1面 SK2104・SK2105(西から)



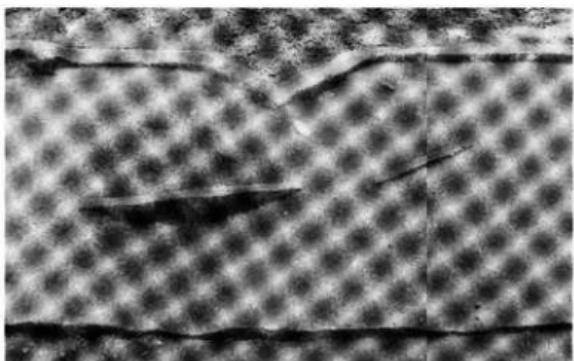
2区第1面 SD2101(西から)



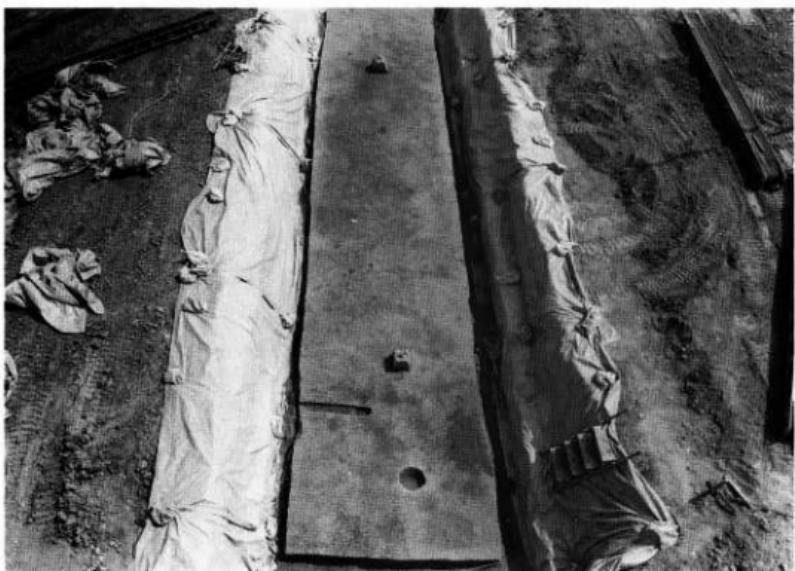
2区第1面・第2面 SE2101上層・SK2101(西から)



2区第2面 SE2101下層(西から)



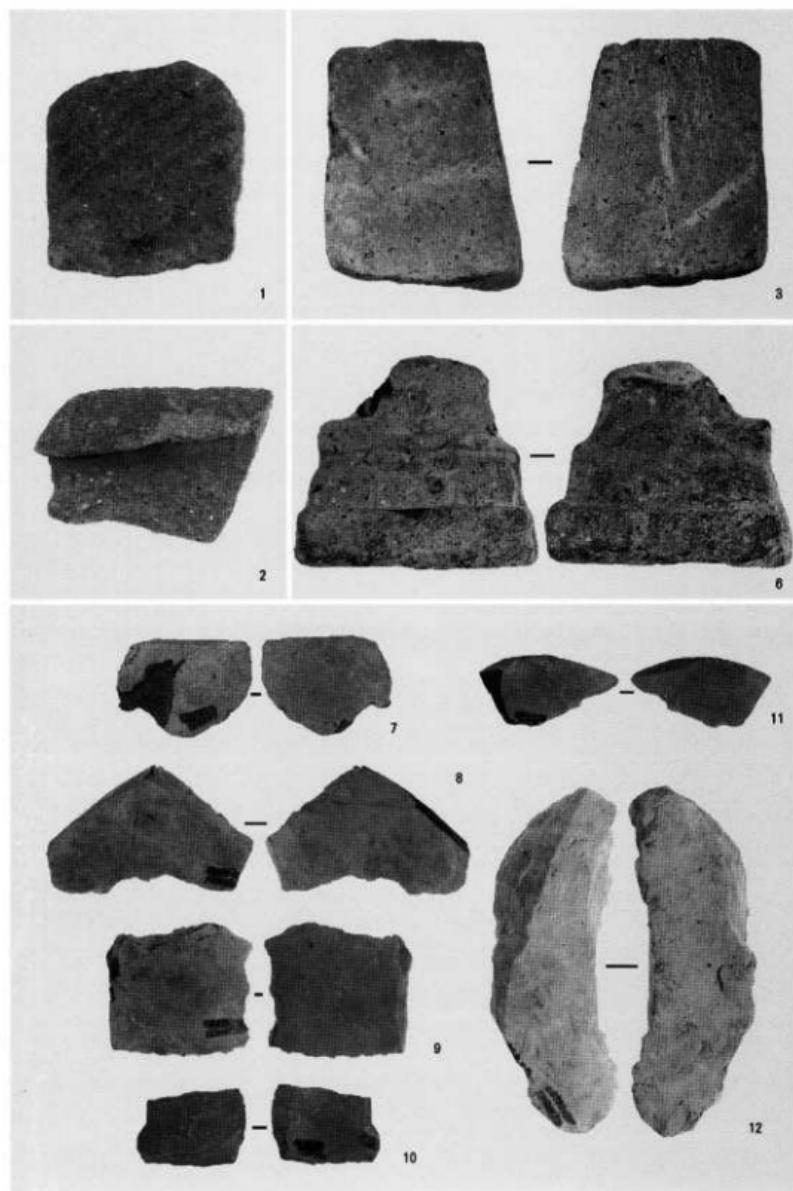
2区第2面 SK2201・SK2202(西から)



3区第1面北部（北から）



3区第2面北部（北から）



出土遺物（石器のみ S=1/2）

II 郡川遺跡第1次調査（KR89-1）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市黒谷474番地先で実施した河川堤体築造工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する郡川遺跡第1次調査（KR89-1）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋134号 平成2年1月22日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年2月6日から2月13日（実働6日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積は60m<sup>2</sup>を測る。調査においては正木洋二・八元聰志が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成9年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・別所秀高（現（財）東大阪市文化財協会）・真柄　竜、図面トレース－北原、遺物観察表－北原・原田、遺物写真－原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

## 本　文　目　次

第1章　はじめに.....	29
第2章　調査概要.....	30
第1節　調査の方法と経過.....	30
第2節　基本層序.....	32
第3節　検出遺構と出土遺物の概要.....	32
1) 検出遺構・出土遺物.....	32
2) 遺構に伴わない遺物.....	34
第4節　出土遺物観察表.....	36
第3章　まとめ.....	40

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図	29
第2図 調査地設定図	30
第3図 検出造構半断面図	31
第4図 SD-1 出土遺物実測図	33
第5図 包含層出土遺物実測図	35

## 写真目次

写真1 調査風景（南から）	40
---------------	----

## 図版目次

図版一 調査地全景（北から）

図版二 SD-1（東から）

SD-2（東から）

図版三 SD-1 山上遺物

図版四 包含層出土遺物

## 第1章 はじめに

郡川遺跡は八尾市東部の生駒山西麓部から平野部にかけての標高35~10mに広がる縄文時代から中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、郡川1~5丁目、教興寺、教興寺3~7丁目、垣内1~5丁目、黒谷1~4丁目の東西約1.1km、南北1.2kmが遺跡の範囲とされている。ただ、遺跡の大半が市街化調整区域に指定されている関係で開発に伴う調査件数も少なく、一部を除き遺跡の実態は不明であった。ところが、昭和63年に八尾市黒谷439-1で宅地造成に伴う遺構確認調査(63-193)が八尾市教育委員会により実施された結果、古墳時代中期~後期の集落が検出された。これらの調査成果は郡川遺跡内における当該期の集落の存在を明らかにしたに留まらず、生駒山西麓部一帯に形成された高安古墳群の造営を推進した氏族集團の集落が古墳群に近接する位置に存在したことが明らかにされた点で注目された。このような情勢下、八尾市下水道部河川課から前記調査地の西約80m地点に位置する重頭池で改修工事をする旨の届出書が八尾市教育委員会に提出された。工事が計画された地点は前記調査地に近接し



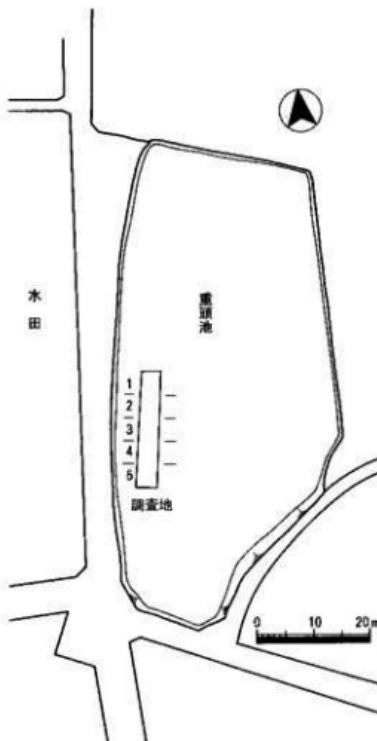
第1図 調査地周辺図

ていることから、八尾市教育委員会により遺構・遺物の有無を確認する目的で平成2年1月16日に造構確認調査が実施された。施工予定地内に5ヶ所のグリット（ $2 \times 2\text{ m}$ ）を設定して調査が実施された結果、古墳時代中期後半から後期初頭に比定される遺物が検出された。これらの経過を経て発掘調査を実施するに至ったもので、発掘調査は八尾市・八尾市教育委員会・当調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき、当調査研究会が八尾市から委託を受けて実施した。現地での発掘調査期間は、平成2年2月6日～2月13日までの6日間である。調査面積は $60\text{ m}^2$ を測る。内業整理および本書作成にかかる業務は、調査終了後平成9年3月まで随時実施した。

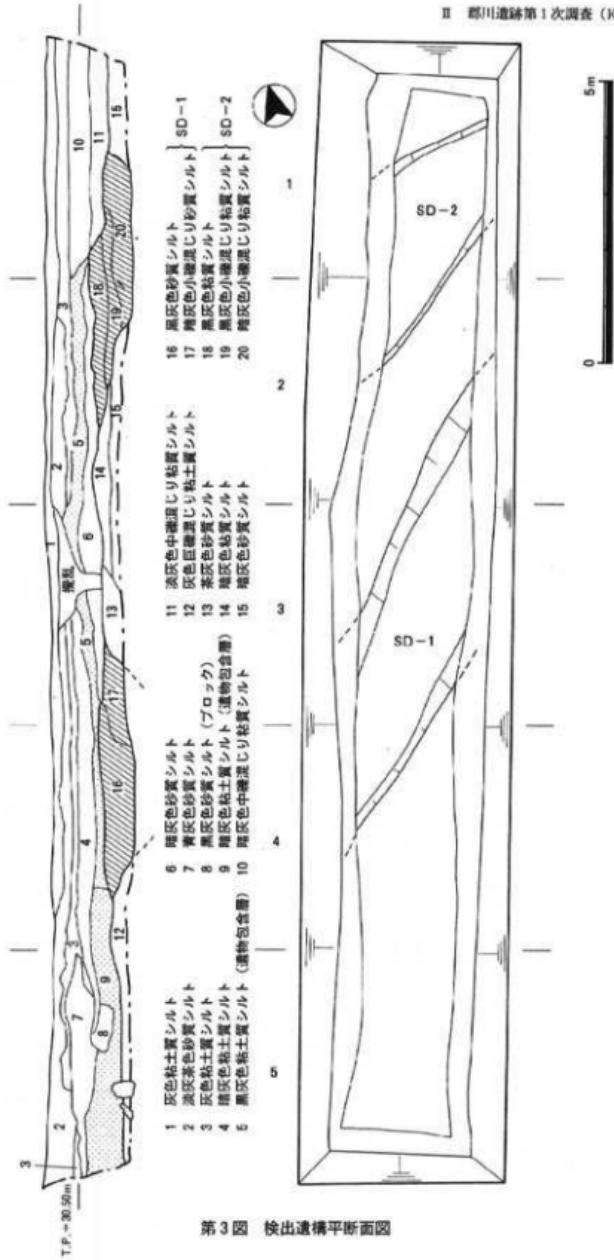
## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の調査は重頭池西部の堤体築造工事に伴うもので、試掘調査で確認された古墳時代中期後半から後期初頭の包含層の広がりや遺構の有無を確認することを主目的とした。調査地点は重頭池南西部の池底にあたり、西が高く東に低い緩斜面を呈していた。この部分に南北方向に伸びる調査区（南北長 $20\text{ m}$ 、東西幅 $3\text{ m}$ ）を設定した。地区割りについては、調査区の北端から $4\text{ m}$ 毎に $5\text{ m}^2$ （1地区～5地区）に区画した。調査に際しては、現地表下 $0.6\text{ m}$ 前後までは機械より掘削した後、以下 $0.4\text{ m}$ 前後は人力による掘削を実施し遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、地表下 $1\text{ m}$ 前後（標高 $30\text{ m}$ 前後）に存在する第12層～第15層上面で古墳時代中期に比定される溝2条（SD-1・SD-2）を検出した。遺物は遺構および包含層である5層・9層から古墳時代中期後半～後期後半に比定される土器類、上製品がコンテナ2箱程度出土している。



第2図 調査地設定図



第3図 検出遺構平面断面図

## 第2節 基本層序

調査地点が池底であるため、上面にはヘドロの堆積が認められたほか、池構築時における掘削等により部分的に改変された部分が認められた。また、試掘調査では調査区の南部付近で谷状地形が確認されており、調査においてもこれと符合して南に向かって傾斜する上層堆積が確認された。第1層が池底の堆積土層である灰色粘土質シルト。第2層は淡灰茶色砂質シルトである。第3層・第4層は灰色～暗灰色の色調の粘土質シルトで、無遺物層である。第5層の黒灰色粘土質シルトおよび第9層の暗灰色粘土質シルトが古墳時代中期から後期の遺物を含む包含層である。遺構を検出した地表下0.8～1.3m以下の上層の堆積状況は複雑であり、検出面の土層は一定しておらず、南から第12層灰色戸隠混じり粘土質シルト、第13層茶灰色砂質シルト、第14層暗灰色粘質シルト、第15層暗灰色砂質シルトに区別される。なお、調査地南部で検出された第12層からは0.2～0.5m大の花崗岩が多数検出されている。

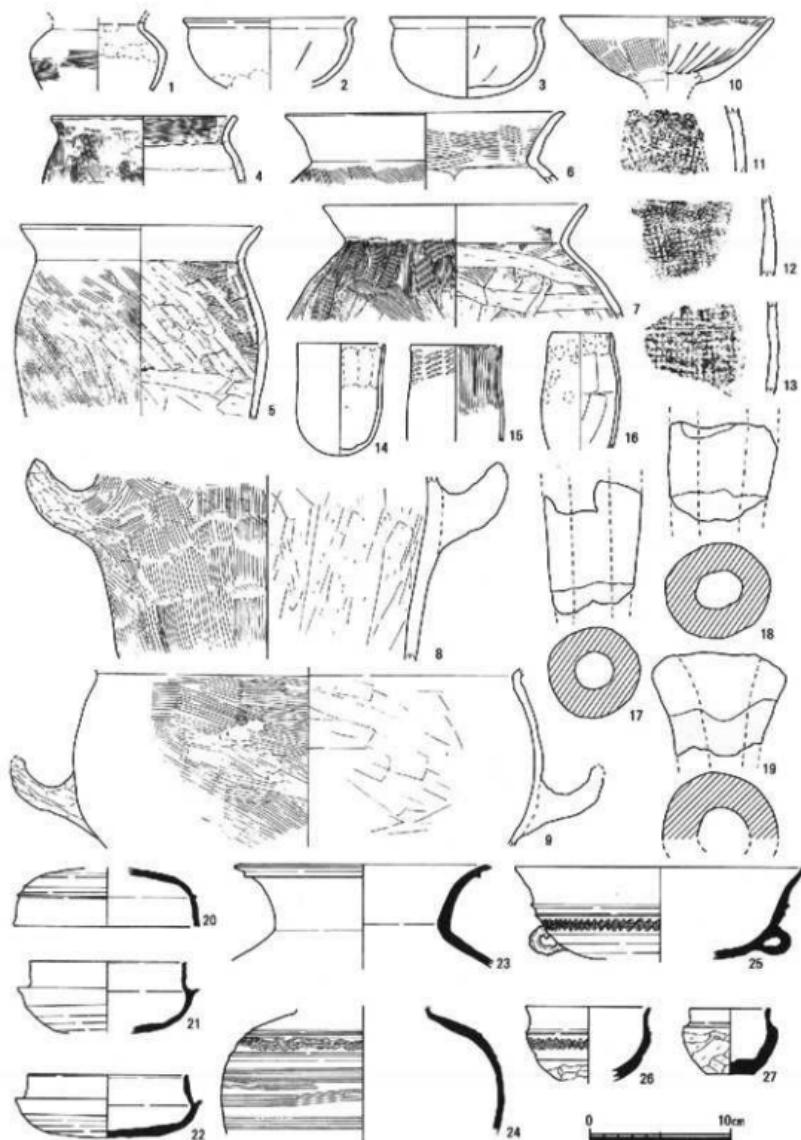
## 第3節 検出遺構と出土遺物の概要

### 1) 検出遺構・出土遺物

#### SD-1

南西～北東方向に伸びるもので、検出長4.5m、幅2.3m前後、深さ0.6m前後を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は第16層黒灰色砂質シルトと第17層暗灰色小礫混じり砂質シルトの2層である。遺物は第1層から古墳時代中期に比定される土師器壺・甕・鉢・鉢・高杯・瓶、須恵器杯身・杯蓋・壺・鉢・高杯・甕のほか、韓式系土器、製塙土器、輪羽11、管玉、馬齒等の多岐に及ぶ遺物がコンテナ1箱程度出土している。そのうち、図化したものは27点（1～27）である。内訳は土師器-壺1点（1）・鉢2点（2・3）・甕4点（4～7）・瓶1点（8）・鏡1点（9）・高杯1点（10）、韓式系上器3点（11～13）、製塙土器3点（14～16）、輪羽口3点（17～19）、須恵器-杯蓋1点（20）、杯身2点（21・22）、甕1点（23）、甕1点（24）、無蓋高杯1点（25）、鉢2点（26・27）である。

(1) は小型壺である。口縁部が欠損しているが体部の上位に最大径を持つ短頸壺と推定される。体部中位以下に横位のハケナデが行われている。(2・3) は半球形の体部に小さく外反するU縁部が付く鉢である。甕は4点（4～7）図化した。(4) が小型品で他は大型品である。(4) はU縁部外側の中位以下に縦位のハケナデ調整が認められる。大型品の(5～7) はいずれも「く」字に屈曲する口縁部を有するもので、体部外側が左上りのハケナデ、内面がハケナデ調整後、ヘラケズリが行われている。(8) は甕の把手付近の資料である。把手は太い根元から内湾して上外方に伸びるもので、先端は尖っている。(9) は鉢と推定されるものである。把手部分の形状は、根元部分から幅を僅かに減じて上外方に伸びるもので、先端は尖



第4図 SD-1出土遺物実測図

らず幅広で終っている。体部外面は斜め方向のハケナデ調整、内面は板ナデ調整が行われている。(10)は高杯の杯部で約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。杯部内面は横位のハケナデの後放射状暗文、外面はハケナデが行われている。(11~13)は外面に格子タタキを施す韓式系土器の小破片である。器種的には瓶・鍋等が想定されるが限定はできない。製塙土器は3点(14~16)図化した。所謂、薄手丸底式に分類されるもので、(15)は体部上半にタタキ、内面に貝ケズリが認められた。色調は(14・16)が乳灰色系、(15)が淡褐色である。織羽口は3点図化した。形態的には基部から先端部分に向かって幅を減じる円筒状を呈している。(17・18)が先端部、(19)が基部付近の資料である。先端部分に溶融金属が付着した(19)のほか、(17・18)は熱変のために先端部分が灰色に変色している。胎土はいずれも中粒砂から小礫を含む粗いものである。須恵器類は8点(20~27)を図化した。(20)は杯蓋で全体の約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。須恵器杯身は(21・22)の2点で、立ち上がりが直上に伸びる(21)と内傾する(22)がある。(22)の底部外面に「-」のヘラ記号が認められる。田辺編年のTK23型式に対比されよう。(23)は壺で口縁部直下に断面一角形の凸帯が1条回る。(24)は形状や文様構成から大型の甕と推定される。扁球形の体部を持つもので、肩部上半には2条の凸帯間に波状文が施されている。(25)は無蓋高杯で約 $\frac{1}{2}$ が遺存している。全体に丁寧な造りで、体部中位に2条の凸帯と波状文で構成される文様帶と小さな把手が付く。(26・27)は平底を有する小型鉢である。(27)は手づくね品である。共に体部下半に静止ヘラケズリが認められる。

#### SD-2

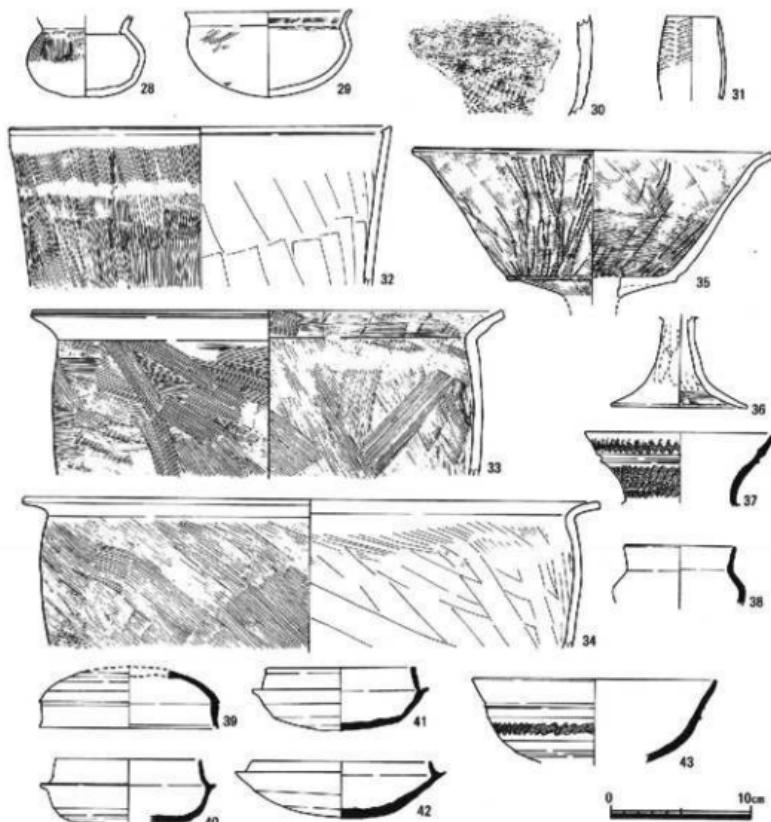
SD-1の北で検出した。SD-1と同様、南西-北東方向に伸びるもので、検出長3m、幅2m、深さ0.2mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は遺構の断面形状に沿って、3層が堆積している。遺物は出土していない。

#### 2) 遺構に伴わない遺物

第5層および第9層から古墳時代中期後半~後期前半の土師器・須恵器・韓式系土器・製塙土器が出土している。図化し得たものは16点(28~43)である。その内訳は土師器-壺1点(28)、鉢1点(29)、韓式系土器1点(30)、製塙土器1点(31)、甕1点(32)、壺2点(33・34)、高杯2点(35・36)、須恵器-壺1点(38)、甕1点(37)、杯蓋1点(39)、杯身3点(40~42)、無蓋高杯1点(43)である。

土師器類は9点(28~36)図化した。(28)は扁球の体部を有する小型壺である。体部が完存するものの口縁部は欠損している。(29)は楕円形の体部に小さく外反する口縁部が付く小型鉢である。(30)は韓式系土器の小片で斜格子状のタタキが施されている。器種は瓶・鍋等が推定されるが限定できない。

(31)は薄手丸底式の製塙土器である。体部外面上半にタタキ調整が行われている。(32)は



第5図 包含層出土遺物実測図

瓶の口縁部の小片である。口縁部は内傾する水平な面を有しており端部は内側に肥厚している。(33・34)は大型の甕である。共に口縁部が「く」の字状に屈曲するもので、体部外面は左上りのハケナデ調整、内面は(33)がハケナデ、(34)がハケナデとナデを多用している。(35)は斜上方に大きく立ち上がる深目の杯部を有する大型の高杯である。杯部内面が横方向にハケナデ、外面が斜め方向のハケナデの後、ヘラミガキによる放射状暗文を施す。(36)は小型高杯の脚部である。須恵器類は7点(37~43)図化した。(37)は甕の小片である。口縁部および頸部外面に波状文が施文されている。(38)は直口の口縁部を有する小型の壺である。口縁部から肩部外面に灰かぶりが認められる。(39)は杯蓋で約1/4が遺存している。(40・41)は杯

身で共に1/4程度が遺存している。立ち上がりは内傾して伸びるが端部が丸く終る(40)と内傾する面を有する(41)がある。ともに、TK23型式に対比される。(42)は全体の約1/4程度が遺存する杯身である。半邊元焼成のため色調は赤褐色を呈している。掲載した須恵器の中でも新しい型式のTK209型式に対応される。(43)は無蓋高杯の杯部である。全体に丁寧な造りで、体部中位に2条の凸帯と波状文で構成される文様帶がある。掲載した須恵器類は(42)がTK209型式(6世紀末)に比定される以外は、おおむねTK23型式前後(5世紀末)を中心とした時期に比定されるものである。

#### 参考文献

・川辺昭三 1966『陶邑古窯址郡I』平安学園考古学クラブ

・韓式系土器については、1991『韓式系土器研究III』韓式系土器研究会 P128に掲載している。

#### 第4節 出土遺物観察表

遺物 名 称 番 号	四種 名	法縫(cm)	調整・手法	色調	胎						残 存 率	考 古 地 名	
					長	右 肩	角 肩	チ ー ト リ	その 他の 記				
1	上部泰 冠強度	11径 高 底径 ( )復原範	外側 内面	外面 内面	▲ M L	△ M L							
2	土師器 盆	(12.0) -	外側：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。底部強度片強。 内面：口縁部から体部下部ヨコ ナデ。底部ナデ。	赤褐色 △ S	▲ M L	△ M L							
3	上部泰 盆	(10.8) 6.7	外側：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。上部強度片強。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。底部ヨコナデ。	赤褐色 △ S	▲ M L	△ M L							
4	土師器 盤	(13.0) -	外側：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。上部強度片強。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。底部ヨコナデ。	赤褐色 △ S M L	▲ M L	△ M L							
5	土師器 盤	(16.8) -	外側：口縁部ヨコナデ。体部強 いナガリのケナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヨ コナデ。底部ナガリのケナデ。	赤褐色 △ S M L	▲ M L	△ M L							
6	上部泰 盤	19.7	外側：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。内面：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。底部ヨコナデ。	赤褐色 △ S	△ S	○ S							
7	土師器 盤	(18.4) -	外側：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。内面：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。内面：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。内面：口縁部ヨコナデ。体部ナ デ。	赤褐色 △ S M L	△ M L								
8	上部泰 盤	-	外側：把手部分強ナダ。体部強 いハケナダ。 内面：ハケナダ。	赤褐色 △ S	△ S								
9	土師器 盤	-	外側：把手部分強ナダ。体部強 いハケナダ。 内面：ハケナダ。	赤褐色 △ S	△ S								
10	土師器 高杯	(15.0) 杯高4.0	外側：口縁部ヨコナデ。杯部中 位以下、ヨコナデ。 内面：ヨコナデの後、ヨコナデ。 杯底部に放射状ミミガキ。	赤褐色 △ S M L	△ S M L								

遺物番号	河床	形態	法量(cm)	測量・手法		色調	粒度	土質	寸法	その他の	焼成	保存	腐食	備考	
				H径	外面 面高 底径 ( ) 復原值										
11 三	韓式系 土器	-	-	外側：格子状タキ。		淡赤褐色	粗や細	○ S	▲ S	△ S	△ M	良好	体部 小片	SD-1	
11 三	韓式系 土器	-	-	内面：ナゲ。		灰色									
12 三	韓式系 土器	-	-	外側：格子状タキ。		淡赤褐色	粗や細	○ S	▲ S	△ S	△ M	良好	体部 小片	11と同一個 体の可能性 が高い。 SD-1	
13 三	韓式系 土器	-	-	内面：ナゲ。		灰色									
14 三	圓底土器	6.2 8.0	-	外側：ナゲ。		淡灰褐色～ 赤茶色	粗好	△ S	▲ S			良好	1/2	SD-1	
14 三	圓底土器	8.0	-	内面：粗底直底。ナゲ。		乳褐色									
15 三	製壇土器	(6.5)	-	外側：口縁部から底部に下タキ。 以下ナゲ。		淡褐色									
15 三	製壇土器	-	-	内面：口縁部から底部に下タキ ケズリ、以下ナゲ。		淡褐色						良好	1/2 軽 1/4	SD-1	
16 三	製壇土器	4.2	-	外側：ナゲ。		乳灰色	粗好	▲ L				良好	口縁 部 2/3	SD-1	
16 三	製壇土器	-	-	内面：口縁部ナゲ。体部へラケ ケズリ。		“									
17 三	輪羽口	-	-	外側：ナゲ。		灰白色		○ S	○ M			良好	先端 部分	SD-1	
17 三	輪羽口	-	-	内面：ナゲ。		淡赤褐色	粗	S L							
18 三	輪羽口	-	-	外側：ナゲ。		淡褐色～ 灰色	粗	○ S	○ M	○ S		やや 不良	先端部 熱處	SD-1	
18 三	輪羽口	-	-	内面：ナゲ。		灰色	L								
19 三	輪羽口	-	-	外側：ナゲ。		淡茶灰褐色～ 灰褐色	粗や細	○ S	△ M	○ S		良好	尖峰 先端部 熱處	基部 1/2	SD-1
19 三	輪羽口	基部径 9.5	-	内面：ナゲ。		淡茶灰褐色～ 灰白色	L								
20 三	須恵器 杯盤	(34.2)	-	外側：天井部3/4回転へラケズ リ。他回転ナゲ。		暗灰褐色	粗	▲ M							
20 三	須恵器 杯盤	轉径 (12.7)	-	内面：天井部ナゲ。1/3回転回転 ナゲ。		青灰色	粗	M				堅密	1/2	SD-1	
21 三	須恵器 杯身	(11.1)	-	外側：底座部3/4回転へラケズ リ。他回転ナゲ。		青灰色	粗	△ S				堅密	1/2	SD-1	
21 三	須恵器 杯身	空身 (14.1)	-	内面：底座ナゲ。他回転ナゲ。		“									
22 三	須恵器 M身	1.2 4.5 248(13.4)	-	外側：底座部3/4回転へラケズ リ。他回転ナゲ。		灰色	粗	△ S				堅密	1/2	SD-1	
22 三	須恵器 M身	-	-	内面：底座ナゲ。他回転ナゲ。		“									
23 三	須恵器 蓋	(17.2)	-	外側：口縁部回転ナゲ。体部灰 かぶり。		淡灰色	粗	▲ M				堅密	1/2 部～ 体部 小片	SD-1	
23 三	須恵器 蓋	-	-	内面：口縁部灰かぶりのため調 整不明。体部ナゲ。		“									
24 三	須恵器 蓋	外側 内面 (20.0)	-	外側：体部上段2条の内間に 波紋状。体部中位以下、直線状。 内面：体部上半回転ナゲ、以下 ナゲ。		淡灰色	粗好	○ S				堅密	体部灰かぶ り 1/2	SD-1	
24 三	須恵器 蓋	-	-	内面：口縫部回転ナゲ。体部中 位2条の内間に波紋状(10本 /周)。		暗灰色	粗好	○ S				堅密	杯部灰かぶ り 1/3	SD-1	
25 三	須恵器 蓋	(20.0)	-	外側：口縫部回転ナゲ。体部中 位2条の内間に波紋状(5本 /周)。		暗灰色	粗好	○ S				堅密	口縫 部 1/4	SD-1	
25 三	須恵器 蓋	-	-	内面：灰かぶりのため調整不明。		“									
26 三	須恵器 蓋	(8.8)	-	外側：口縫部回転ナゲ。体部中 位2条の内間に波紋状(5本 /周)。		淡黄色	粗	▲ M				堅密	口縫 部 内 面 灰かぶり SD-1	SD-1	
26 三	須恵器 蓋	-	-	内面：回転ナゲ。		“									

・凡例 放送＝し 1m以上 MD5～1mm未溝 S0.5mm未溝 黒＝の多量 ○多い △少ない ▲減少 ■赤＝赤色腐化土

植物番号	学名(英)	測量・手法		色調						形状		残存率	備考地区	
		外径	高さ	高さ	基部	長さ	幅	葉	角	ナード	ナード	ナード		
		内面	内面	内面	石	石	英母	闊石	闊石	ナード	ナード	ナード		
( )復原値														
27 三 過渡器林	6.6 外側 4.7 ラケツリ。 3.3 内面:ナダ。	灰青色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	聖歌	1/2 手づく品 SD-1
28 四 土器器 体部	外側:4.7 内面:6.4 底径:11.7	茶褐色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	良好	体壁 芯保存 3区第5層
29 四 土器器 体部	11.8 6.3 底径:11.7	赤褐色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	良好	1/2 2区第5層
30 四 特式系 土器	外側:ヨコ方44のハケナダ。斜 柄下枝タキ。 内面:ハケナダの後ナダ。	赤褐色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	良好	体部 小片 1区第5層
31 四 圓底土器	(3.6) 外側:口錐形～体部中位タキ。 内面:ナダ。	乳白色	白身	▲M △S ○S	▲L △S ○S	△S ○S	良好	11級 部1/2 3区第5層						
32 四 土器器 底	(37.0) 外側:11底延ヨカナデ。体部左 下方のハケナダ。 内面:ナダ。	赤褐色	白身	▲S △S ○S	▲S △S ○S	△S ○S	良好	口錐 部1/8 2区第5層						
33 四 土器器 底	(33.4) 外側:口錐形ヨカナデ。体部左 下方のハケナダ。 内面:口錐形左方向のハケナデ。 体部左方向のハケナダ。	淡赤褐色 赤褐色	白身	▲L △S ○S	▲L △S ○S	△S ○S	良好	口錐 部1/10 3区第5層						
34 四 土器器 底	(40.8) 外側:口錐形ヨカナデ。体部左 上方のハケナダ。 内面:口錐形ヨカナデ。体部上半 方にハケナダ、以下トナダ。	淡赤褐色～ 赤褐色 赤褐色～ 赤褐色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	良好	口錐 部1/1 4区第5・ 9層
35 四 土器器 高杯	25.0 内面:口錐形ヨカナデ。体部左 下方のハケナダ。 内面:口錐形ヨカナデ。体部左 下方のハケナダ。	淡赤褐色～ 赤褐色 赤褐色～ 淡赤褐色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	良好	口錐 部1/4 2区第5層
36 四 土器器 高杯	外側:柱状部タキ方向の板ナ ダ、ナダ、底部ナダ。柱狀部タ キナダ。 内面:柱狀部タキ方向の板ナ ダ、ナダ、底部ナダ。	淡赤褐色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	良好	柱狀 部は 完存 2区第5層
37 四 須惠器 底	(13.4) 外側:口錐形回転式(5本)單 筒底3段の波状紋(9本)單。 内面:口錐形回転ナダ。	青灰色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	平底	口錐 部1/4 口錐形内面 かぶり 3区第5層
38 四 須惠器 底	(8.8) 外側:11縦部～体部回転ナダ。 内面:口錐形～体部回転ナダ。	淡灰色	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	聖歌	口錐 部1/4 口錐形～体 部上半灰 かぶり 3区第5層
39 四 須惠器 杯蓋	(12.6) (4.3) 内面:(12.5)	淡青灰色 白身	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	聖歌	口錐 部1/4 3区第5層
40 四 須惠器 杯身	(11.3) (4.5) 内面:(12.5)	淡青灰色 白身	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	平底	口錐 部1/1 2区第5層
41 四 須惠器 杯身	10.5 4.4 内面:(12.3)	灰白色 白身	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	聖歌	口錐 部1/4 3区第5層
42 四 須惠器 杯身	12.6 15.0 内面:受部12.3	赤褐色 白身	白身	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	△S ○S	聖歌	口錐 部1/4 3区第5層

## II 鶴川遺跡第1次調査 (KR89-1)

・凡例 條幅=L 1mm以上 M0.5~1mm未溝 S0.5mm未溝 ■多量 ○多い △少ない ▲稀少 △赤一赤色顔化土

遺 物 番 号	固 定 番 号	器 種	法算(cm)	調整・手法		色調	胎				チ ヤ ー ト	焼 成 保 存 性	疾 存 率	考 古 地 区
				口縁 器高 底縁 ( )保原値	外面 内面		外面 内面	高 石 英 母 石	長 右 裏 左 角 圓 内 外					
43	四	須恵器 煎茶湯杯	(17.2)	—	外面：口縁部～杯底中位回転ナ ジ、以下回転ヘラケズリ。本部 中位、2条の凸帯と波状文(10 本/回)。 内面：自然輪付音。	灰色 淡灰色	種類 △S	高 石 英 母 石	長 右 裏 左 角 圓 内 外	— — — — — — — —	— — — — — — — —	堅硬	本部 1/3	2区第5層

### 第3章まとめ

今回の調査は、比較的小規模な調査であったにも拘わらず古墳時代中期～後期に比定される遺構・遺物を検出した。調査地周辺では、本調査地の東約50m地点の八尾市黒谷439-1で昭和63年に八尾市教育委員会より実施された発掘調査(63-193)で古墳時代中期後半から後期<sup>註1</sup>に至る集落の存在が確認されている。今回の調査で、古墳時代中期後半から後期の集落範囲がさらに西部に広がることが明らかにされたが、遺物の出土密度においては既往調査地のほうが陵駕する関係であり、集落の中心はそれらの地点にあったようである。また、既往調査では、本調査と同様、鉄滓・櫛羽口・製塙土器・馬齒と言った製鉄に関連した遺物が出土しており、集団の職掌の一端が推定されるほか、本調査出土の韓式系土器の存在は集落を形成した集団の出自を推定するうえで示唆的である。一方、調査地の東方の生駒山西麓部においては、古墳時代中期～後期を中心とした群集墳である高安古墳群が存在している。今回の調査で検出された集落に関わる墓域については、信貴鋼索線(信貴山ケーブル)より南部の山麓裾部に分布する郡川支群・黒谷

支群との関りが強いものと考えられる。今回の調査で検出された、古墳時代中期～後期の集落は生駒山西麓部で確認された数少ない例で、高安古墳群の形成に関わりを持つこれら集団の性格や出自を考えるうえで貴重な資料と言えよう。



写真1 調査風景（南から）

註

註1 近江俊秀 1989 「15. 郡川遺跡(63-193)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告19 八尾市教育委員会

図 版



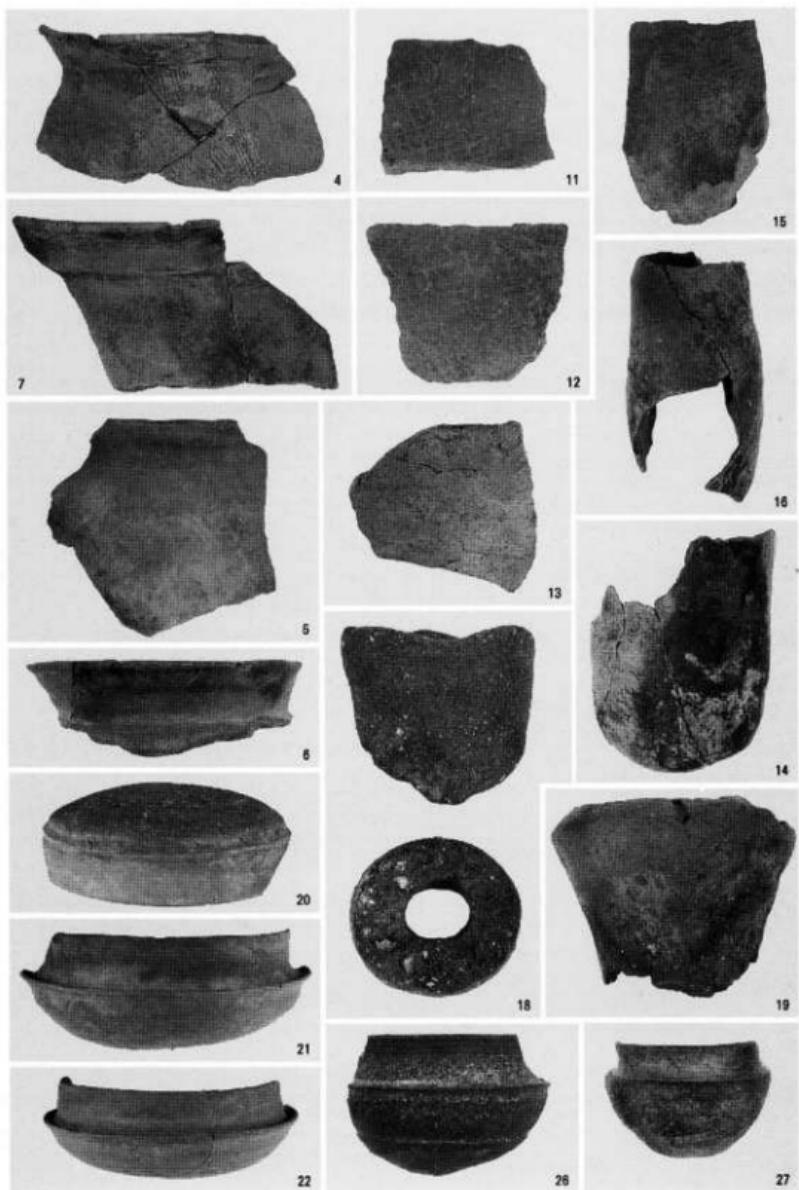
調査地全景（北から）



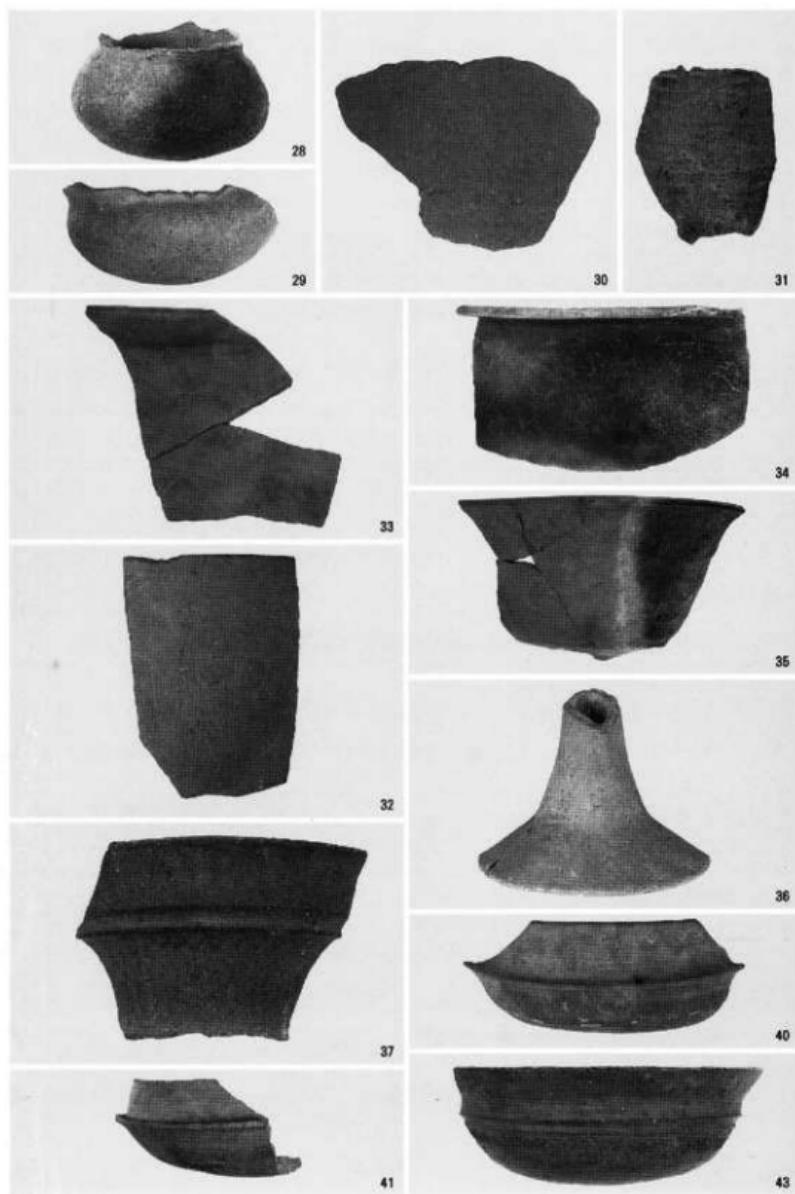
SD-1 (東から)



SD-2 (東から)



SD-1 出土遺物



包含層出土遺物

### III 神宮寺遺跡第1次調査（ZG93-1）

## 例　　言

1. 本書は、八尾市神宮寺5丁目179の一部・180で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する神宮寺遺跡第1次調査（ZG93-1）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋178号 平成5年3月30日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が西尾亀次氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成5年4月26日～平成5年5月27日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約320m<sup>2</sup>を測る。なお、調査においては市森千恵子・清水柳吉・中谷嘉多・西岡千恵子が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－市森・西岡・内山千栄子・吉田由美恵、遺物トレース－北原清子、本文の執筆・編集・写真撮影は岡田が担当した。

今回の調査にご尽力頂いた株式会社島田組の職長であられた三国淑子さんが、平成5年7月に不慮の事故で亡くなられた。三国さんは、未熟である私の無理な指示も、いつも笑顔で「先生、何とかやってみます。」と言って、円滑に調査が進むよう助けて頂いた。お休みになると、時折ご自慢の長い黒髪を櫛でゆっくりと解かしておられたのを覚えている。ここに心からご冥福をお祈りする。

## 本　文　目　次

第1章 はじめに.....	41
第2章 調査概要.....	42
第1節 調査の方法と経過.....	42
第2節 基本層序.....	43
第3節 検出遺構と出土遺物.....	47
第4節 出土遺物観察表.....	69
第3章 まとめ.....	78

## 挿図目次

第1図 調査地位置図	41
第2図 調査地区割り図	42
第3図 基本層序模式図	43
第4図 北地区遺構平面図	44
第5図 北地区東壁断面図	45
第6図 南地区遺構平面図	46
第7図 南地区東壁断面図	46
第8図 S E - 101平断面図	48
第9図 S E - 101出土遺物実測図（井戸側内 1~7、掘方内 8~11）	49
第10図 S E - 101曲物実測図	50
第11図 S P - 104柱根実測図	50
第12図 S X - 101出土遺物実測図	51
第13図 N R - 101出土遺物実測図	52
第14図 第6層出土遺物実測図	53
第15図 S D - 201出土遺物実測図 I	55
第16図 S D - 201出土遺物実測図 II	56
第17図 S D - 202平断面図	57
第18図 S D - 202出土遺物実測図	58
第19図 S D - 206出土遺物実測図	59
第20図 S D - 204~S D - 206出土遺物実測図	59
第21図 S O - 201・S D - 201平断面図	61
第22図 S O - 201出土遺物実測図	61
第23図 S O - 201出土遺物実測図	62
第24図 S O - 201出土土器・石器実測図	63
第25図 土器棺墓1平断面図	64
第26図 土器棺墓2平断面図	64
第27図 上器棺（上器棺墓1）実測図	65
第28図 土器棺（土器棺墓2）実測図	66
第29図 第7層出土遺物実測図 I	67

## 写 真 目 次

- 写真1 S E - 101掘削状況（東から） ..... 52  
 写真2 調査地〈左下〉と常世岐姫神社〈右上〉（南西から） ..... 79

## 図 版 目 次

- 図版一 北地区 第1遺構面全景（南から） 北地区 第2遺構面全景（南から）  
 図版二 南地区 遺構面全景（北から） S E - 101断ち割り（東から）  
 図版三 S E - 101完掘状況（東から） 北地区 第2遺構面北部（西から）  
 図版四 北地区 第2遺構面中央部（西から） S D - 202西部 上器集積（西から）  
 図版五 土器棺墓1検出状況（東から） 上器棺墓2検出状況（北から）  
 図版六 出土遺物 S E - 101 3・7・8、N R - 101 19、第6層 23・24・25・27・28・  
 29、S D - 201 43  
 図版七 出土遺物 S D - 201 44・51・57・63・67、S D - 202 69・73・74・76  
 図版八 出土遺物 S D - 202 77・78・80・84・85、S D - 204 86、S D - 206 96、  
 S O - 201 103  
 図版九 出土遺物 S O - 201 101・105・110・117、S O - 202 119・120、第7層  
 126・131  
 図版一〇 出土遺物 土器棺墓1 122・123  
 図版一一 出土遺物 上器棺墓2 124・125  
 図版一二 出土遺物 第7層 132・147・152・168・173・175、  
 第6層 32～39、S E - 101 11  
 図版一二 出土遺物 S D - 206 99、S O - 201 118、S O - 202 121、  
 第7層 178、S E - 101 4・5  
 図版一四 出土遺物 S E - 101 6・12・13、S P - 104 14

## 第1章 はじめに

神宮寺遺跡は、八尾市域の東南端に位置する遺跡で、現在の行政区画では神宮寺4・5丁目付近に拡がる弥生時代～古墳時代以降の複合遺跡である。地理的には東に生駒山地の西麓に拡がる扇状地の末端部と沖積地（河内平野）との交わる地点に位置する。当調査地周辺の遺跡では、北に恩智遺跡が隣接し、南部の柏原市域の山ノ井・法善寺一帯にも遺跡は拡がると考えられる。本調査地の西側には、古くから山麓沿いに通じる道として東高野街道（旧170号線）が伸びており、明確な街道の創設時期は不明であるが、平安遷都後は京都から河内国府、和泉国

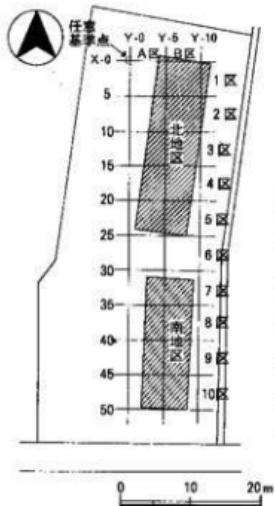


第1図 調査位置図

府を結ぶ古代の計画道路であった可能性が強い。街道名はいつごろからか高野山信仰に伴い多くの人々が往来した山縁から生まれたものであろう。この東高野街道から東へ約200mの山裾には、神宮寺、恩智、法善寺付近一帯の共同墓地となっている神宮寺墓地がある。入り口には、鎌倉時代に比定される人形輪塔や石塔、仏像が破損しつつも残存しており、当該期における多くの上豪の住地であったことを明示している。

現在まで当遺跡については、文献資料や八尾市教育委員会が実施した小規模な遺構確認調査をはじめ、隣接する周辺遺跡の調査結果から弥生時代～古墳時代に至る集落遺跡として周知されている。しかし、当地においては近年まで際立った開発事業が実施されておらず、発掘調査等による詳細な遺構・遺物の考古学的検証がなく、遺跡の実態において判断としないところが多くあった。今回の調査は当遺跡内における最初の本格的な発掘調査であり、結果、弥生時代中期の墓域をはじめ、同時代後期の集落域、空町時代の井戸を検出することができ、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認され、先人達の生活の一端を解明することができた。また、当地から南西に約60m地点において、平成6年2月に大阪府教育委員会によって実施された一般国道170号線歩道設置工事に伴う調査では、奈良時代の遺構をはじめ弥生時代から近代に比定される多量の遺物が検出されている。<sup>註1</sup>

## 第2章 調査概要



第2図 調査地地区割り図

### 第1節 調査の方法と経過

今回の調査は共同住宅建設工事に伴うもので、既述したように当調査研究会が神宮寺遺跡内で実施する第1次調査となる。調査区は、開発区域内における基礎工事部分を対象に、北地区と南地区的2箇所の調査区を設定することになった。規模は北地区が南北長25m×東西幅7m、南地区が南北長20m×東西幅7mの総面積約320m<sup>2</sup>を測る。調査区内の地区割りについては、北地区的北西隅に任意の基準点を設け、5m区画で東西方向を西からA区・B区、南北方向を北から1区～10区で示し、各地区をそれぞれ1A区～10B区と呼称した。

掘削については八尾市教育委員会が実施した遺構確認調査資料を参考に、現地表下0.4m前後の上層を機械により除去した後、以下0.5m前後については人力による掘削・

精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、現地の両地区の標高 (T.P.値) は北地区が16.6m前後、南地区が16.2m前後で南地区が北地区より0.4m前後低くなっている。

## 第2節 基本層序

当地は、今回の開発事業が実施される最近までは、南北両地区とも畑作として利用されていた。模式図で南地区の方が0.4m前後表上が低くなっている要因として、北地区でいう古墳時代から中世に相当する堆積層が、近世期に何らかの人为的營力によって削平された可能性が強い。よって南地区では古墳時代から中世に至る生活面は存在しない。

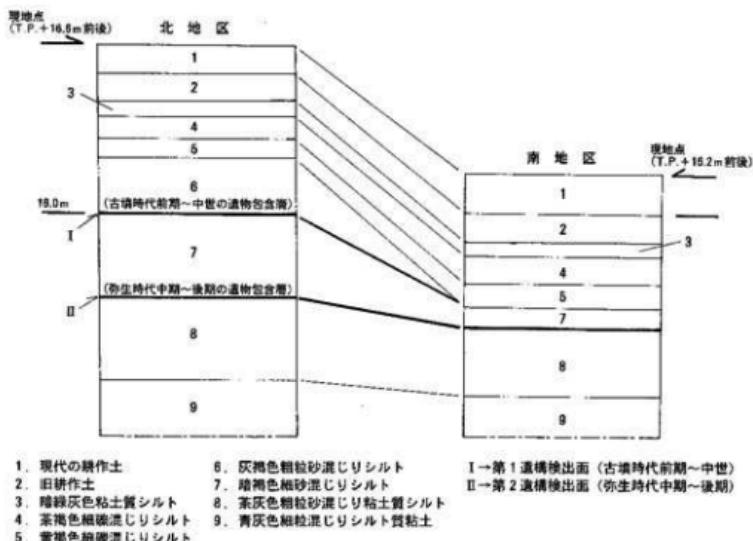
以下、調査区内で掘出した普遍的に堆積する9層について概説する。

第1層：現代の耕作土（層厚10~20cm）。

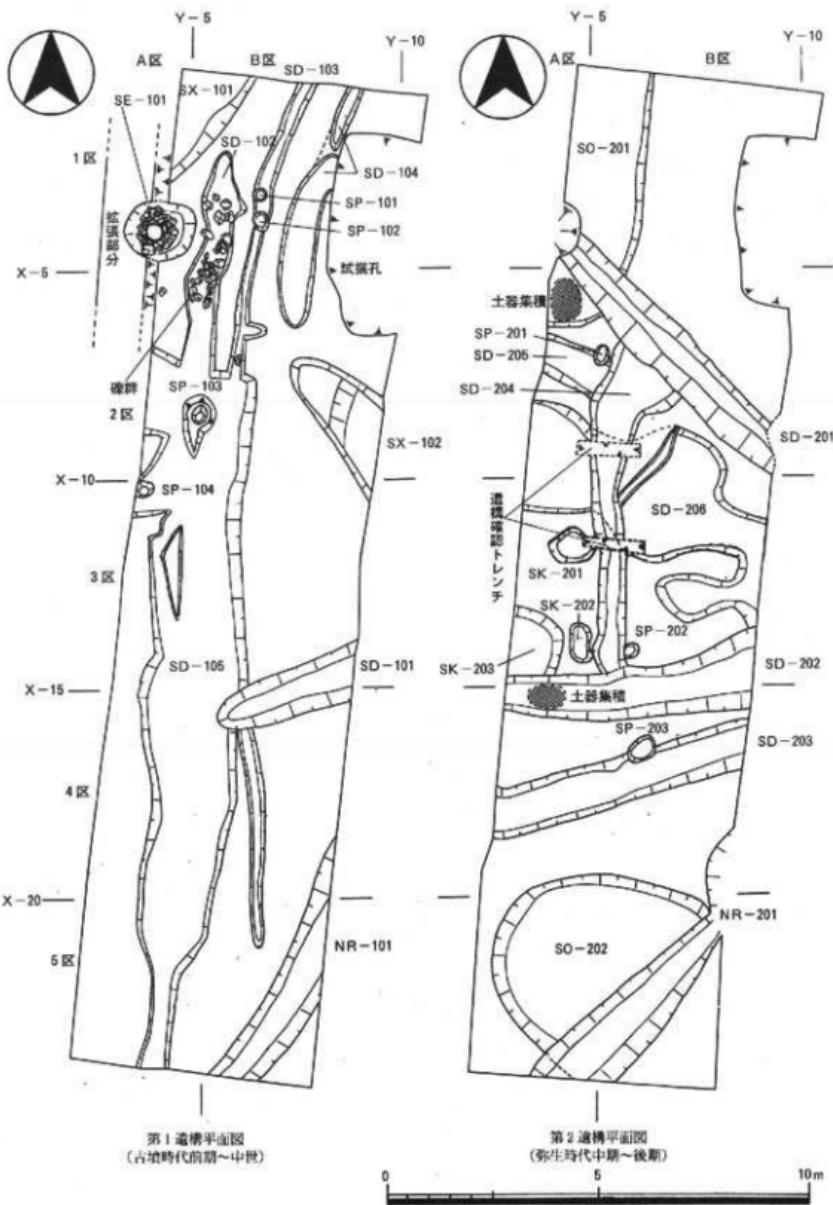
第2層：旧耕作土（層厚10cm前後）。

第3層：暗緑灰色粘土質シルト（層厚5cm前後）。旧耕作土に付随する床上にあたる土層と思われる。

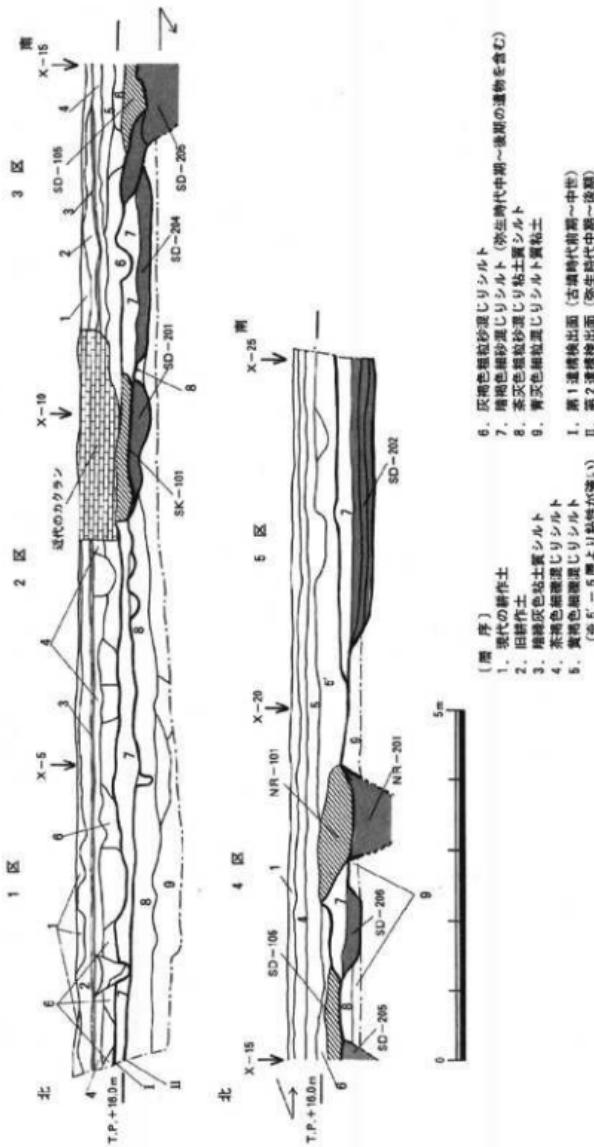
第4層：茶褐色細礫混じりシルト（層厚5~15cm）。国産陶磁器の小破片等、近世の遺物を若干含む。



第3図 基本層序模式図



第4図 北地区遺構平面図

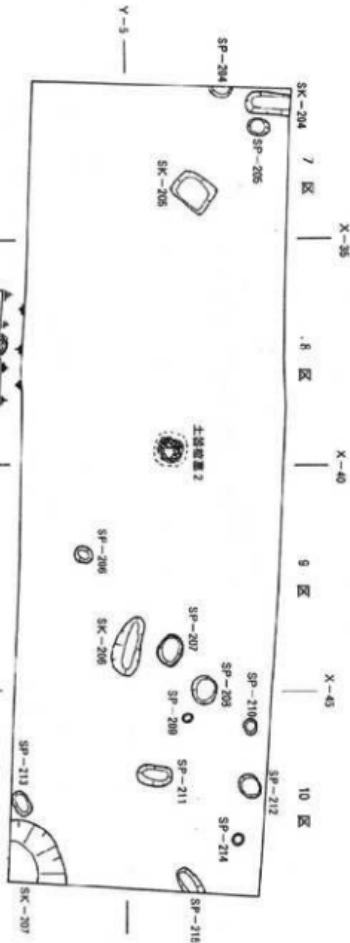


第5図 北地区東壁断面図

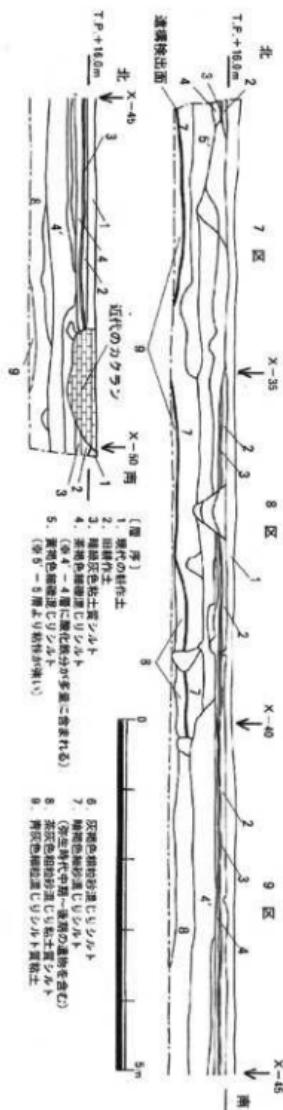


10m

第6図 南地区遺構平面図



第7図 南地区東壁断面図



- 第5層：黄褐色細礫混じりシルト（層厚10~30cm）。瓦器碗や土師器の破片が少量含まれる。
- 第6層：灰褐色粗粒砂混じりシルト（層厚15~25cm）。古墳時代前期～中世の遺物が含まれる。南地区には存在しない。
- 第7層：暗褐色細砂混じりシルト（層厚30cm前後）。弥生時代中期～後期の遺物を含む。北地区では本層の上面（標高16.0m前後）で、古墳時代前期～中世の遺構面を検出した（第1遺構検出面）。
- 第8層：茶灰色粗粒砂混じり粘土質シルト（層厚15~30cm）。本層の上面において、南北両地区では弥生時代後期の遺構面（標高15.7m前後）、さらに南地区では同一面（標高15.5m前後）において中期の土器棺墓2基を検出した（第2遺構検出面）。
- 第9層：青灰色細粒砂混じりシルト質粘土（層厚20cm以上）。

### 第3節 検出遺構と出土遺物

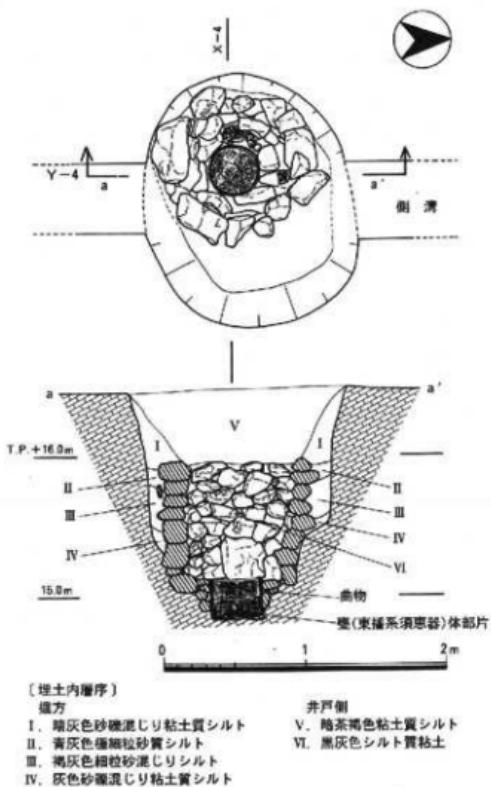
北地区では、第7層上面において古墳時代前期～中世にかけての遺構面を検出した。遺構検出内容は、室町時代の井戸1基（SE-101）・溝1条（SD-101）・小穴6個（SP-101~106）、鎌倉時代の溝4条（SD-102~105）、古墳時代後期の不明遺構2箇所（SX-101~102）、古墳時代前期初頭の自然河道1条（NR-101）である。さらに北地区および南地区では下層の第8層上面において、弥生時代後期の土坑7基（SK-201~207）、溝6条（SD-201~206）、落ち込み2箇所（SO-201~202）、小穴15個（SP-201~215）を検出した。また南地区では同一面上で、弥生時代中期の土器棺墓2基（土器棺墓1・2）を検出した。以下、時期別に記述する。

#### <室町時代>

##### 井戸（SE）

###### SE-101

北地区南西1A区～1B区・2A区～2B区で検出した。曲物を伴う石組の井戸である。井戸中央の一部を削溝によって削平してしまったが、平面の形状は検出状況から、やや東西が長い楕円形を呈するとみられる。掘方の規模は東西径1.9m・南北径1.4m・深さ2.0mを測る。石組に用いられている礎は径20~40cmほどのものである。石組が確認できたのは掘方上面より0.7m下であったが、本來は井戸側として幾つか上位に組まれていたものと考える。石組の上位部分は井戸廃絶の際に崩されたとみられ、井戸の東で検出した鎌倉時代の溝（SD-106）内にその一部と思われる30個前後の礎が投棄されていた。さらに井戸底中央には径36cm前後・高さ14cm前後の曲物（第10図）が2段積み重ねられ、その最深部には瓦質大甕の休部片が幾枚も積み重なるように敷かれている。これらからは、曲物内の水溜場に絶えず清水が保たれるよ

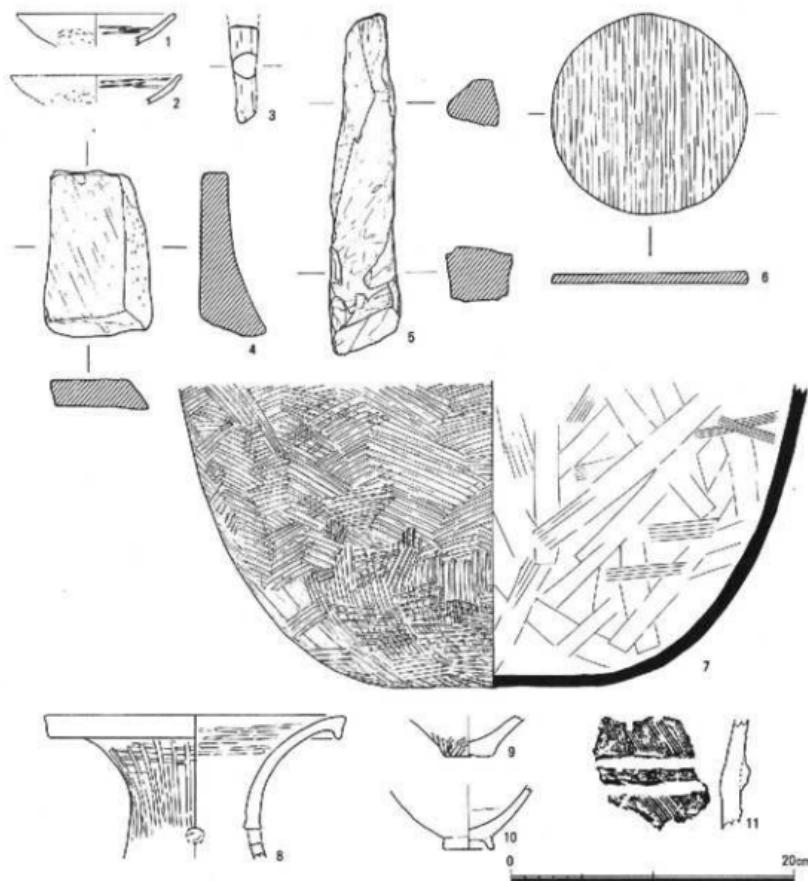


第8図 SE-101平断面図

しい。(6)は容器又は柄杓の底板とおもわれるが、円周部に小孔は認められない。法量は、径14cm前後・厚さ1cm前後の円形を呈する。柾目材を使用し、材は針葉樹と考えられる。また、井戸側(曲物)内底に敷かれていた土器片を接合復元した結果、第9図(7)に掲載したように13世紀代の所産と思われる東播系瓦質大壺の体部下半部であることがわかった。法量は底径<sup>注2</sup>14cm前後を測るもので、調整は外面タタキ(5本/cm)・内面ヘラナデが施される。一方井戸掘方内からは、弥生時代後期～古墳時代後期の遺物が検出され、そのうち図化できたものは、弥生時代後期の器台(8)・甕(9)・小型台付き鉢(10)、古墳時代後期の円筒埴輪脚部片(11)である。器台(8)の下半部は不明であるが残存する形態から、受部と裾部が結合した鼓形を呈する畿内第V様式のなかでも新段階に位置付けられるものと思われる。円筒埴輪(11)は、1次調整のみのタテハケが顯著にみられる川西編年でいう第V期に比定されよう。<sup>注3</sup>

う創意工夫をこらした当時の人々による生活の知恵が窺われる。掘方断面の形状は逆凸状を呈する。掘方埋土は上から第I層暗灰色砂礫混じり粘土質シルト・第II層青灰色極細粒砂質シルト・第III層褐灰色細粒砂混じりシルト・第IV層灰色砂礫混じり粘土質シルトの4層に分層できる。井戸側内埋土は上から第V層暗茶褐色粘土質シルト・第VI層黒灰色シルト質粘土の2層に分層できる。遺物は、井戸側内から瓦器碗(1・2)、瓦質三足釜(3)、砥石(4・5)、曲物底板(6)が出土した。

瓦器碗2点は成形・調整の粗い小型の終末期のものである。砥石は刃物の当たり痕が明瞭に残っており、特に(4)の方は使用による磨り減りが著

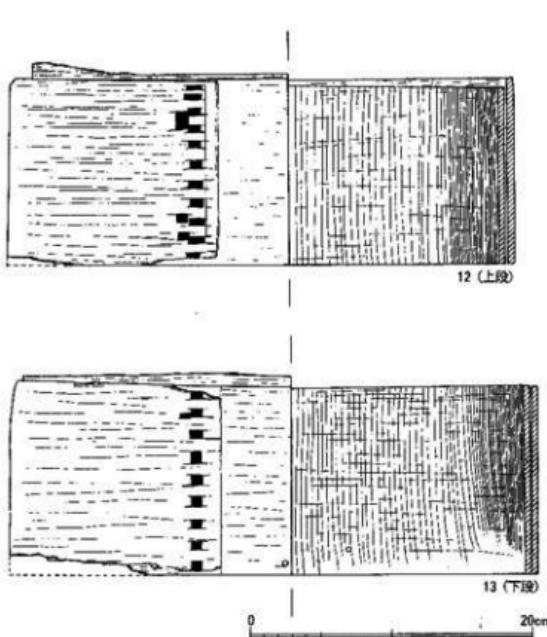


第9図 SE-101出土遺物実測図（井戸側内 1～7、掘方内 8～11）

溝 (SD)

SD-101

3B区～4B区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明であるが、北東～南西方に向ひぐる溝と思われる。規模は検出部で検出長3.5m・幅1.2m・深さ0.3m前後を測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は暗青灰色粘土質シルトで、炭化物が少量混入する。遺物は土器の小破片が出土した。



第10図 SE-101曲物実測図

#### 小穴 (S P)

1 B区で S P-101・  
102、2 B区で S P-  
103、3 A区で S P-  
104の4個を検出した。  
これら小穴の規模は径  
0.3~0.5m・深さ0.1~  
0.2mを測る。上面の  
形状は、S P-101が  
円形、S P-102・103  
が橢円形、S P-104  
が隅丸方形を呈する。  
断面の形状は、全て浅  
い半円形を呈する。遺  
構内埋土は全て暗灰色  
極細粒砂混じりシルト  
質粘土の單一層で、各  
小穴内からは上師器お  
よび須恵器の小破片が

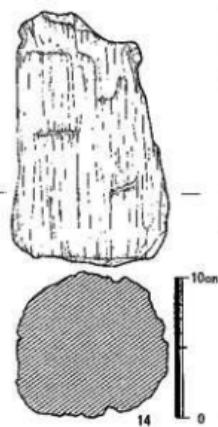
僅かに出土した。また、S P-104には径10cm前後・残存高18cm  
前後の柱根（第11図 14）が遺存していた。他の小穴についても  
柱穴である可能性が高く、面的な制約もあって建物跡を復元する  
ことはできなかったが、これらの小穴は住居の一端を暗示させる。  
さらに層位関係や検出レベルおよび出土遺物片から、井戸（SE-  
101）とも時期的に並行するものと判断され、居住域を想定した  
場合、井戸との有機的なつながりに興味がもたれる。

#### <鎌倉時代>

##### 溝 (S D)

S D-102~105

S D-102~104の3条はほぼ南北に並行して伸びる溝で、各溝  
の規模は幅0.3~0.8m・深さ0.2~0.3mを測る。断面の形状は浅



第11図 S P-104柱根実測図

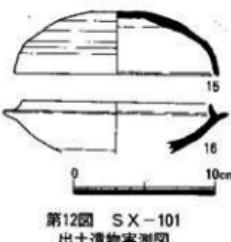
その検出状況からみて、SD-102・103の溝が合流する他、別の数条の溝が交差および重複し、SD-105に併合する。規模は検出長17m・幅0.6~2.5m・深さ0.2m前後を測る。これらの溝は島地にみられる耕作溝あるいは水田に伴う集排水溝と判断される。各溝内埋土は全て茶灰色細礫混じり粘土質シルトの單一層である。各溝内からは図化できなかったが14世紀頃の所産と考えられる瓦器碗の破片や土師器片が出土した。

## &lt;古墳時代後期&gt;

## 不明遺構 (SX)

## SX-101

北地区北西隅1A区～1B区で検出した。遺構の北側および西側が調査区外に至っているため、性格的なことは不明である。埋土は淡灰色砂質シルトである。内部から土師器や須恵器の破片が出土したが、そのうち図化できたのは須恵器蓋杯で、田辺氏編年のTK209型式の所産とみられる杯蓋(15)および・杯身(16)の2点である。

第12図 SX-101  
出土遺物実測図

## SX-102

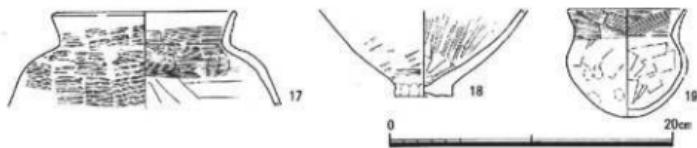
北地区2B区～3B区で検出した。東部が調査区外に至っているためSX-101と同様、性格的なことは不明である。規模は検出部で最大長2.8m、底部は東半部が一段深くなつておき、西部で0.1m・東部で0.3mを測る。埋土は暗青灰色シルト質粘土で、炭化物が一部に混入する。内部からは土師器の破片とともに円筒埴輪の破片が数点出土した。いずれの遺物も図化不能であるが、埴輪に残存するタガの形状から第V期の範疇に納まるものと思われる。

## &lt;古墳時代前期&gt;

## 自然河道 (NR)

## NR-101

北地区南東隅4B区～5B区で検出した。北東～南西に流路方向をもつ河道である。検出規模は幅1.2m前後・深さ0.6m前後を測る。断面の形状は逆凸状を呈する。埋土は上層が灰褐色系シルト～細粒砂、下層が灰白色系極粗粒砂～細礫である。遺物は上層から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭にかけての盃・甌・鉢が出土した。そのほとんどがローリングを受けた磨滅の著しいものや原形を止めない破片で、辛うじて図化できたものは弥生時代後期末の所産である甌2点(17・18)、庄内式古段階に比定される小型甌(19)の3点である。(17)は肩の張る<sup>註5</sup>体部から比較的短い口縁部が付き、外側のタタキ整形が口縁部下位までみられる。小型甌(19)は、球形の体部からやや短めに外反気味に伸びる口縁部が付く。



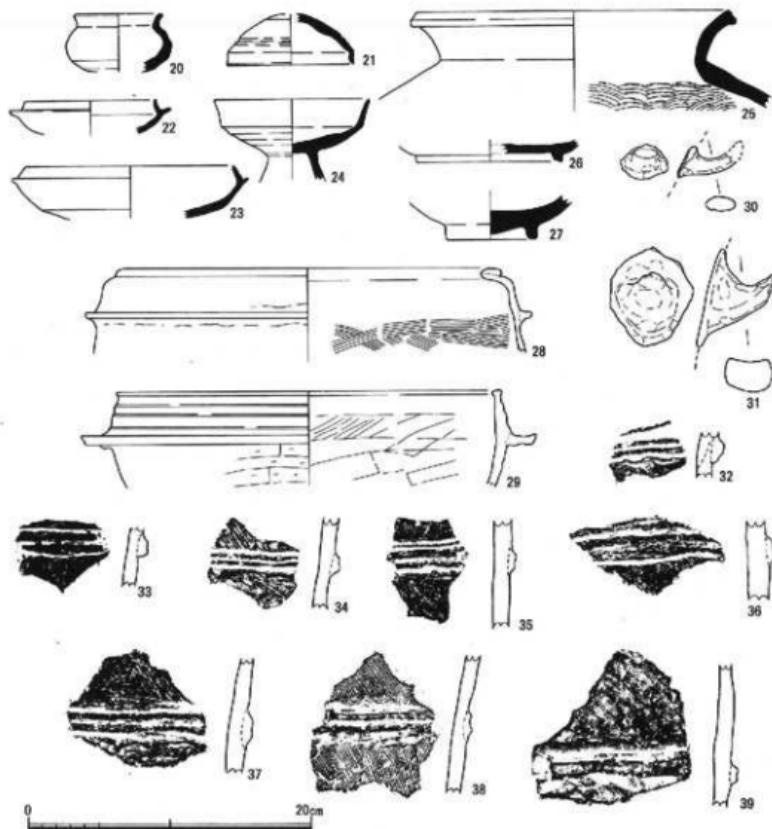
第13図 NR-101出土遺物実測図

[遺構に伴わない出土遺物 第6層内]

第6層内から遺構に伴わない遺物として図化できたものは、須恵器の小型壺(20)・杯蓋1点(21)・杯身2点(22・23)・高杯(24)・壺(25)・杯(26)、青磁碗(27)、羽釜2点(28・29)、瓶の把手2点(30・31)、円筒埴輪の胴部片8点(32~39)である。須恵器(20~25)の年代については、TK43型式~TK209型式の範疇に納まるもので、6世紀末葉に比定されるであろう。高台付き杯(26)の高台は内傾する面を呈するもので、佐藤編年の平安時代Ⅰ期に相当すると思われる。青磁碗(27)は14世紀以降に出現する龍泉窯系の輸入青磁とも推察されるが、残存状況から詳細な評価を欠く。羽釜のうち(28)は口縁端部を外側に短く折り返して丸く納める大和産、(29)は口縁部外面に段を有する河内産で、いずれも14世紀代の所産ともわれる。埴輪については、全てタガは突出度が低く、断面が不整形を呈する。また、外面の調整はタテハケの1次調整がほとんどで、なかでも(38)はそれが顕著に窺われる。また(39)はハケナデをみないナデ調整で終わる。以上の特徴からこれらの埴輪は、川西編年の第V期に相当するものといえる。



写真1 SE-101掘削状況(東から)



第14図 第6層出土遺物実測図

## 第2遺構面

&lt;弥生時代後期&gt;

上坑 (SK)

SK-201

北地区3A区で検出した。平面の形状は不定形で、断面は逆台形を呈する。検出規模は長径1.2m・短径0.8m・深さ0.2mを測る。埋土は上層が暗茶褐色細粒砂混じりシルト質粘土、下層が炭化物を含む灰黒色砂質シルトの2層からなる。遺物は下層から、甕口縁の破片とサヌカイト剥片が1点出土した。

#### S K - 202

S K - 201の南で検出した。平面の形状は南北にやや長い楕円形を呈する。断面の形状は逆台形を呈する。検出規模は長径0.9m・短径0.6m・深さ0.1mを測る。埋土は茶褐色細砂混じりシルトである。遺物は出土しなかった。

#### S K - 203

北地区3 A区で検出した。遺構の南側はS D - 205によって切られ、西側は調査区外に至るといった状況で全容は不明である。検出部の規模は最大径1.4m・深さ0.26mを測る。埋土は茶褐色細砂混じりシルトで、内部からは甕の体部片とサヌカイト剥片が1点出土した。

#### S K - 204

南地区北東隅の7 B区で検出した。東部は調査区外に至るため、全容は不明である。規模は検出部で東西長1.0m・南北幅0.5m・深さ0.1mを測る。埋土は茶褐色砂礫混じり砂質シルトで、内部からは弥生土器の小破片が僅かに出土した。

#### S K - 205

S K - 204の南東部の7 B区で検出した。平面の形状は北西-南東方向に長い隅丸長方形を呈し、断面は浅い半円形を呈する。規模は長径1.0m・短径0.7m・深さ0.2mを測る。埋土は茶褐色砂礫混じり砂質シルトで、内部からは土器の小破片が僅かに出土した。

#### S K - 206

南地区9 A区～9 B区で検出した。南北に長い楕円形を呈し、断面は浅い半円形を呈する。規模は長径1.3m・短径0.6m・深さ0.1mを測る。埋土は茶褐色砂礫混じり砂質シルトで、遺物は出土しなかった。

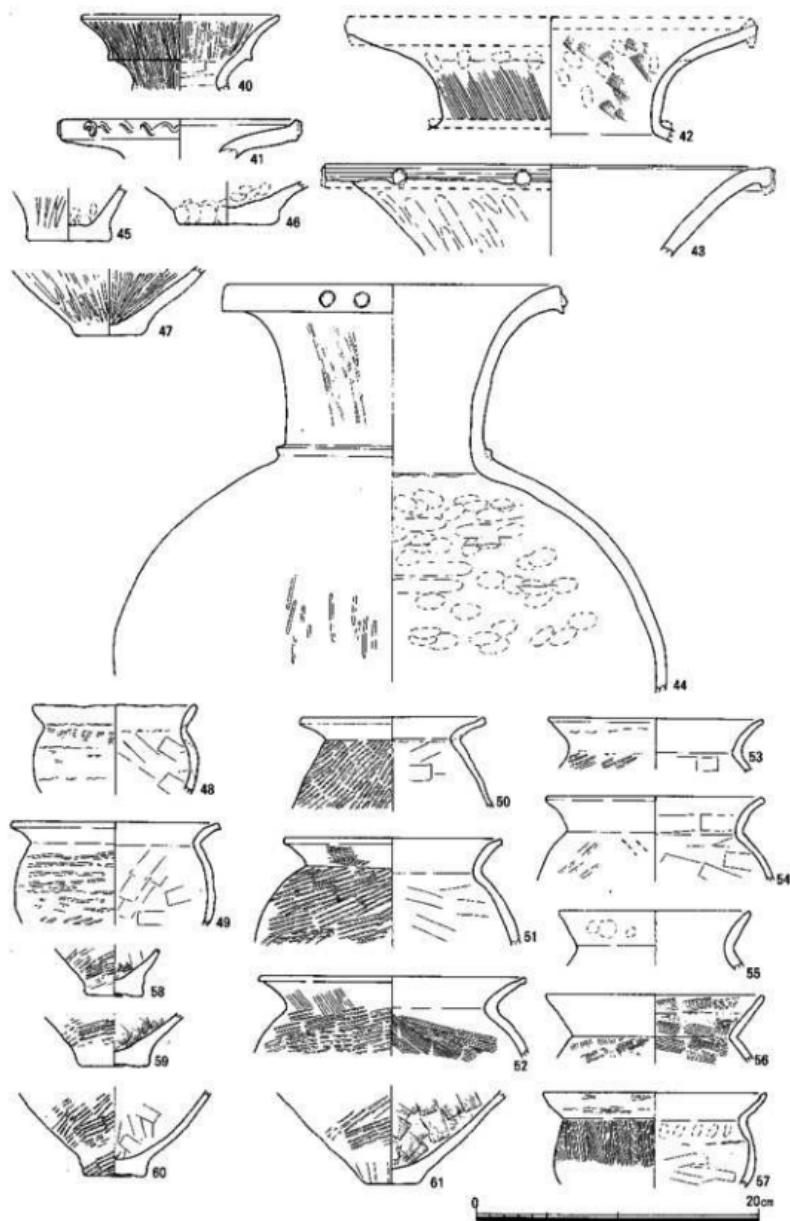
#### S K - 207

南地区南西隅の10 A区で検出した。西部および南部は調査区外に至るため全容は不明である。規模は検出部で最大径1.5m・深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色砂礫混じり砂質シルトで、遺物は出土しなかった。

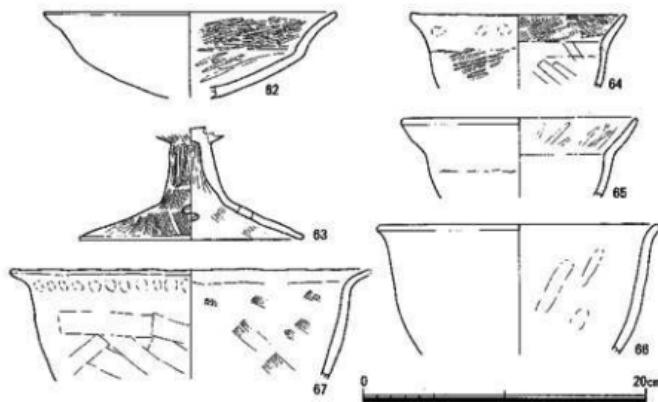
#### 溝 (S D)

#### S D - 201

北地区1 A区～2 B区で検出した。南東-北西方向に伸びる溝で、規模は幅1.3m・深さ0.6mを測る。断面の形状は摺鉢状を呈する。埋土は上から灰色細粒砂～細礫・茶褐色極細粒砂・灰青灰色極細粒砂の3層がレンズ状に堆積する。埋土内からは甕・壺・高杯をはじめとする多量の遺物が出土した。そのうち図化できたものは甕が8点(40～47)、壺が14点(48～61)、高杯が2点(62・63)、鉢が4点(64～67)である。(40)の複合口縁壺は、擬口縁の発達が従来のものより一段と進むタイプで、弥生時代後期のなかではもっとも新しい段階に位置付けられ



第15図 SD-201出土遺物実測図 I



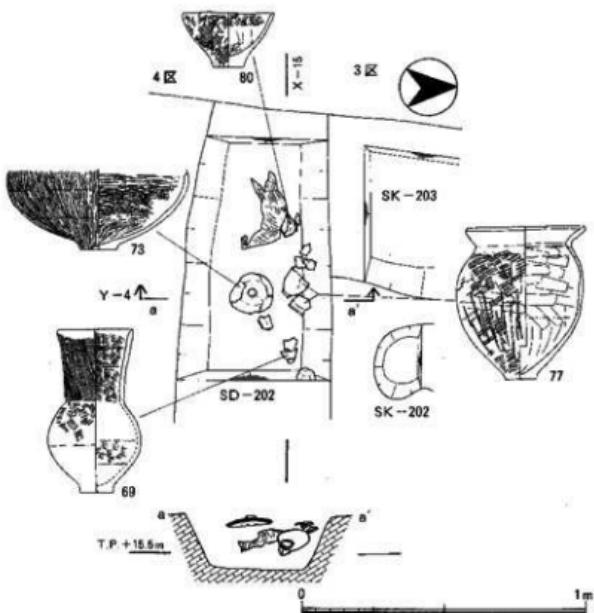
第16図 SD-201出土遺物実測図II

る。複合口縁壺（41）および広口壺（43・44）は、いずれも口縁端部がそのまま面をもって終わり、端面には円形浮文や波状文などによって装飾が施される。加えて（44）の肩部の突帯は、円形竹管浮文を含めて畿内第V様式の文様上の特色を表す。壺については、口縁端部の形態上の分類として面をもつもの（49・50・51・52・54）と丸く納まるもの（48・53・55・56・57）の2種類を見る。また、壺については当該期には（48・49・57）にみられる小型品が登場するのが特色の一つともいえよう。さらに当該期には（48）のように「分割成形技法」が顕著にみられる壺が盛行する。高杯（62・63）は、口縁部と脚台底部の免述したもので、畿内第V様式のなかでも比較的新しい段階に位置付けられる。鉢については（64・65）のような小型品が当該期から壺に倣って登場し、大型品から小型品への移行を窺わせる。

#### SD-202

北地区3A区～3B区・4A区～4B区で検出した。東西方向に伸びる溝で、幅1.2～2.0m・深さ0.6m前後を測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上から明褐色細礫・灰色細砂混じりシルト質粘土・明青灰色砂質シルトの3層に分層できる。溝内の西部では、当該期の一括資料とも言えるべき遺物の集積が確認された。そのうち認定できたのは、壺6点（68～73）・壺6点（74～79）・鉢3点（80～82）・高杯3点（83～85）である。広口壺（68）は口縁端部がやや肥厚し面をもつ。長頸壺（69）は、口頭部長と肩部高がほぼ等しく、突出した底部を有する。（70～73）の壺の底部は全て突出した平底をもち、（72）を除いて外面上には輻方向の密なヘラミガキが認められる。（73）の肩部が扁球形を呈する壺は、当該期のなかでも新様相の段階で数を増す。壺は（75・76）にみるような小型品が日立ち、畿内第IV様式までの大型品はみ

られない。さらにこの時期には(77・78)にみるような外側のタタキ痕を、ハケナデ調整またはヘラ状工具によって消去しようとする気風が窺える。鉢は小型鉢(80・81)と大型鉢(82)で、体部からそのまま口縁部に至るもの(80)と、外反して受け口状の口縁部をもつもの(81・82)がある。高杯(83・85)は口縁部及び脚部が発達したもので、



第17図 SD-202平面図

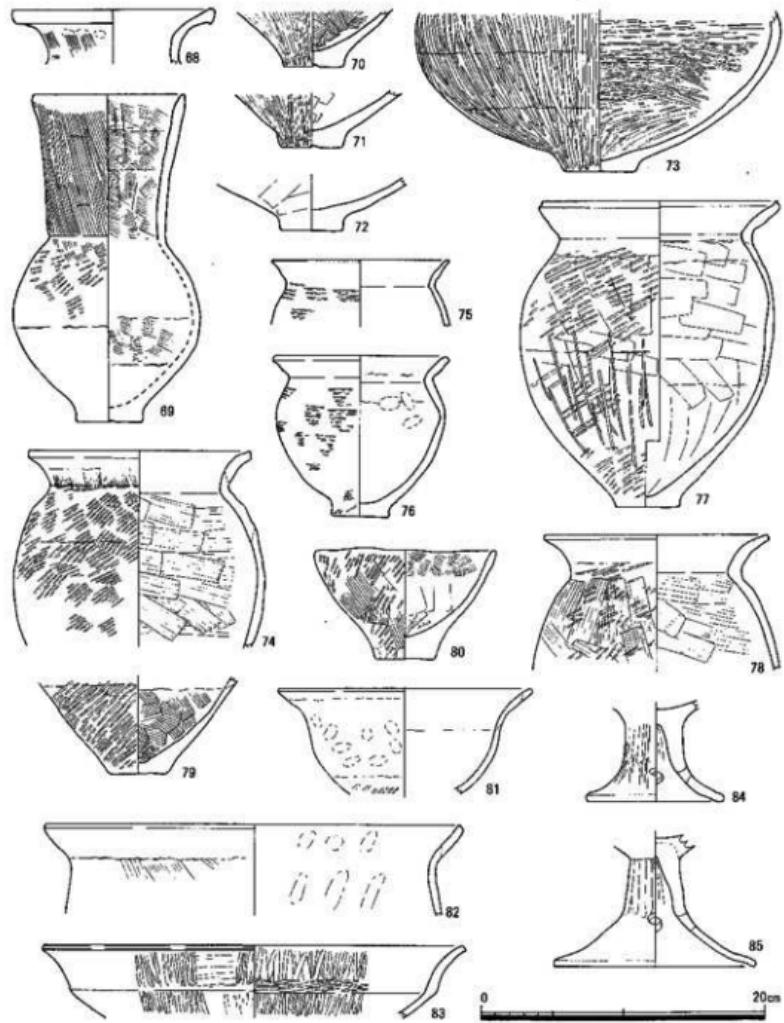
(83)の口縁部外面には丁寧なヘラミガキが施される。(84)は小型の高杯である。

#### SD-203

SD-202の南側でやや並行して伸びる溝である。検出規模は幅1.1m・深さ0.5mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上から茶褐色砂質シルト・黄褐色砂質シルト・明青灰色シルト・赤褐色粗粒砂混じりシルトの4層に分層できる。遺物は壺・甕の破片が少量出土したが、図化できるものはなかった。

#### SD-204

北地区のほぼ中央にあたる2B区～3B区で検出した。南北方向に伸びる溝であるが、北端をSD-201、南端をSD-206によって切られ、途絶える。規模は検出長7.5m・幅0.7～2.0m・深さ0.1～0.2mを測る。断面の形状は、浅い半円形を呈する。埋土は暗青灰色細粒混じり砂質シルトの単一層である。内部からの出土遺物で図化できたものは、壺4点(86～89)・甕(90)・小型台付き鉢(91)である。広口壺(86)は、肥厚して垂下する口縁部外面に竹管浮文で加飾される。(87)の広口壺の口縁部外面には放射状にヘラミガキが施される。小型台付き鉢



第18図 SD-202出土遺物実測図

(91) の台部は上げ底状で、ユビオサエの整形が粗い。

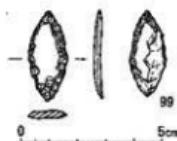
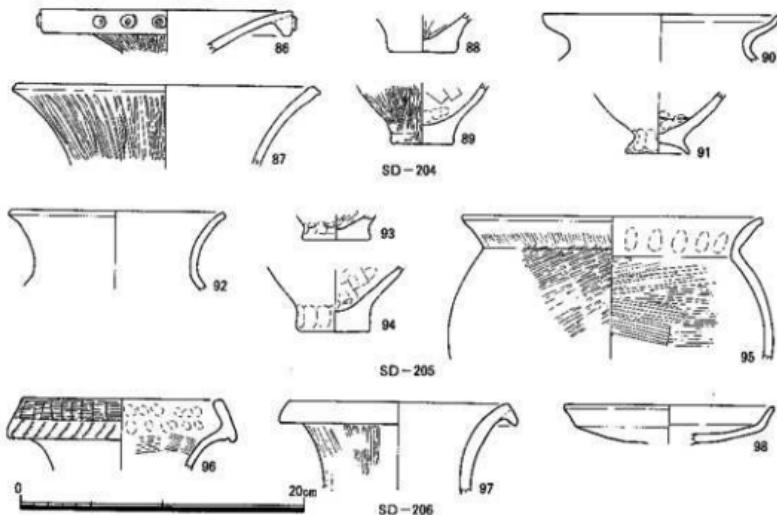
SD-205

北地区2A区～2B区で検出した。やや東西方向に伸びる溝と思われるが、東部はSD-

204によって切られる。検出規模は幅1.0m・深さ0.1mを測る。断面の形状は浅い半円形を呈する。埋土は上から灰黄色微砂混じり粘土質シルト・灰青色砂質シルトの2層に分層できる。出土遺物のうち図化できたものは、壺3点(92~94)と壺(95)がある。広口壺(92)は外反する口頭部をもつ。肩の張る壺(95)の口頭部外面には接合後の調整と思われるハケナデがみられる。

## SD-206

北地区2A区~2B区・3A区~3B区で検出した。東西方向にやや蛇行気味に伸びる溝である。溝の中央はSD-204によって分断される。検出規模は幅2.5~3.0m・深さ0.2m前後を測る。断面の形状は浅い半円形を呈し、埋土は暗褐色疊混じり粘土質シルトが堆積する。内部からの遺物で図化できたものは、壺2点(96・97)・高杯(98)・サスカイト製石鐵(99)がある。畿内第IV様式前半の所産とみられる広口壺(96)の口縁端部外面には、櫛描縦状文と列点文が加飾される。もう一方の広口壺(97)も垂下して面を有する口縁部であるが、装飾は施されない。(98)の杯部が浅い椀状を呈する高杯は、畿内IV様式から第V様式への過渡期に位置するものと推察する。石鐵(99)は尖基式である。

第19図 SD-206  
出土遺物実測図

第20図 SD-204~SD-206出土遺物実測図

### 小穴 (S P)

#### S P - 201

北地区 2 B 区で検出した。平面の形状は梢円形、断面は逆台形を呈する。規模は長径 0.5m・短径 0.3m・深さ 0.1m を測る。埋土は暗茶褐色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

#### S P - 202

北地区 3 B 区で検出した。平面の形状は円形、断面は半円形を呈する。規模は径 0.4m・深さ 0.1m を測る。埋土は茶褐色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

#### S P - 203

北地区 4 B 区で検出した。平面の形状は梢円形、断面は逆台形を呈する。規模は長径 0.8m・短径 0.6m・深さ 0.1m を測る。埋土は暗茶褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

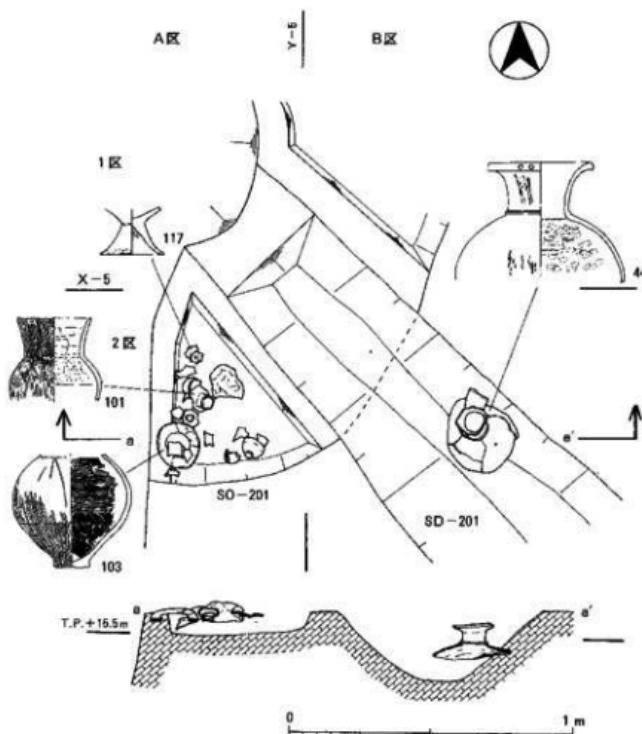
#### S P - 204~215

南地区北部で 2 個 (S P - 204・205)・中央で 1 個 (S P - 206)・南部で 9 個 (S P - 207~215) の総数 12 個を検出した。これらの小穴を平面の形状で分類すると、円形 5 個 (S P - 205・206・208・209・214)・梢円形 5 個 (S P - 207・210・211・212・213)・不明 2 個 (S P - 204・215) になる。断面の形状は概ね逆台形を呈する。規模は径 0.3~0.6m・深さ 0.1~0.2m を測る。埋土はすべて暗灰色砂礫混じり砂質シルトで、各小穴内からは図化不能な土器の小破片が僅かに出土した。これらの小穴は、調査区内でみる限りにおいて住居を構成するような規則性をもつ柱穴は確認できないが、土坑も含めて北地区からつづく居住域の広がりを示唆する。

### 落ち込み (S O)

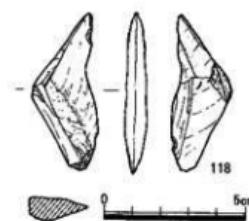
#### S O - 201

北地区北西隅 1 A 区~1 B 区・2 A 区~2 B 区で検出した。北部および西部は調査区外に至り、南部は S D - 201 によって一部切られる。最大検出長 6.4m・深さ 0.1~0.2m を測る。埋土は灰黒色粘土質シルトで、遺構内の中央付近では、径 0.5m 前後の範囲で炭化物を含む焼土層が確認された。焼土層内に遺物は含まれていなかった。焼土層以外で遺存度の良い図化可能な遺物は、遺構内南端部で検出した土器集積からのものである。内容は、壺 10 点 (100~109)・甕 6 点 (110~115)・高杯 2 点 (116・117)・サヌカイト製の削器 (118) である。(100~103) は当該期から主流を占める長頸壺である。口頸部の外面調整にはヨコナデ (100)・ヘラミガキ (101)・ヘラナデ (102) の 3 種類がみられる。(103) の肩部外面には「△」のヘラ記号のような工具痕がみられる。広口壺の口縁端部外面には 3 条の凹線文を施すもの (104) と円形竹管浮文で加飾されるもの (105) がある。また、(105) の広口壺は胴部が長胴化から球形化に移行する兆しの窺えるものである。受口状の口縁部をもつ甕には、端部をつまみ上げるもの (110)

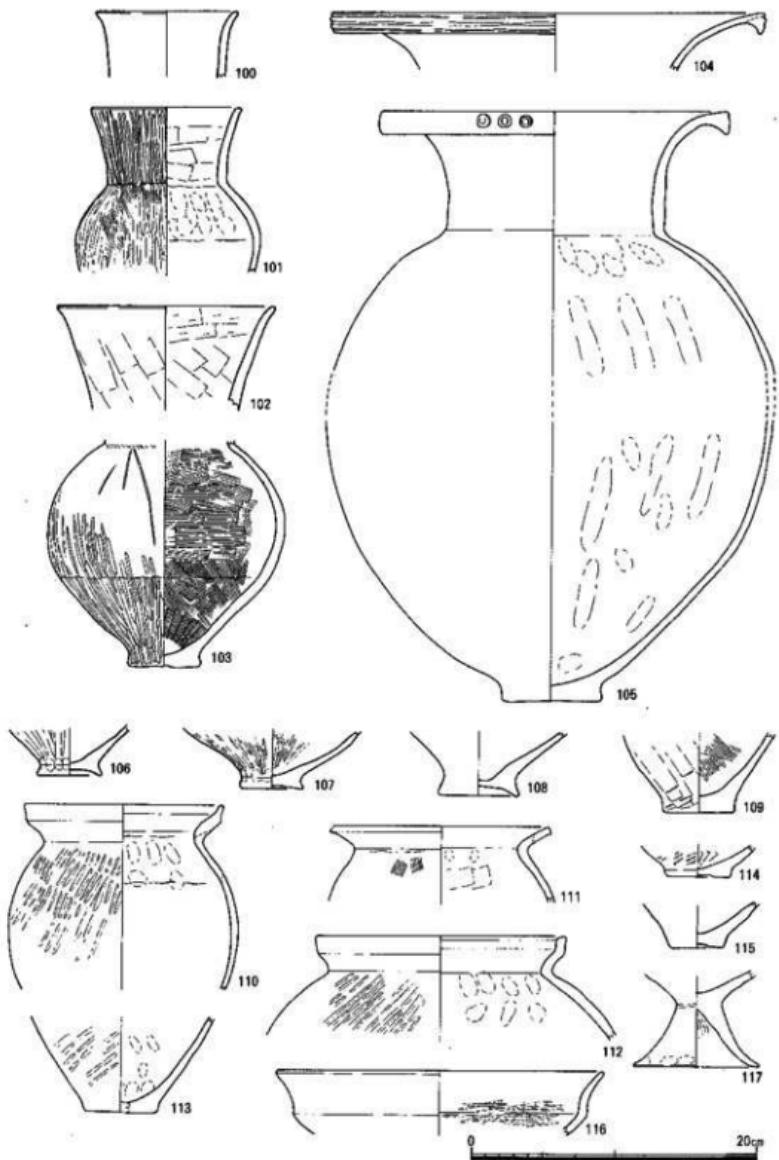


第21図 SO-201・SD-201断面図

と肥厚するもの（112）がある。（111）の甕は大きく屈曲する口縁部で端部に面をもつ。高杯は口縁部の外反度と長さが進行する（116）がみられる一方で、円錐台形脚台をもつ小型のもの（117）が出現する。削器（118）は、素材剝片の縁辺の一部をえぐるようにして細部調整が施されている。



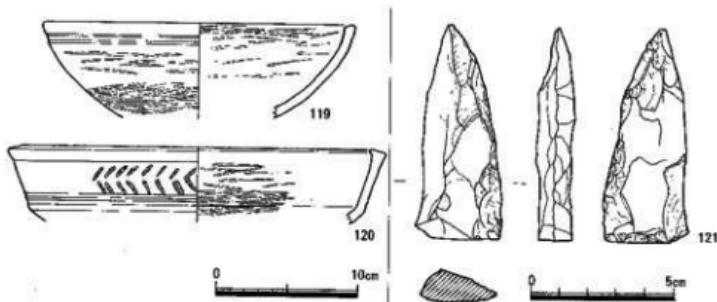
第22図 SO-201出土遺物実測図



第23図 SO-201出土遺物実測図

## S O - 202

北地区南部5 A区～5 B区で検出した。遺構の南東部はNR-201によって切られ、さらに調査区外に至っているものと思われる。検出規模は最大径5.0m・深さ0.1～0.3mを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトである。内部からは壺・甕の破片が少量出土し、そのなかで固化できた遺物は、鉢(119)・高杯(120)・サヌカイト製石槍(121)である。高杯(120)は畿内第IV様式に相当するもので、内側にやや肥厚する口縁端部を有し、L1縁部外面には「くの字状」の列点文と2条の回線文を施す。(119)の楕型の鉢は、畿内第V様式に入って盛行をみるものである。(121)は細身で肉厚なことや側縁に刃溝しがみられないなどのことから石槍と考えられる。



第24図 SO-201出土土器・石器実測図

自然河道 (NR)

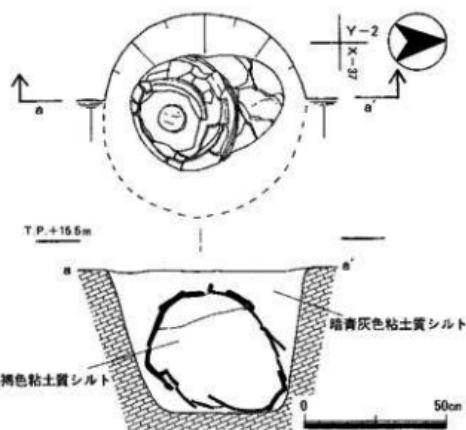
## NR-201

北地区南端5 A区～5 B区で検出した。本河道は上層の古墳時代初頭の河道(NR-101)とはほぼ重複するものである。検出規模は幅0.7～1.6m・深さ0.6mを測る。断面の形状は逆凸形を呈する。埋土は灰白色粗粒砂～細粒砂で、内部からはローリングを受けた小型甕の破片が出土した。

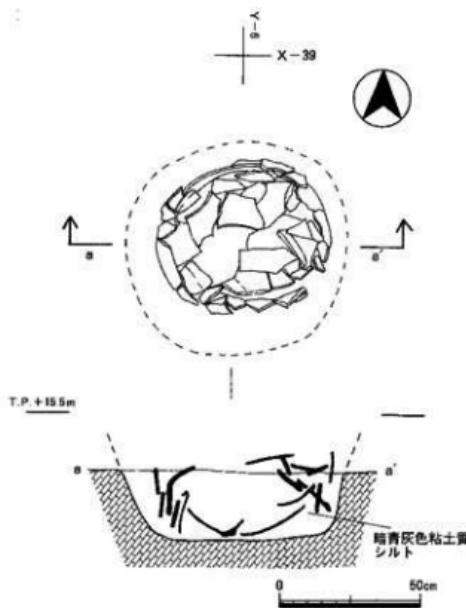
&lt;弥生時代中期&gt;

## 土器棺墓 1

南地区8 A区の西側溝内で検出した。大型鉢(122)を棺蓋、大型甕(123)を棺身としたものである。掘方の東肩を側溝によって削平してしまったが、規模について西肩から推定復元すると径0.7m前後・深さ0.5m前後を測るものと思われる。上器棺は南東に約40度前後傾いている。蓋である大型鉢は土圧によって体部と底部は分断される。棺内には遺骸の腐蝕分解に伴って有氣質が供給されたとみられる黒褐色粘土質シルトが堆積していた。掘方内には暗青灰色粘



第25図 土器棺墓1平面断面図



第26図 土器棺墓2平面断面図

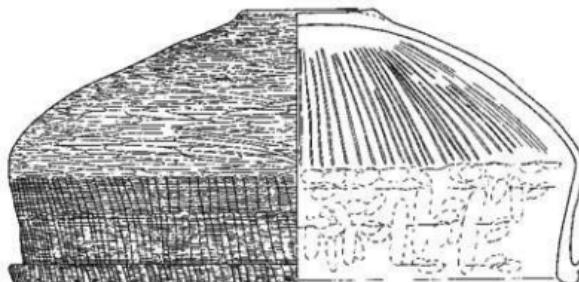
土質シルトが埋積する。上器棺の身として使用されている大型壺の法量は、口径30.6cm・器高39.6cmを測る。形態は、平底で最大径を上位にもつ体部から端部がやや肥厚する短めの口縁部が付く。調整は、内面ユビオサエ後ヘラナデ・外面斜め方向のヘラミガキが施される。また、体部下半部には径8~10cmの焼成後の打ち欠き孔がみられる。

一方、蓋として使用されている大型鉢の法量は、口径38.5cm・器高19.6cmを測る。形態は垂下する口縁端部を有し、底部は短めに突出する平底を呈する。調整は内面上半はユビナデ・下半は放射状のヘラミガキ、外面上半は簾状文・下半は横方向のヘラミガキが施され、口縁端部外面上には刺突孔を有する。土器の形態から双方とも畿内第IV様式の後半に位置付けられる。

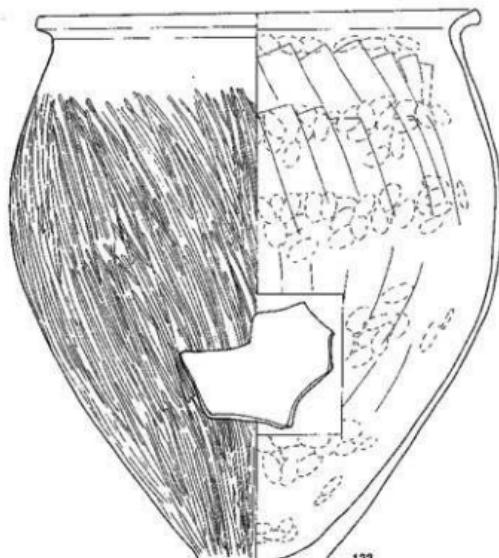
#### 土器棺墓2

土器棺墓1から南東に約4.5m前後の地点で検出した。埋葬形態は土器棺墓1と同じと思われるが、墓壙は後世に削半を受けたとみられ、掘方の規模については不明である。さらに上器棺の蓋となる大型鉢(124)についても既に破損しており、原

形を留めるものではなく、口縁部の約2/3のみが辛うじて残存する状況であった。棺身となる大型甕(125)についても棺本來の形状を保っていない。掘方内には暗青灰色粘土質シルトが埋積する。棺を復元した結果、土器棺の身として使用されている大型甕の法量は、口径27.4cm・器高19.3cmを測る。形態は平底で最大径を上位にもつ体部から垂下して面をもつ口縁がつく。調整は内面上半横方向のヘラミガキ・下半ハケナデのち放射状のヘラミガキ・外縁方向のヘラミガキが施される。一方、蓋と



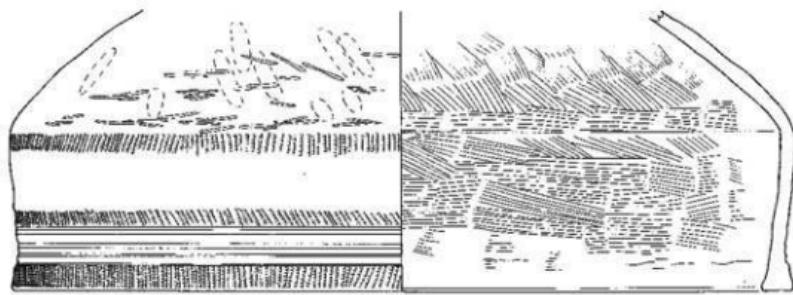
122



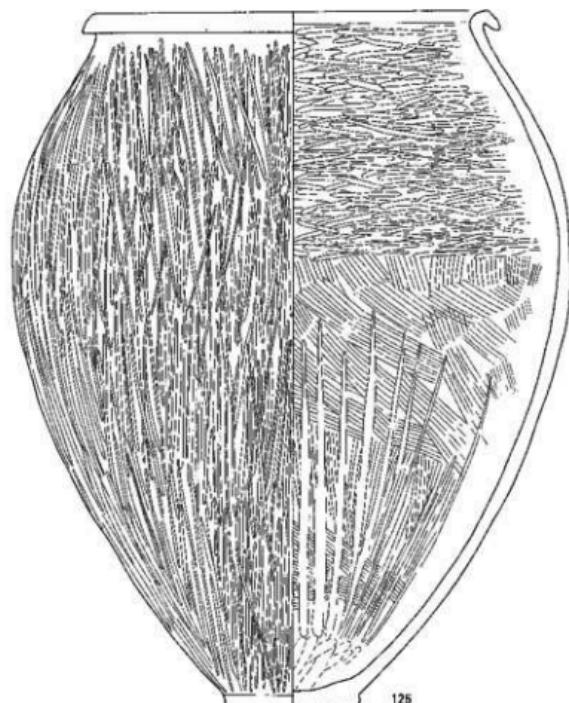
123

第27図 土器棺（土器棺墓1）実測図

して使用されている大型甕の法量は、復元からの推定で口径54cm前後・体部最大径55cm前後を測るものと思われる。形態の知り得るところ、口縁部は肥厚し、外縁及び上方に面をもつ。調整は内面ハケナデ、外面列点文・凹線文・ヘラミガキによって構成される。時期は土器棺墓1と同様、畿内第IV様式の後半に位置付けられる。



124



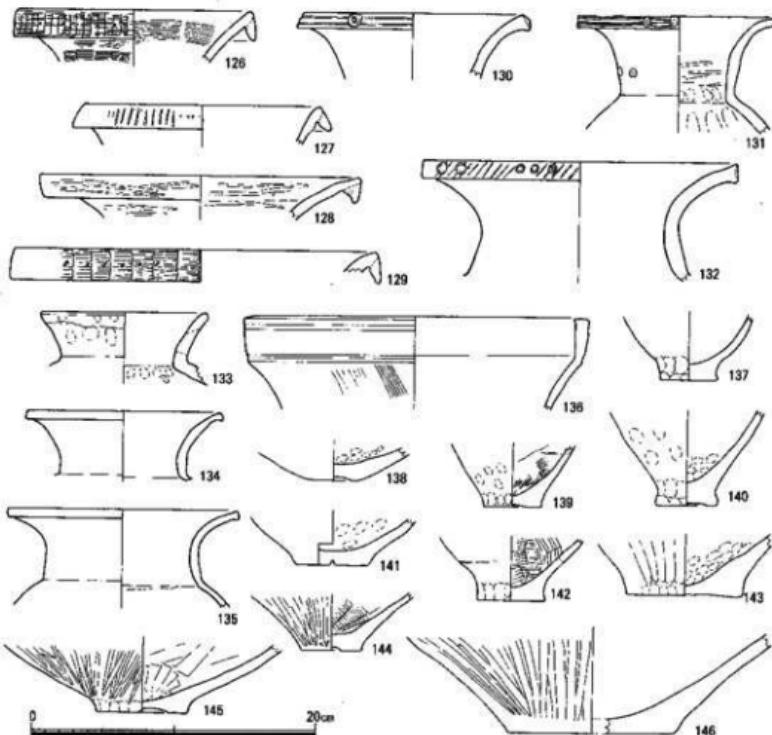
125

20cm

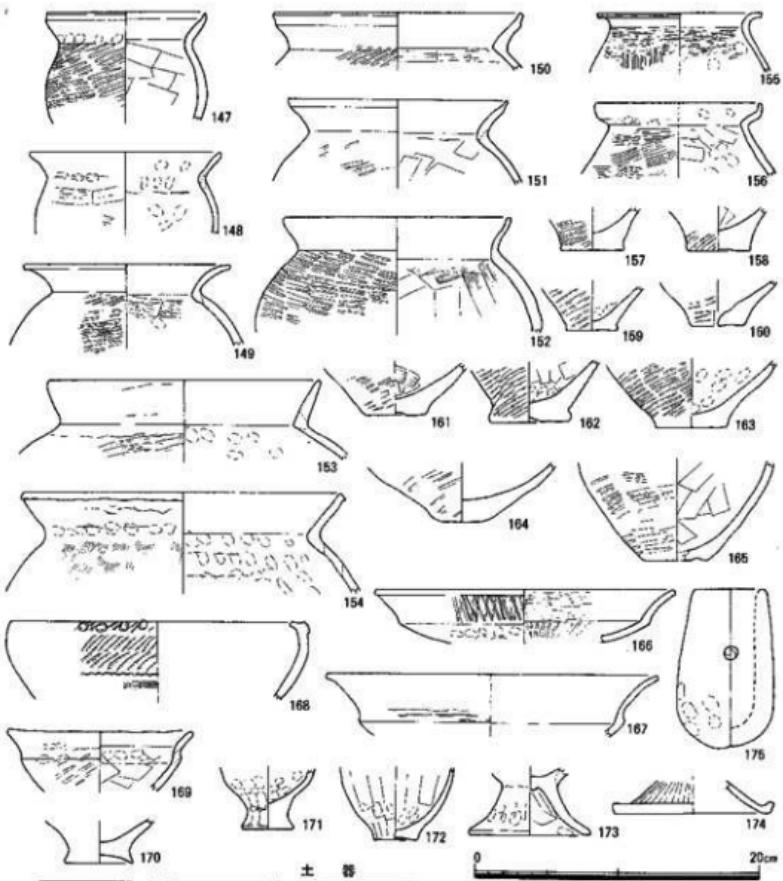
第28図 土器棺（土器棺裏2）実測図

## [造構に伴わない出土遺物 第7層内]

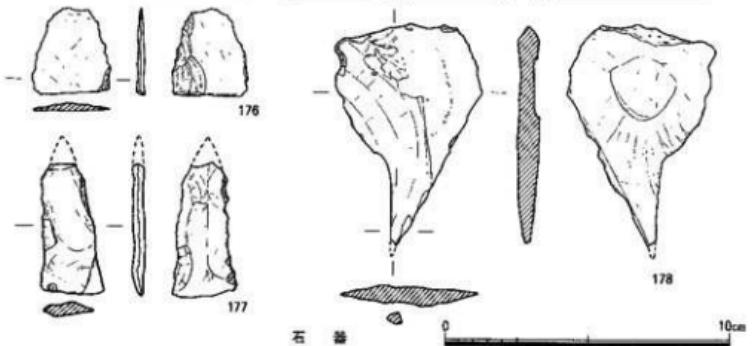
南北両地区の第7層から出土した弥生時代中期～後期の遺物で同化できたものは、壺21点(126～146)・甕19点(147～165)・高杯2点(166・167)・鉢5点(168～172)・脚台部2点(173・174)・飯蛸壺(175)・サヌカイト製石器3点(176～178)である。畿内第V様式の所産である(126～129)の底下するU縁部をもつ広口壺のうち(126・127・129)は、簾状文を施した口縁部端面に刺穴孔を有する。広口壺(130～135)のうち(130～132)は、口縁部の端部がやや肥厚して面を有し、円形竹管浮文・回線文・列点文によって加飾される。円形竹管浮文は、畿内第V様式の特色の一つでもある。大型壺(136)は畿内第IV様式前半の所産で、直立する付加状の口縁部に上下2条の凹線文が施される。壺は後期に入ると(147～149)のように小型のものが目立つ。外面調整は底部も含めてほとんどタタキ痕を残すものであるが、



第29図 第7層出土遺物実測図 I



土 器



第30図 第7層出土遺物実測図Ⅱ

(148) のようにヘラナデ等によってタタキ痕が消されるものも散見される。また、(155・156) の壺については口縁部・肩部の形態、さらに胎上の様相から(155) が讃岐系、(156) が山陰系と思われる。底部の形態は平底・ドーナツ底を呈するものであるが、(160) のような穿孔を有するものもみられる。高杯(166・167) は畿内第V様式のなかでも新相のもので、口縁部は外反して伸び、内外面の調整がヘラミガキのもの(166) とナデのもの(167) がある。鉢は(168) のように外面に円形浮文・列点文・櫛描箋状文で加飾される畿内第IV様式に類するものと、畿内第V様式の粗製の小型台付き鉢(169・171・172) が混在する。(173・174) の脚台については台付き壺か鉢か断定し難い。飯蛸壺(175) は完形品で、色調は赤みが勝った褐色を呈する。(176) は継長の小さい素材剥片の一部の片面に調整を施した削器と思われる。(177) は背面に自然面をもつ剥片を素材とした尖頭器で、刃部の先端を欠く。(178) の石錐は大剥離を残す頭部から徐々に尖らせるもので、錐端部を欠く。

#### 第4節 出土遺物観察表

遺物番号 採取場所 出土地点	基盤番号	基盤番号	重量 (g)	口径 (cm)	底高	調査・技法	色調 外面 内面	胎 上	焼成	保存度	備考
1 (瓦) SE-101井内			11.2	—	—	外面：ヨコナデ、ユビオサエ 内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	灰白色～淡 灰色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/8	
2 同 上			12.0	同 上	—	—	灰白色	密	良好	口縁部1/8	
7 六 (瓦) SE-101井内			—	—	14.0	外面：タタキ (5~6本/cm) 内面：ヘラミナデ	暗灰色 墨灰色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	全体下半 2/3	束縛系
6 六 (陶土器) SE-101井内			21.0	—	—	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、胎 形中央に透孔の痕跡有り。 内面：ヘラミガキ、ナデ	基灰色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部1/8	
9 (陶土器) SE-101井内			—	—	3.0	外面：タタキ 内面：ヘラナデ	暗灰色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	底部のみ	
10 小型台付き鉢 (陶土器) SE-101井内			—	—	3.6	外面：ナデ 内面：ナデ	明褐色	2mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	底部のみ	
15 (陶器) SX-101			14.4 4.5	—	—	天井部外周1/2周輪ヘラケズリ、他 は凹凸ナデ	灰色	堅緻	良好	1/3	
16 (陶器) SX-101			—	13.2	—	底外部1/2周輪ヘラケズリ、他 は凹凸ナデ	灰色	堅緻	良好	1/6	
17 (土器) NR-101			—	12.4	—	外面：ヨコナデ、タタキ (4本/ cm) 内面：ヨコナデ、ハケナデ (10本/ cm)、ヘラナデ	暗茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～肩 部1/6	内面全域 に黒度を 有する
18 同 上			—	—	4.0	外面：タタキ、ハビオサエ 内面：ヘラナデ	茶褐色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
19 六 (土器) NR-101			8.2 7.7	—	—	外面：ハケナデ (10本/cm)、ヘラ ナデ、ユビオサエ 内面：ハケナデ (10本/cm)、ヘラナデ	暗茶色	0.6mm以下の 砂粒を含む	良好	ほぼ完形	

遺物番号 国歴番号	器種 出土地点	法量 (g)	口径 基面	調査・技法	色調 外面 内面	胎土	焼成	遺存度	備考
20 小型壺 (須恵器) 第6層	体部最大径 7.3	5.8 天井部外面1/4回転ヘラケズリ、他 は回転ナダ	淡灰色	堅緻	良好	口縁部～体 部1/6			
21 杯蓋 (須恵器) 第6層	—	8.6 —	天井部外面1/4回転ヘラケズリ、他 は回転ナダ	青灰色	堅緻	良好	1/6		
22 杯身 (須恵器) 第6層	—	9.0 —	内外面回転ナダ(底部欠損)	灰色	堅緻	良好	1/6		
23 六 同上	—	14.4 —	底部外曲1/2回転ヘラケズリ、他 は回転ナダ	灰系色	堅緻	良好	1/3		
24 六 高杯 (須恵器) 第6層	—	19.8 —	底部外面1/2回転ヘラケズリ、他 は回転ナダ	灰青色	堅緻	良好	杯底1/6		
25 六 樂 (須恵器) 第6層	—	22.0 —	外面：裏蓋のため黒色不明 内面：回転ナダ、内底青タタキ	青灰色	堅緻	良好	口縁部～肩 部1/6		
26 六 杯 (須恵器) 第6層	高台径 10.2 高台高 0.5	— —	内外面回転ナダ。高台貼付。	淡灰色	堅緻	良好	底部1/6		
27 六 碗 (青磁) 第6層	高台径 6.2 高台 1.1	— —	高台削り出し。輪は、高台内面中 心部付近を残して全面に施される。	新 白色 青～暗緑灰 色 青～乳灰色	堅緻	良好	底部のみ完 存	中国磁器	
28 六 羽釜 (土師器) 第6層	周径 31.8	26.0 —	外面：ヨコナデ、ナデ、接合縫 2条有る。 内面：ヨコナデ、ハケナデ(日本 /cm)、ナデユビナデ	乳白色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～脚 部1/6	大和窯	
29 六 同上 周径	32.4	27.0 —	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ、口 縫部外側に3条の段を持つ。 内面：ヨコナデ、ヘラナデ	暗灰色	密	良好	口縁部～脚 部1/6	同内窓	
40 推古川根窯 (弥生土器) SD-201	—	13.6 —	外面：ヨコナデ、ガキ、接合縫 内面：ヘラミガキ、ヘラナデ	褐灰色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～脚 部1/4		
41 同上	—	16.4 —	外面ヨコナデ、ナデ。口縫部 外側には2条の波状文を施した後、 竹筋形浮文が貼付けられる。	乳灰茶色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/6		
42 同上	—	28.7 —	外面：口に貼する1段階縮緼 欠欠。ハケナデ(5~6本/cm)、ユ ビオサエ。難断下位に貼付け突帯 の模様有り。接合縫を1条有する。 内面：ハケナデ(日本1cm)、ユビ オサエ	素灰色	3mm以下の砂 粒を含む	堅緻	口縁部1/6	内面に黑 斑を有する	
43 六 広口壺 (弥生土器) SD-201	—	31.8 —	外面：ヨコナデ、ユビオサエ。口 縫部外側には2条の波状文を施 した後、円形浮文が貼付けられ る。内面：ヨコナデ、ナデ	灰褐色 褐灰色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/4	同窓外向 に黒斑を有する	
44 七 同上	—	23.2 —	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ。口 縫部外側には円形浮文が貼付け られる。難断下位に貼付け突帯を 有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナ デ。接合縫を3条有する。	淡褐色 淡褐色	9mm以下の砂 粒を多量に含 む	良好	1/2		
45 (弥生土器) SD-201	底径 5.6	—	外面：ヘラミガキ 内面：ユビオサエ	暗灰茶色	3mm以上の砂 粒を含む	良	底部のみ		
46 同上	底径 7.2	—	内外面ユビオサエ、ナデ	灰茶色	7mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	外面に黑 斑を有す る	
47 同上	底径 5.9	—	外面：ユビオサエ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	素灰色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ		

遺物番号 図版番号	層 地盤	深度 (cm)	状態	測定・枝法	色調 外面 内面	粒度 2mm以下 の砂 粒を含む	土質	地成	遺存度	備考
48 (寄生土器) SD-201	煙 体部最大径 11.5	11.4	外面:ヨコナデ、タキ。接合部 を3条有する。 内面:ヨコナデ、ヘラナデ。接合 部を1条有する。	暗褐色	良 口縁部～胃 部1/4					
49 同上	11.4 体部最大径 14.0	11.4	外面:ヨコナデ、タキ 内面:ヨコナデ、ヘラナデ	暗褐色	3mm以下 の砂 粒を含む	良 口縁部～体 部1/8				外面に煤 付着
50 同上	12.0	12.0	外面:ヨコナデ、タキ(4本/cm) 内面:ヨコナデ、ヘラナデ。接合 部を1条有する。	相灰色	6mm以下 の砂 粒を含む	良好 口縁部～体 部1/8				外面に煤 付着
51 七	13.2	13.2	外面:ヨコナデ、ハケナデ、タキ + (3~4本/cm) 内面:ヨコナデ、ヘラナデ	茶灰色 褐色	4mm以下 の砂 粒を含む	良 1/2				側部外面 に煤付着
52 同上	18.0	18.0	外面:ヨコナデ、ハケナデ(11本/ cm)、タキ(4本/cm) 内面:ヨコナデ、ハケナデ(10本/ cm)	淡灰褐色	3mm以下 の砂 粒を含む	良 口縁部～胃 部1/5				口縁部外面 に黒斑 有する
53 同上	13.0	13.0	外面:ヨコナデ、タキ(3本/cm)。 接合部を2条有する。 内面:ヨコナデ、ヘラナデ	茶褐色	5mm以下 の砂 粒を含む	良 口縁部1/4				外面に煤 付着
54 同上	15.0	15.0	外面:ヨコナデ、タキ 内面:ヨコナデ、ヘラナデ	茶褐色	3mm以下 の砂 粒を含む	良好 口縁部～胃 部1/4				外面に煤 付着
55 同上	13.4	13.4	外面:ヨコナデ、ユビオサエ 内面:ヨコナデ	黄褐色	5mm以下 の砂 粒を多量に含 む	良 口縁部1/5				
56 同上	15.2	15.2	外面:ヨコナデ、タキ後ハケナ デ 内面:ハケナデ(12本/cm)	褐色	1mm以下 の砂 粒を少額含む	良 口縁部1/4				外面に煤 付着
57 七	19.6 体部最大径 14.2	19.6	外面:ヨコナデ、ヘラミガキ、ハ ケナデ(12本/cm)。接合部を1条 有する。 内面:ヨコナデ、ユビオサエ、ヘ ラナデ。接合部を1条有する。	暗茶褐色 褐色	2mm以下 の砂 粒を含む	良好 口縁部～体 部1/4				外面に煤 付着
58 同上	3.8	-	外面:タキ(4本/cm) 内面:ハケナデ(10本/cm)	褐色 茶褐色	3mm以下 の砂 粒を含む	良好 底部のみ				
59 同上	4.8	-	外面:タキ(3本/cm) 内面:ハケナデ(8本/cm)	茶褐色	4mm以下 の砂 粒を含む	良好 底部のみ				内面に煤 付着
60 同上	4.2	-	外面:タキ(4本/cm) 内面:ヘラナデ	暗茶褐色	3mm以下 の砂 粒を多量に含 む	良 底部のみ				内面に煤 付着
61 同上	3.4	-	外面:タキ(3~4本/cm)、ヘ ラナデ 内面:ハケナデ(10本/cm)	茶褐色	6mm以下 の砂 粒を含む	良好 底部のみ				内面に煤 付着
62 (寄生土器) SD-201	20.4	-	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヘラミガキ	茶褐色	6mm以下 の砂 粒を含む	良好 杯部1/6				口縁部外 面に黒斑 有する
63 七	15.6	-	外面:ヘラミガキ、ハケナデ(7 本/cm)。接合部を1条有する。 内面:ハケナデ(7本/cm)。	茶褐色	6mm以下 の砂 粒を含む	良好 脚部1/3				側部外面 に黒斑を 有する
64 (寄生土器) SD-201	15.0	-	外面:ユビオサエ、タキ(3本/ cm)。接合部を1条有する。 内面:ハケナデ(7本/cm)、ヘ ラナデ。接合部を1条有する。	暗灰褐色 茶褐色	0.5mm以下 の砂 粒を含む	良 口縁部～体 部1/4				外面に煤 付着
65 同上	16.4	-	外面:ヨコナデ、ナデ。接合部 を1条有する。 内面:ヘラミガキ、ナデ	茶褐色	4mm以下 の砂 粒を含む	良 口縁部～体 部1/4				側部外面 に黒斑を 有する
66 同上	19.0	-	外面:ナデ 内面:ユビナデ、ナデ	茶褐色 茶灰色	4mm以下 の砂 粒を多量に含 む	良 口縁部～体 部1/8				外面に煤 付着

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量 (cm)	口径 差異	調査・枝法	色調 外面 内面	胎土	焼成	進度	備考
67 七	鉢 (弥生土器) SD-201	25.2 —	—	外面：ユビオサエ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ハケナデ、ナデ	茶灰色	3mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部～体 部1/4	体部外面 に黒斑を 有する
68 八	広口鉢 (弥生土器) SD-202	14.0 —	—	外面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハ ケナデ（8本/cm）、タクタキ後ハ ケナデ。接合痕を3条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハ ケナデ（10本/cm）、ハケナデ。接 合痕を1条有する。	茶灰色 暗灰色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部1/4	
69 七	長脚甌 (弥生土器) SD-202	14.0 23.4 底径 4.4	底径 体部最大径 13.0	外面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハ ケナデ（10本/cm）、タクタキ後ハ ケナデ。接合痕を3条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後ハ ケナデ（10本/cm）、ハケナデ。接 合痕を1条有する。	淡茶褐色	1mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部の一 部欠損	体部外面 上部に黒斑を 有する
70 七	壺 (弥生土器) SD-202	— 底径 4.0	—	外面：ヘラミガキ 内面：ハケナデ（8本/cm）	暗茶褐色	7mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	内面に煤 付着
71 七	四上	— 底径 4.0	—	外面：ヘラナデ後ヘラミガキ 内面：ヘラナデ	暗茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	底盤のみ	外面に黒 斑を有する
72 七	四上	— 底径 4.2	—	外面：ヘラナデ 内面：ナデ	乳褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
73 七	四上	— 底径 4.8	—	外面：ヘラミガキ。接合痕を2条 有する。 内面：ヘラミガキ	茶褐色 茶灰色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	底盤のみ	外面に黒 斑を有する
74 七	甌 (弥生土器) SD-202	15.4 —	—	外面：ヨコナデ後ハケナデ（6 本/cm）、タクタキ（5本/cm）。接合 痕を2条有する。 内面：ヨコナデ、ハケナデ（6～ 7本/cm）	茶灰色褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～体 部1/7	外面に煤 付着
75 七	四上	12.4 —	—	外面：ヨコナデ、タクタキ 内面：ヨコナデ、ナデ	茶褐色	3mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部1/4	
76 七	四上	12.0 11.5 底径 4.5 体部最大径 11.8	—	外面：ヨコナデ、タクタキ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナ デ。接合痕を2条有する。	暗茶褐色 茶灰色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	1/2	外面に黒 斑を有する
77 八	四上	16.4 21.8 底径 4.3 体部最大径 17.7	—	外面：ヨコナデ、タクタキ（3本/ cm）後ヘラナデ。接合痕を2条有 する。 内面：ヨコナデ、ヘラナデ。接合 痕を2条有する。	暗茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	3/5	体部内面 下部に黒斑、外 面下部に煤 付着
78 八	四上	15.4 —	—	外面：ヨコナデ、タクタキ後ハケナ デ（10本/cm）。接合痕を1条有する。 内面：ヨコナデ、ハケナデ	茶灰色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部2/3	外面に煤 付着
79 八	四上	— 底径 4.0	—	外面：タクタキ（3本/cm）。接合痕 を1条有する。 内面：ハケナデ（5～10本/cm）。 接合痕を1条有する。	暗茶灰色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	底盤1/2	底部内面 に黒斑を 有する
80 八	小判鉢 (弥生土器) SD-202	12.7 7.8 底径 3.8	—	外面：タクタキ（4本/cm）後ヘラ ナデ、ユビオサエ 内面：ハケナデ（12本/cm）、ヘラ ナデ	明茶褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	1/4	完形
81 九	四上	17.6 —	—	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タ クタキ。接合痕を2条有する。 内面：ヨコナデ、ナデ。接合痕を 1条有する。	淡茶褐色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部～体 部1/4	
82 九	大型鉢 (弥生土器) SD-202	29.0 —	—	外面：ヨコナデ、ハケナデ。接合 痕を1条有する。 内面：ユビオサエ後ヨコナデ	明茶褐色 暗茶灰色	6mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～体 部1/6	体部内面 に黒斑を 有する
83 九	高杯 (弥生土器) SD-202	29.5 —	—	外面：ヘラミガキ。2条の凹窓を 有す。 内面：ヘラミガキ	茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/6	内面全周 に黒斑を 有する

遺物番号 採取番号	器種 出土地点	法量 (cm)	口径 (cm)	測量・技法	色調 外面 内面	粒 上	焼成	遺存状	備考
84 八	西杯 (弥生土器) SD-202	-	9.4	外面：ヘラミガキ。透孔を4箇所有する。 内面：シヨリ目、ヘラナデ	赤褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
85 八	同上	-	14.0	外面：ヘラミガキ。透孔を4箇所有するとおもわれる。 接合縫を1条有する。 内面：シヨリ目、ナデ	明褐色	3mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
86 八	広口盃 (弥生土器) SD-204	17.4	-	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ。口縁部外面に竹管浮文が貼付される。 内面：ヨコナデ、ナデ	褐灰色	2mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
87	同上	20.8	-	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ	灰茶色	1mm以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/6	
88	壺 (弥生土器) SD-204	-	4.6	外面：ナデ 内面：ヨコナデ	褐灰色	4mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
89	同上	-	4.2	外面：ヘラミガキ、ヘラナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ	淡灰茶色	1mm以下の砂粒を含む	良好	底部2/3	外面に黒斑を有する
90	壺 (弥生土器) SD-204	16.4	-	内外面共にヨコナデ	暗茶灰色 灰茶色	3mm以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/6	
91	小平台付き鉢 (弥生土器) SD-204	-	4.2	内外面共にナデ、ユビオサエ。内面に接合縫を1条有する。	暗灰茶色	6mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
92	広口盃 (弥生土器) SD-205	14.8	-	内外面共にヨコナデ	明褐色	4mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	外面に黒斑を有する
93	壺 (弥生土器) SD-205	-	4.8	内外面共にユビオサエ後ヘラナデ	赤褐色 灰茶色	3mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
94	同上	-	5.0	- 外面：ナデ、ユビオサエ - 内面：ヘラナデ、ユビオサエ	乳白色	4mm以下の砂粒を含む	良	底部のみ	
95	壺 (弥生土器) SD-205	21.0	-	外面：ヨコナデ、ハケナデ(6本/cm)、タキ(4本/cm) 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ハケナデ(5本/cm)	赤褐色	5mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部-体高上半1/4	外面に黒斑付着
96 八	広口盃 (弥生土器) SD-206	13.0	-	外面：口縁部上半に巻伏文、下半に列文を施す。 内面：ユビオサエ、ハケナデ	茶褐色	4mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
97	同上	13.4	-	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、ナデ	茶褐色	6mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	
98	高杯 (弥生土器) SD-206	14.2	-	内外面共にヨコナデ、ナデ	赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	良	杯底1/6	外面に黒斑を有する
100	長脚壺 (弥生土器) SD-201	9.6	-	同上	暗茶褐色 黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/4	
101 九	同上	10.3	-	外面：ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、ヘラナデ、ユビオサエ、ナデ。接合縫を2条有する。	暗茶褐色	4mm以下の砂粒を含む	良好	上半部のみ	
102	同上	18.0	-	内外面共にヨコナデ、ヘラナデ	茶褐色	4mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/4	
103 八	同上	-	16.6	外面：ヘラミガキ。表面にヘラ刻印を施す。内部にヘラ状工具によるとみられる3本の縫割を有する。 接合縫を1条有する。 内面：ハケナデ(12本/cm)。接合縫を2条有する。	暗茶褐色	5mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部のみ 欠型	

器物番号 同款番号	器種 出土地點	法螺 (cm)	口径 器高	調整・技法	色調 外面 内面	胎土	焼成	遺存度	備考
104 (弥生土器) SO-201	広口袋	31.2		外面: ヨコナデ。口縁端部に 3 条の凹線文を施す。 内面: ヨコナデ	赤褐色	3 mm 以下の砂粒を含む	良	口縁部 1/6	口縁端部 外間に墨斑を有する
105 九	筒上	28.4	底径 6.5	外面: 口縁部ヨコナデ以外は、唇 縫が苦しいため調整不均。口縁端 部に 3 構二筋の竹籠伝文を施す。 内面: ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	明褐色～赤 褐色	5 mm 以下の砂 粒を多量に含む	良	体部中央の 一部が欠損	全体的に 風化による 磨滅が 著しい
106 (弥生土器) SO-201	筒上	44.4		外面: ヘラミガキ、ユビオサエ 内面: ナデ	茶褐色	3 mm 以下の砂 粒を含む	良好	底部 1/2	
107	筒上	4.5		外面: ヘラミガキ、ユビオサエ 内面: ヘラミガキ	茶褐色	6 mm 以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	外間に墨 斑を有する
108	筒上	3.5		内外面共にナデ	淡茶褐色	3 mm 以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
109	筒上	4.8		外面: ヘラナデ 内面: ハケナデ (8 本/cm)	淡茶褐色	3 mm 以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
110 九 (弥生土器) SO-201	煙	13.8	体部最大径 16.1	外面: ヨコナデ、タクキ (3 本/ cm) 内面: ヨコナデ、ユビオサエ。接合 部を 3 斜面にする。	赤褐色	5 mm 以下の砂 粒を含む	良	口縁部～体 部 1/2	外間に墨 斑を有する
111	筒上	13.0		外面: ヨコナデ、ハケナデ。接合 部を 3 斜面にする。 内面: ユビオサエ、ヘラナデ	灰茶褐色	3 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
112	筒上	17.8		外面: ヨコナデ、タクキ (3 本/ cm) 内面: ヨコナデ、ユビオサエ	乳褐色	4 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～体 部 1/6	
113	筒上	4.8	底径	外面: タクキ 内面: ユビオサエ、ナデ	暗茶褐色	7 mm 以下の砂 粒を含む	良	底部 1/2	外間に墨 斑を有する
114	筒上	4.3	底径	外面: タクキ 内面: ヘラナデ	暗茶褐色	6 mm 以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	外間に墨 斑を有する
115	筒上	3.5		内外面共にナデ	茶褐色	4 mm 以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	内間に墨 斑を有する
116 (弥生土器) SO-201	高杯	22.8		外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヨコナデ	赤褐色 乳褐色	2 mm 以下の砂 粒を含む	良好	口縁部 1/6	
117 九	筒上	4.8		外面: ナデ、ユビオサエ。接合部 を 3 斜面にする。 内面: シボリ口、ナデ	茶褐色	5 mm 以下の砂 粒を含む	良好	脚部のみ	
118 (弥生土器) SO-202	釜	21.4	体部最大径 19.6	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ。11 文字で 2 箇の死穴文、2 箇の四脚 文を施す。 内面: ヘラミガキ	暗茶褐色	7. 2 mm 以下 の砂粒を僅かに含む	良好	1/4	
119 (弥生土器) SO-202	高杯	14.6	体部最大径 19.2	外面: 2 箇の死穴文、2 箇の四脚 文を施す。 内面: ヘラミガキ	赤褐色 茶灰色	密。2.5 mm 以 下の砂粒を僅かに含む	良好	1/11 部 1/6	
120 九	大型 (弥生土器) 土器底裏 1	38.5	底径 9.4	外面: 上半は腰状文、下半はヘラ ミガキ。口縁端部に刻突孔を有す。 内面: ユビオサエ、ナデ、ヘラミ ガキ。接合部を 3 斜面にする。	茶灰色	5 mm 以下 の砂粒を多量に含む	良好	4/5	
121 一〇	大型 (弥生土器) 土器底裏 1	30.6	底径 9.0	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ。体 部下半に深 8~10mm の打ち欠き孔 が散在する。 内面: ヨコナデ、ユビオサエ後 ナデ	暗茶褐色～ 黒褐色	密。5 mm 以下 の砂粒を僅かに含む	良好	口縁部 1/4	

遺物番号 図版番号	器種 出土地点	法量 (cm) 高さ	測定・校法	色調 外面 内面	粒上	地成	道存度	備考
124	大型鉢 (弥生土器) 土器群集2	54.4 体部最大径 55.0	外面: 上半は列乳文。3条の凹輪文、下半はユビオサエ、ヘラミガキ 内面: ヨコナデ、ハケナデ (5本/cm)。 縫合部を1条有する。	淡灰褐色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部3/4	
125	大型盤 (弥生土器) 土器群集2	27.4 体部最大径 28.2 底径 2.3	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ 内面: ヨコナデ、上半はヘラミガキ、下半はハケナデ (5本/cm) 後ヘラミガキ、ユビオサエ	暗灰褐色～深 褐色	W. 5mm以下 の砂粒を含む	良好	2/3	体部内面 に黒斑を 有する。
126	広口壺 (弥生土器) 第7層	16.0 —	外面: 扇状文、ハケナデ。口縁部 に刺突孔を有す。 内面: ヨコナデ	黒褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/8	内面に黒 斑を有す。
127	同上	16.4 —	外面: 扇状文。口縁部 に刺突孔を有す。 内面: ヨコナデ	灰茶色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/6	
128	同上	22.8 —	内外面共にヘラミガキ	墨灰色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/3	
129	同上	25.6 —	外面: 扇状文。口縁部に刺突孔 を有す。 内面: ヨコナデ	茶褐色	4mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部1/6	口縁部 内外面に 黒斑を有す。
130	同上	15.2 —	内外面共にヨコナデ。口縁部外 面には、2条の凹輪文と竹管浮文 を施す。	茶褐色	5mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/8	
131	同上	14.2 —	外面: ヨコナデ。口縁部外 面に、2条の凹文と竹管浮文を施す。 頭部には竹管压文を施す。 内面: ヨコナデ、ヘラミガキ、ユ ビオサエ	明褐色 乳褐色	6mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部4/5	
132	同上	22.2 —	内外面共にヨコナデ。口縁部外 面には、凹文、3箇一列の竹管 浮文を施す。	明褐色	5mm以下の砂 粒を含む	良	口縁部1/3	
133	同上	11.4 —	内外面共にヨコナデ。口縁部外 面に縫合痕を1条有する。	茶褐色	3mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	口縁部1/3	
134	同上	13.4 —	内外面共にヨコナデ	茶褐色	6mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/4	口縁部外 面上位に 黒斑を有 する。
135	同上	16.0 —	内外面共にヨコナデ。頭部内面に 接合痕を1条有する。	明褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良	口縁部1/3	
136	大型壺 (弥生土器) 第7層	32.6 —	外面: ヨコナデ、ハケナデ。口縁 部に3箇の凹輪文を施す。 内面: ヨコナデ、ナデ	明褐色	2mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部1/4	
137	盆 (弥生土器) 第7層	— 底径 4.0	外面: ナデ、ユビオサエ。1/2周 筋。 内面: ナデ	暗茶褐色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	底部のみ	
138	同上	— 底径 2.8	外面: ナデ 内面: ユビオサエ、ナデ	淡茶褐色 灰茶色	7mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	底部のみ	
139	同上	— 底径 4.4	外面: ユビオサエ、ナデ 内面: ナデ、ハケナデ。接合痕を 1条有する。	淡茶褐色	4mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	
140	同上	— 底径 4.3	内外面共にユビオサエ、ナデ	淡茶褐色	5mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	底部のみ	
141	同上	— 底径 5.0	外面: ナデ。底部中央に刺突孔を 有する。 内面: ユビオサエ、ナデ	淡茶褐色 暗茶褐色	4mm以下の砂 粒を多量に含む	良好	底部のみ	外面に黒 斑を有す。
142	同上	— 底径 4.2	外面: ユビオサエ、ナデ。接合痕 を1条有する。 内面: ハケナデ (5本/cm)	或乳灰褐色	3mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	

遺物番号 図版番号	名 標 出土地点	法面 (m) 高さ	調査・技 法	色調 外面 内面	胎 土	焼成	保存度	備 考
143	壺 (弥生土器) 第7層	— 底径 8.2	内外面共にユビオサエ、ナデ 底径	茶灰色 3mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	外面全域 に墨斑を 有する	
144	同 上	— 底径 4.2	外面：ハラミガキ 内面：ハケナデ（6本/cm）	暗茶褐色 暗茶灰色	3mm以上の砂 粒を含む	良好	底部のみ	外面に墨 斑を有す る
145	同 上	— 底径 6.2	外面：ハラミガキ、ユビオサエ 内面：ハラナデ、ユビオサエ	茶褐色 4mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	外面に墨 斑を有す る	
146	大型壺 (弥生土器) 第7層	— 底径 11.6	外面：ハラミガキ 内面：ナデ	浅乳褐色 底：2mm以下 の砂粒を含む	良好	底部1/2		
147 一一	壺 (弥生土器) 第7層	11.0 体部最大径 11.2	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タ クキ（8～10本/cm） 内面：ヨコナデ、ハラナデ	明褐色 4mm以下の砂 粒を含む	良好	上縁部～底 部1/6		
148	同 上	13.2	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、タ クキ後へラナデ。接合部を1条有 する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナ デ。接合部を1条有する。	暗茶灰色 3mm以下の砂 粒を含む	不規	口縁部1/2	外面に墨 斑を有す る	
149	同 上	14.2	外面：ヨコナデ、タクキ（4本/ cm） 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後 ハラナデ。接合部を1条有する。	明褐色 3mm以下の砂 粒を含む	良好	上縁部～底 部1/6		
150	同 上	17.4	外面：ヨコナデ、タクキ 内面：ヨコナデ、ハケナデ	暗茶灰色 3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～底 部1/6		
151	同 上	15.4	外面：ヨコナデ、タクキ 内面：ヨコナデ、ハラナデ。接合 部を1条有する。	茶褐色 4mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～底 部1/6	外面に墨 斑を有す る	
152 一一	同 上	15.6	外面：ヨコナデ、タクキ（3本/ cm） 内面：ヨコナデ、ハケナデ	赤褐色 2mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～底 部1/4		
153	同 上	22.0	外面：ヨコナデ、タクキ（3本/ cm）。接合部を3条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナ デ。接合部を2条有する。	茶灰色 3mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～底 部1/7		
154	同 上	22.0	外面：ヨコナデ、ハケナデ。接合 部を2条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ナ デ。接合部を2条有する。	茶灰色 3mm以下の砂 粒を含む	良	上縁部～底 部1/6	腹部内面 に墨斑を 有する	
155	同 上	11.8	外面：ヨコナデ、ハラミガキ。口 縁部に回線文を1条有する。 内面：ヨコナデ、ユビオサエ後 ハラミガキ	深褐色 底：2mm以下 の砂粒を僅か に含む	良好	口縁部～底 部1/4	墨斑系	
156	同 上	11.4	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ハ ケナデ（8～10本/cm） 内面：ヨコナデ、ユビオサエ、ユ ビオサエ後へラナデ	暗茶褐色 6mm以下の砂 粒を含む	良好	口縁部～底 部1/7	山陰系	
157	同 上	— 底径 4.2	外面：タクキ 内面：ナデ	暗茶褐色 5mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	外面に墨 斑を有す る	
158	同 上	— 底径 4.4	外面：タクキ（3本/cm） 内面：ハラナデ	茶褐色 4mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ		
159	同 上	— 底径 3.6	外面：タクキ 内面：ユビオサエ	明褐色 3mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ		
160	同 上	— 底径 3.6	外面：タクキ。底部穿孔。 内面：ナデ	茶褐色 4mm以下の砂 粒を含む	良好	底部のみ	外面に墨 斑を有す る	

遺物番号 回収番号	器種 出土地点	法量 (cm) 高さ	剖面 形状	測定・技法	色調 外面 内面	地 上	施成	遺存度	備考
161	壺 (弥生土器) 第7層	— 底径 4.2	— —	外面: タタキ 内面: ハケナデ	茶褐色	3 mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
162	同 上	— 底径 5.0	— —	外面: タタキ (3本/cm) 内面: ハラナデ	明褐色 暗茶灰色	4 mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
163	同 上	— 底径 5.0	— —	外面: タタキ (3本/cm) 内面: ユビオサエ	暗茶褐色	2 mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	外面上風化を有する
164	同 上	— 底径 2.6	— —	外面: タタキ 内面: ナデ	茶褐色	5 mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
165	同 上	— 底径 4.4	— —	外面: タタキ 内面: ハラナデ	茶褐色	6 mm以下の砂粒を含む	良好	底部1/4	
166	高杯 (弥生土器) 第7層	20.6 —	— —	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ、ユ ビオサエ、ナデ 内面: ヘラミガキ	暗茶灰色	3 mm以下の砂粒を多量に含む	良好	口縁部1/7	
167	同 上	— —	— —	外面: ヨコナデ、ヘラミガキ 内面: ヨコナデ	茶褐色	3 mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/6	口縁部外 面上風化を有する
168 —二	鉢 (弥生土器) 第7層	20.4 —	— —	外面: 刃立文、波状文、羅文文。 口縁部に円形浮き點付ける。 内面: ナデ	茶灰色	4 mm以下の砂粒を含む	良好	口縁部1/8	外面上 風化を有する
169	小形台付き鉢 (弥生土器) 第7層	12.8 —	— —	外面: ユビオサエ、ナデ、タタキ。 接合痕を1条有する。 内面: ユビオサエ、ナデ、ヘラナ デ。接合痕を1条有する。	暗茶褐色	密。2 mm以下の砂粒を含む	良	口縁部1/6	
170	同 上	— 底径 4.6	— —	内外面共にナデ。	明褐色	3 mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
171	同 上	— 底径 3.4	— —	内外面共にユビオサエ、ナデ。	茶灰色	3 mm以下の砂粒を含む	良好	底部のみ	
172	同 上	— 底径 3.0	— —	内外面共にユビオサエ後ヘラナデ。 内面側縁。	明褐色	3 mm以下の砂粒を多量に含む	良好	底部のみ	
173 —二	脚台部分 (弥生土器) 第7層	— 底径 8.4	— —	外面: ユビオサエ後ヘラナデ。接 合痕を1条有する。 内面: シボリ目、ユビオサエ、ヘ ラナデ	赤褐色	3 mm以下の砂粒を含む	良好	脚部1/4	
174	同 上	— 底径 11.0	— —	外面: ヘラミガキ、ヨコナデ 内面: ナデ	茶褐色 茶灰色	3 mm以下の砂粒を含む	良好	脚部1/4	
175 —二	飯指器 (土製品) 第7層	4.8 11.3 体部最大径 6.8	— — —	内外面共にユビオサエ、ナデ。II 層部底面に一孔を穿つ。	茶褐色	密。2 mm以下の砂粒を僅かに含む	良好	穴形	

## 第3章まとめ

今回の調査では、弥生地代中期の墓域・後期の集落域、古墳時代前期の自然河道・後期の集落域、鎌倉時代の生産域、室町地代の集落域といった概ね4時代に渡る遺構面を検出した。以下、時代別に概観したい。

### 〈弥生時代〉

中期では上器棺墓2基を検出するに至ったが、遺構検出状況や土器棺の規模からその性格について「山賀遺跡」や「瓜生堂遺跡」<sup>註8</sup>のような方形周溝墓にみられる家族墓的な性格をもつものと考えるよりは、単独的に土壙墓として集落域から離れた地に埋葬された幼少児の墓と理解したい。さらに幼少児の生産した集落が、後期の居住地形成の際に失われた地、つまり北地区にあったとする蓋然性が強い。それは北地区の調査状況から第7層の後期の遺物包含層内に中期の遺物が混在していることや、後期の遺構内遺物にも中期の遺物が混入し、中期の集落域を踏襲した様相が窺われるところにある。また北地区南東部において検出した自然河道N R-201は後期遺構として判断したが、埋積土内の中期の遺物片の混在からすでに中期において、北地区的集落域と南地区的墓域とを画する溝の役割を果たしていた可能性もあり得る。今回検出した土器棺については畿内周辺の調査例からみて、成人の内葬墓とは区別されるものである。上器棺には、棺身として今回の壺以外に壺が使用される例もあるが稀である。また、棺の納置は資料によると近畿地方では、直立位に据えるものと今回のように20~40度程度の斜角で横寝させる<sup>註9</sup>2つの型式が確認されており、後者の横寝が圧倒的に多くを占める。横寝の納置については、九州北部にみられる成人用大型甕棺からの系譜をもつものであろうか。

後期の集落については上述したように南北両地区において、中期の集落および墓地を削平して形成されたものと考えられる。遺構内容から、北地区では溝の占める割合が多いこと、落ち込みや溝内に使用不能となった土器の排斥箇所がみられること、柱穴ともなるべき要素をもつ小穴が希薄ながらも南地区にみられることなどから、本調査の段階では居住域の中核部は調査地でいうと南部側にあり、北部側はその縁辺の地と解釈したい。また、南地区的中央部、言い換えると前時代の土器棺があった周囲は少し空閑地になっていることから、後期の人々が意識的に住居築造を避けたものかあるいは祭祀場としての広場であった感がもたれる。

### 〈古墳時代〉

当該期以降の生活面と判断しえる遺構は北地区にのみみられ、南地区の方では近世以降的人為的削平・整地等によって失われる。古墳時代では、初頭（庄内式期）の自然河道N R-101と後期の不明遺構S X-101・102があるが、遺構および遺物の希薄さから積極的な知見を記述

するまでには至らない。しかし、上層の鎌倉時代の耕起の際に搅拌されたとみなされる埴輪片の出土は、当地付近または近接して古墳が存在したことを明示する。

#### <中世>

鎌倉時代に比定される畠地または水田に伴う集排水溝と思われる溝状遺構を検出した。また北地区の北西部では、井戸S E - 101および住居を構成する柱穴を想定させる小穴を検出した。鎌倉時代の生産域は平断面の観察状況から室町時代にはいっても踏襲されるが、一部では居住域へ移行する様相が窺える。

以上概ね4時代に渡る様相を概観したが、今回の調査で特筆すべき事項としては、南地区における弥生時代中期の墓域から後期の集落域への移行である。中期においては既述したように北地区が集落域であって、南地区が住居地としても生産域としても利用されない場所として、幼少児の墓地が形成されたと考えたい。やがて後期に入ってそれまで墓域として占有されていた土地が何等かの理由により、居住地としての変更を余儀なく迫られたことが想像できよう。同時期内において成人の墓であれ、幼少児の墓であれ、一度作られた墓が、住居域や生産の場として破壊されることは人々が墓としてその存在を意識している間はありえない。しかし、今回のように時代の変遷によって遺跡の性格が変貌することが確認できたことは、その時代画期の人々の思想及び精神構造を考える上で非常に貴重な成果が得られたと言えよう。いずれにせよ、当遺跡における調査は緒についたばかりであり、弥生時代中期から後期への社会構造の変化、平安時代初期における神宮寺跡の解明、中世における集落域と生産域の位置的関係等々、現段階においては考古学的に未知なる部分が多い。これら究明課題のひとつひとつが今後の調査によって漸次的に解明されることに期待したい。

#### [付記]

本調査地北東の一段小高いところに、燕の帰化族で常世連の氏族祖神を奉ったとされる式内社「常世岐姫神社」がある。常世連は応神・仁徳天皇の時代、いわゆる大和王権と朝鮮半島との交流が盛んなるころ、染色の技術集団として日本に移り住んだ赤染氏の一派である。赤染氏は河内・遠江・因幡などに居住するが、とくに河内大原郡（八尾市・柏原市）は渡来人が多く移住し、当地は常世連氏の中心的居住地であったとされる。常世岐姫神社は現在「式内御產神 八王子神社」の名で、安産の神として人々から厚く信仰されている。



写真2 調査地〈左下〉と  
常世岐姫神社〈右上〉(南西から)

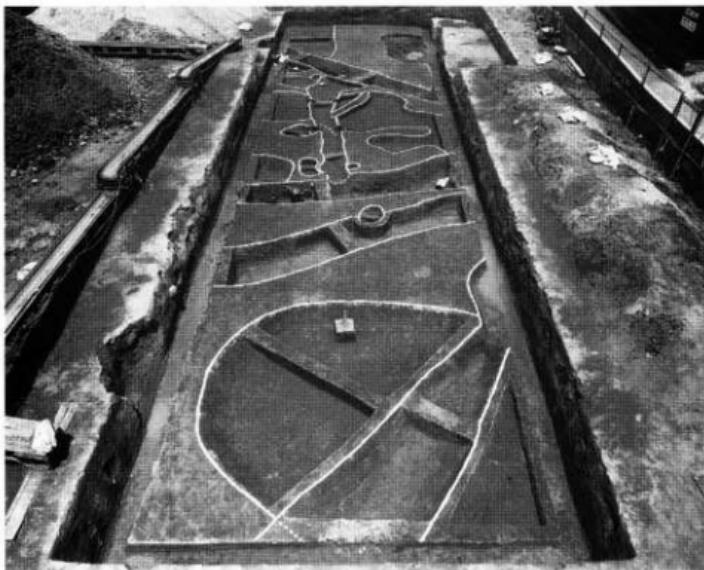
註

- 註1 山上 弘 1994.3「神宮寺遺跡発掘調査概要 -八尾市神宮寺4丁目所在-」大阪府教育委員会
- 註2 菅原正明 1990.12「中近世土器の基礎VI 付編 80年代の研究成果と今後の展望(「瓦器」は何を語るか)」日本中世土器研究会
- 註3 川西宏幸 1978『円筒埴輪総論』考古学雑誌 64-2
- 註4 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 註5 原田昌則 1993「II 久宝寺遺跡第6次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37
- 註6 佐藤 隆 1992.3「第Ⅱ章 第2節 ii)長原遺跡における平安時代の土器編年」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告V 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』財團法人大阪市文化財協会
- 註7 横田賢次郎・森田勉 1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』九州歴史資料館研究論集4
- 註8 中西靖人 1984『山賀(その3) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財團法人大阪文化財センター
- 註9 中西靖人 1980『亘生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会 財團法人大阪文化財センター
- 註10 金関魁／佐原寛 1987『弥生文化の研究 8 繕りと畳と表し』雄山閣
- \*弥生土器の形態および時期的評価については、『弥生土器の様式と編年 近畿編 I』木耳社、寺沢薰・森岡秀人 1989』を参考させて頂いた。また、神宮寺遺跡における地理的・歴史的事項については、『八尾市史(前近代)本文編』編集／八尾市史編集委員会 1988』および『新版 八尾の史跡』編集・発行／八尾市市民公室広報課 八尾市郷土文化研究会 1987』から引用させて頂いた。

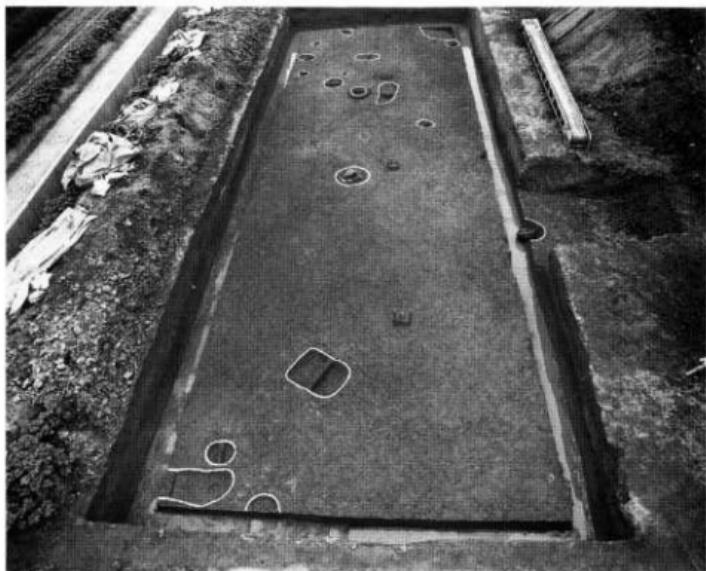
図 版



北地区 第1造構面全景（南から）



北地区 第2造構面全景（南から）



南地区 遺構面全景（北から）



SE-101断ち割り（東から）



SE-101完掘状況（東から）



北地区 第2造構面北部（西から）



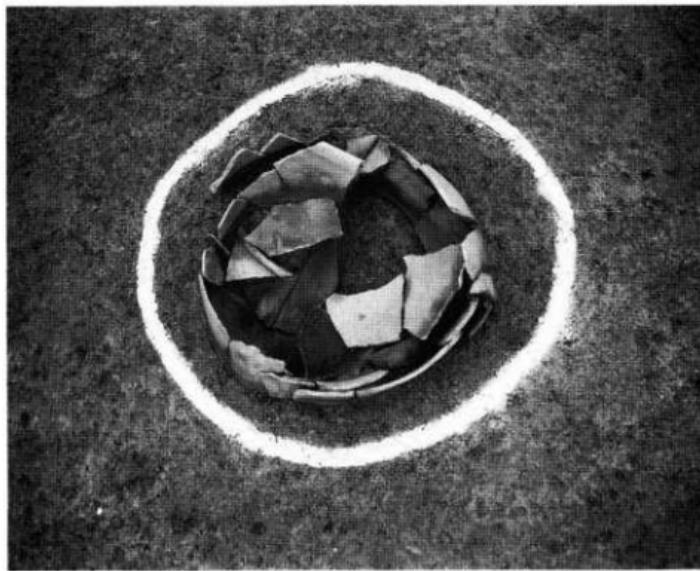
北地区 第2遺構面中央部（西から）



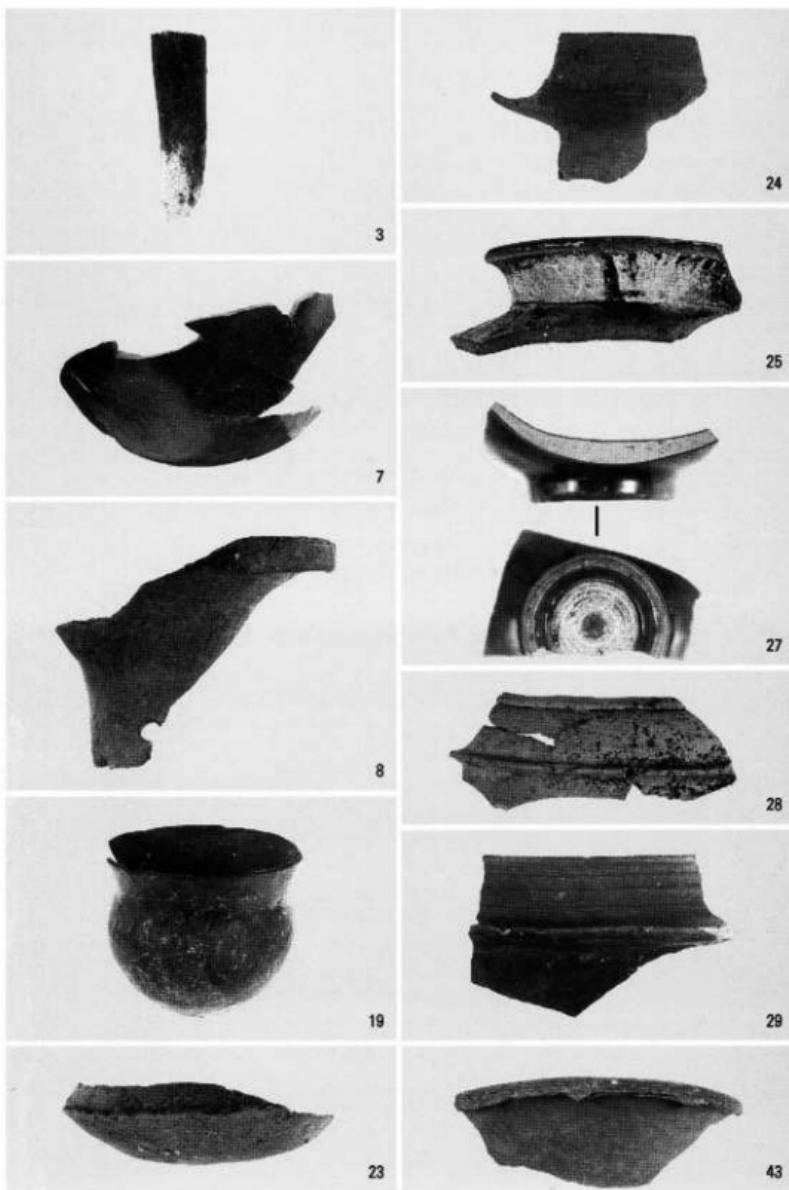
SD-202西部 土器集積（西から）



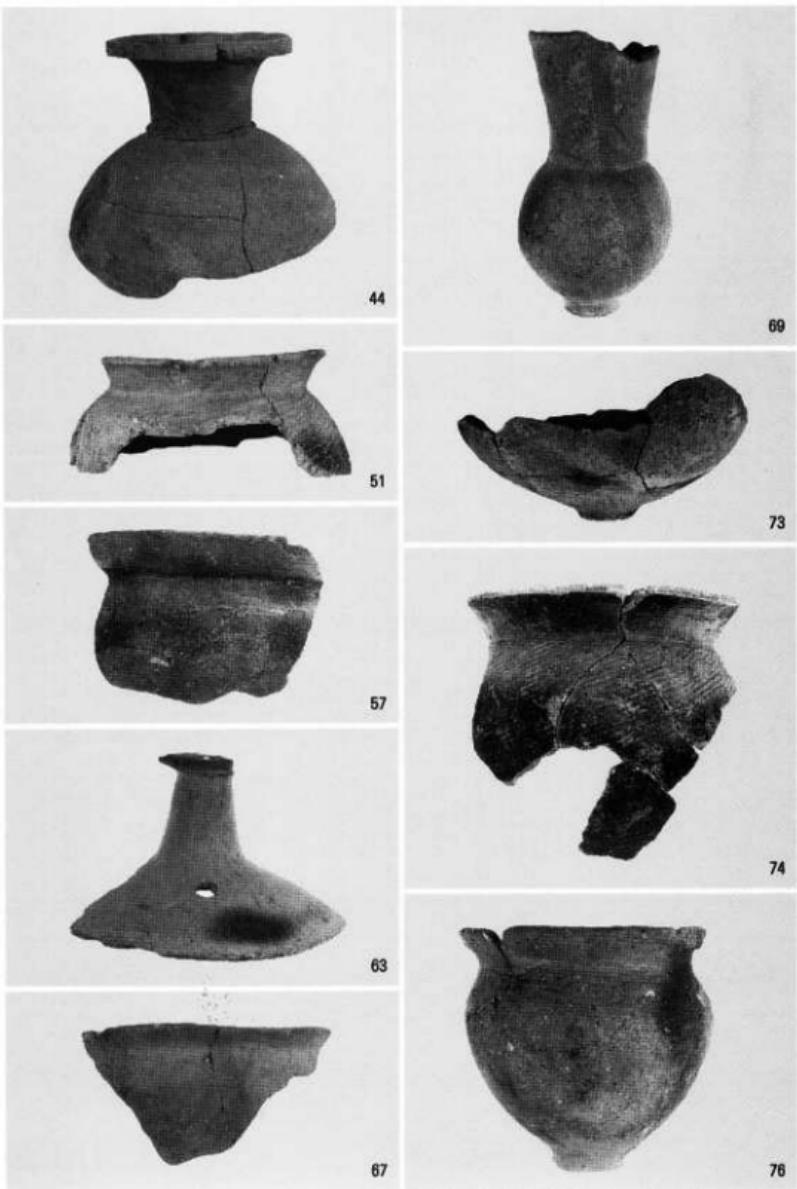
土器棺墓 1 检出状況（東から）



土器棺墓 2 检出状況（北から）



SE-101 3・7・8、NR-101 19、第6層 23・24・25・27・28・29、SD-201 43



SD-201 44・51・57・63・67、 SD-202 69・73・74・76



77



85



78



86



96



80



103

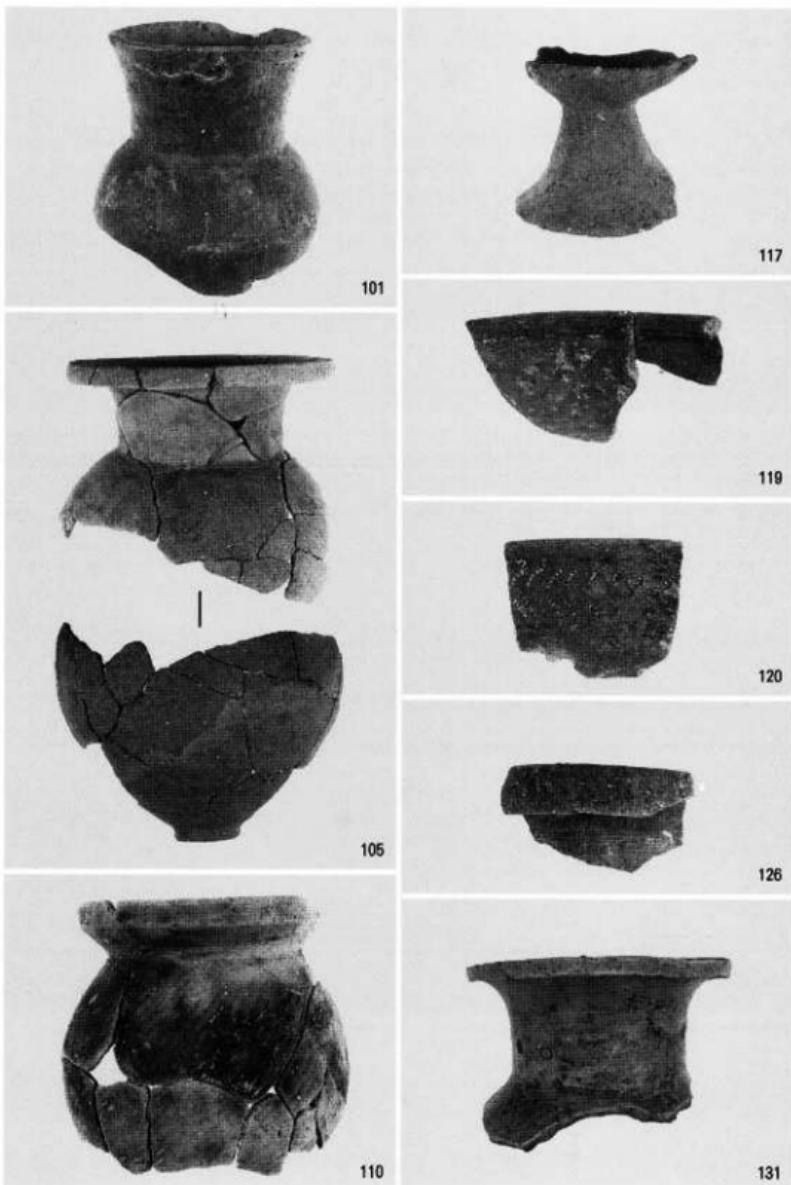


84



同上

SD-202 77·78·80·84·85、SD-204 86、SD-206 96、SO-201 103



S O - 201 101 • 105 • 110 • 117, S O - 202 119 • 120, 第 7 層 126 • 131



122



123

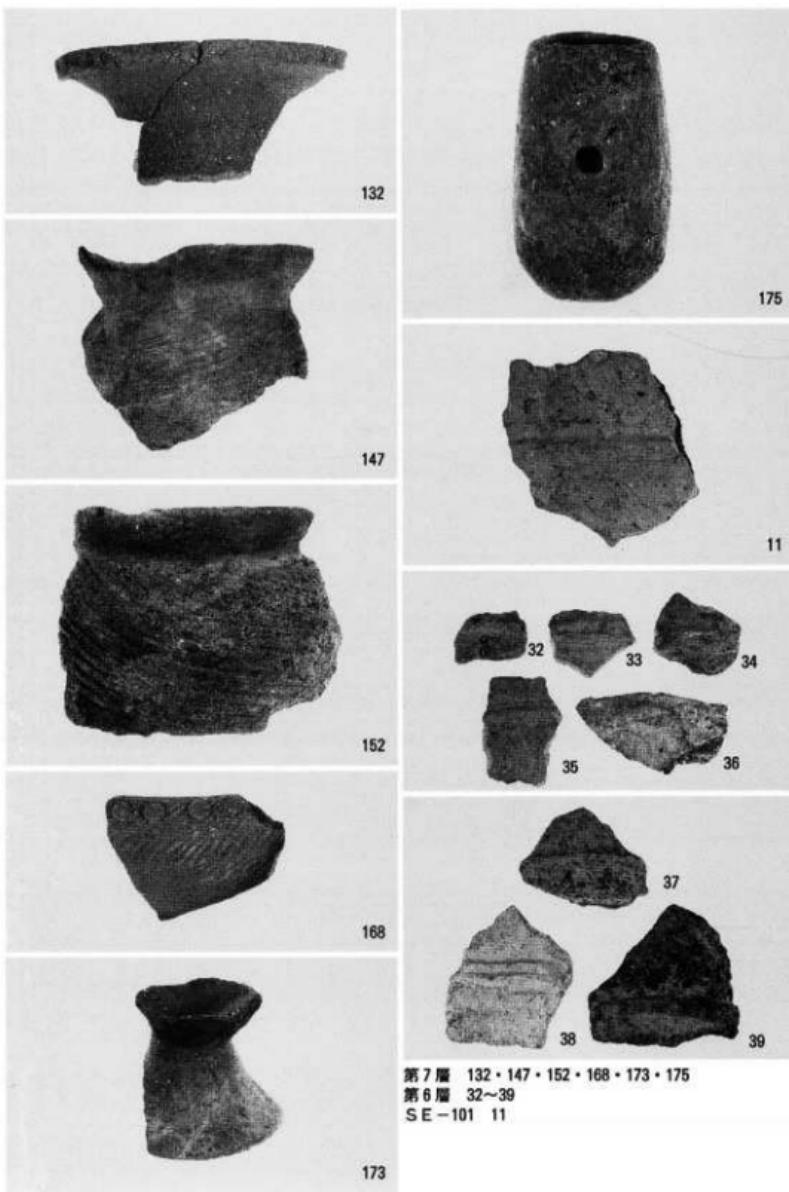
土器棺墓 1 122・123



124



125



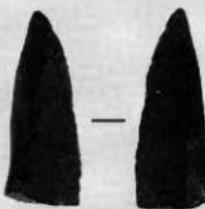
第7層 132・147・152・168・173・175

第6層 32~39

S E - 101 11



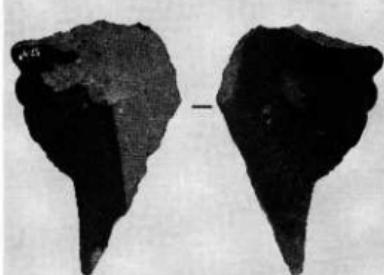
99



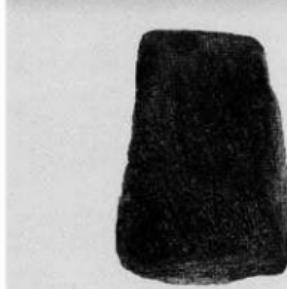
121



118

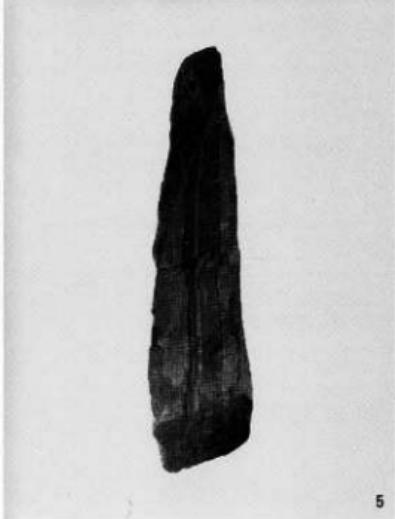


178

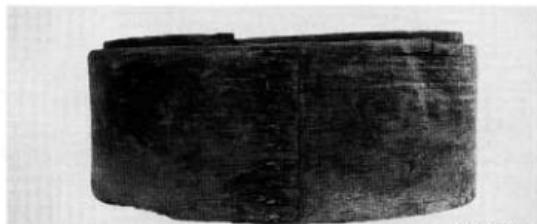


4

SD-206 99  
SO-201 118  
SO-202 121  
第7層 178  
SE-101 4・5



5

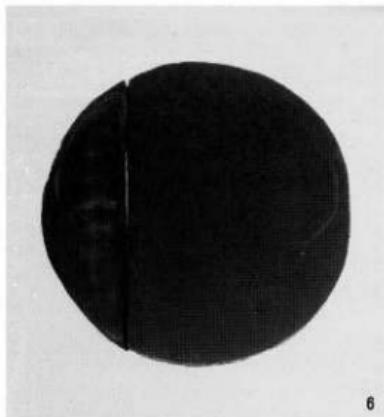


12 (上段)



13 (下段)

SE-101 曲物



6

SE-101 曲物容器底板



14

SP-104 柱根

IV 花岡山遺跡第2次調査（HO91-2）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字東音寺637-1～2、688～640、641-1、794-1の大阪経済法科大学で実施した、学校施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する花岡山遺跡第2次調査(HO91-2)の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋38号 平成3年6月10日付)に基づき、学校法人人阪經濟法律学園 理事長 金澤俊行氏から委託をうけて実施したものである。
1. 現地調査は、平成3年7月3日から7月24日かけて成海佳子を担当者として実施した。調査面積は、指示面積(建築予定面積)約650m<sup>2</sup>のうち約220m<sup>2</sup>である。
1. 内業整理は、調査に並行して隨時行い、平成4年3月に終了した。
1. 現地調査および内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである(五十音字順)。  
磯上サカエ・坂下 学・濱田千鶴・船倉早苗・宮崎寛子
1. 出土遺物のうち屋瓦の一部については、福永信雄氏(東大阪市教育委員会)にご教示いただいた。記して感謝いたします。
1. 方位は磁北である。図面の縮尺については、ことわりのないものに限り、遺構は50分の1、遺物は4分の1である。

## 本　文　目　次

第1章 はじめに	81
第2章 調査の方法と経過	82
第3章 調査概要	83
第1節 地区割り	83
第2節 基本層序	83
第3節 検出遺構と出土遺物	84
1) 1区の概要	84
2) 2区の概要	88
3) その他の出土遺物	97
第4章 まとめ	98
付　表	99

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図	81
第2図 調査区設定図	82
第3図 調査区北側壁面図	83
第4図 SK-1・SK-2 平断面図	85
第5図 SK-3 平断面図	86
第6図 SK-1・SK-2・SK-4 出土遺物実測図	87
第7図 SK-5～SK-7・SP-6・SP-7・SD-11～SD-13・ SD-17～SD-20 平断面図	89
第8図 SK-8 平断面図	90
第9図 SK-9 平断面図	90
第10図 SK-11・SK-12・SP-14・SD-21・SD-22 平断面図	91
第11図 SK-14 出土遺物拓本・写真	92
第12図 SK-13～SK-15 平断面図	93
第13図 SK-6・SK-9・SK-11・SK-12・SK-15 出土遺物実測図	94
第14図 SO-2 山上遺物実測図	96
第15図 その他の出土遺物実測図	97
第16図 調査区平面図	103・104

## 図版目次

図版一	1区全景(南から)	2区全景(南から)		
図版二	調査区遠景(西から)	西の山古墳を望む	1区遺構検出状況	SK-1 (東から)
	SK-2 (東から)	SK-3 (西から)	SK-4 (東から)	SO-1 (南から)
図版三	SK-6 西半 (東から)	SK-6 束半 (東から)	SK-8 ほか (北から)	
	SK-11 ほか (南から)	SK-12 (南から)	調査風景	
図版四	SK-13 ほか (北から)	SK-14 (西から)	SK-15 (東から)	
	SO-2 (北から)	SD-21 (北から)	SD-22・SD-23 ほか (南から)	
図版五	SK-1・SK-2 出土遺物			
図版六	SK-4・SK-6・SK-9 出土遺物			
図版七	SK-12・SK-15・包含層山上遺物			
図版八	SO-2 山上遺物			